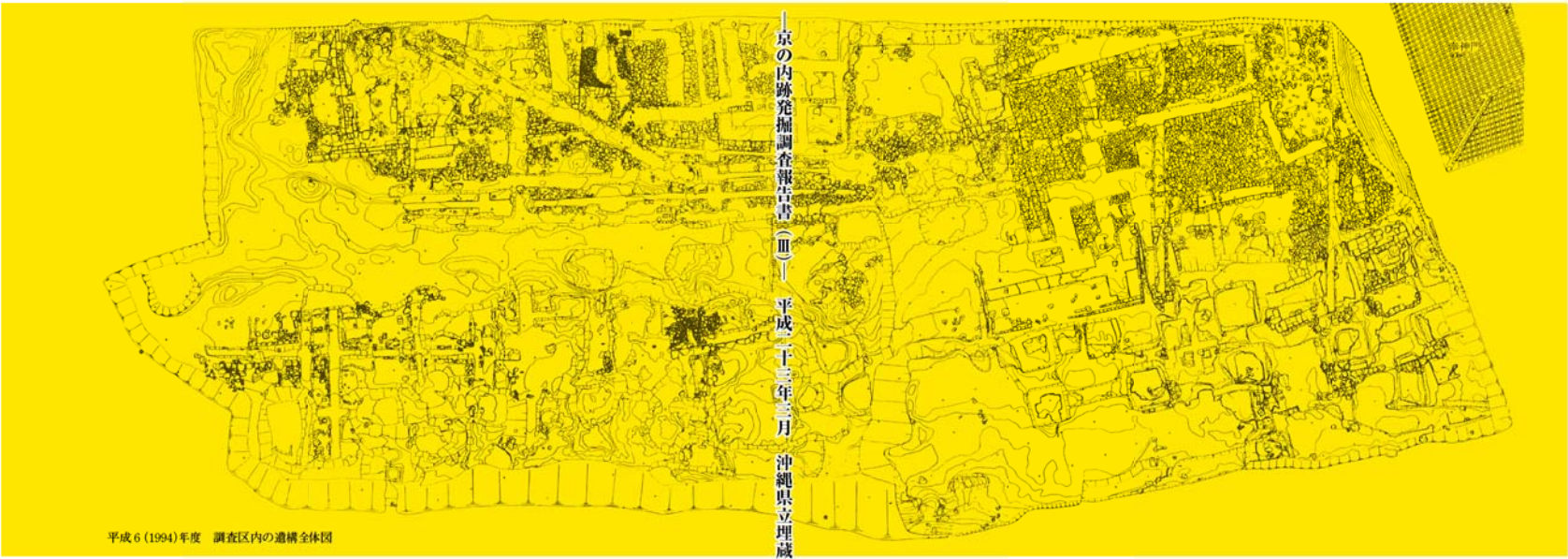
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第56集

首　里　城　跡

－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－

平成6年度調査の遺構編



平成６（1994）年度　調査区内の遺構全体図

平成23（2011）年　3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡

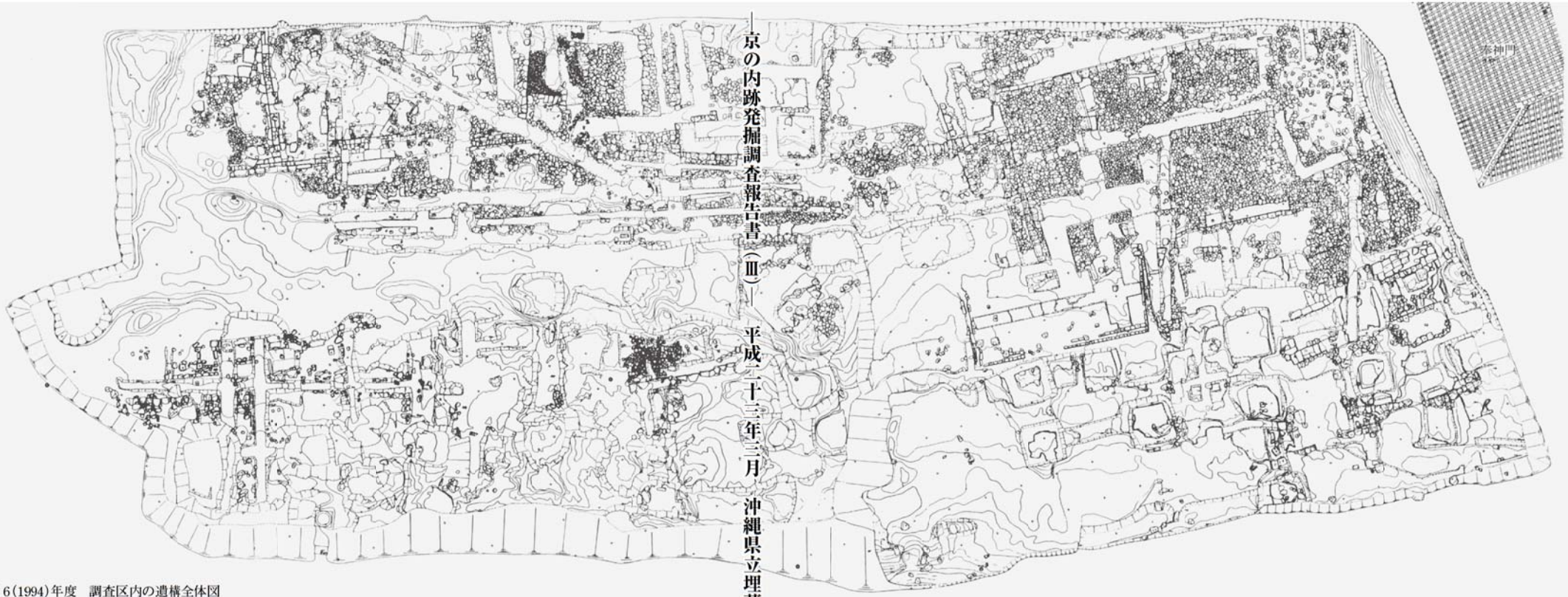
―京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）―　平成二十三年三月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第56集

首　里　城　跡

－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－

平成6年度調査の遺構編



平成６(1994)年度　調査区内の遺構全体図

平成23（2011）年　3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首里城跡

―京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）―

平成二十三年三月　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第56集

首　里　城　跡

－京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－
平成6年度調査の遺構編

平成23（2011）年　3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

戦後まもなく連合国軍総司令部、いわゆるGHQ（General Head Quarters）に因って、本土と南西諸島の行政分離宣言がなされ、昭和21（1946）年に米軍政府が成立した。このような中で、琉球政府文化財保護委員会によって昭和30（1955）年11月29日付で首里城跡は、史跡に指定される。その後、本土復帰の昭和47（1972）年5月15日に国指定史跡として指定されています。

更に、平成12（2000）年12月2日には首里城跡を含む9資産がユネスコ世界遺産条約に基づき「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として「世界遺産」（文化遺産）に登録されている。丁度、今年度に世界遺産登録10周年目を迎え、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」世界遺産登録10周年記念事業（実行委員会事務局：県教育庁文化課。後援：内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所）が、9資産を中心に各種イベント（講演会、シンポジウム、リレー講座、出土品巡回展）や関連イベント（首里城公園 中秋の宴、首里城祭、現代版組踊「肝高の阿麻和利」ほか）等が展開されている。

さて、首里城跡は500有余年に亘って琉球王国の王城として、沖縄の歴史・文化の中心的な核となって、個性豊かな沖縄の歴史と文化の礎を築き上げてきたグスクとして国内外に知られています。

首里城は沖縄独自の建築技術や石積みなどの土木技術の粋を集めて完成された県内最大規模のグスクであったが、太平洋戦争末期に起きた沖縄戦による戦過で旧国宝（昭和8年1月23日指定）であった首里城正殿、歓会門、瑞泉門、白銀門などの多くの建造物や城壁の石積みはことごとく破壊され、消失しました。

戦災で灰燼に帰した首里城跡には、琉球大学が昭和25（1950）年に創設され、昭和57（1982）年までの32年間キャンパスとして使用されました。

県民の首里城復元に対する熱い期待と要請により昭和60（1985）年度から沖縄開発庁（現在の内閣府）、建設省（現在の国土交通省）、文部省（現在の文部科学省）、沖縄県によって首里城跡の復元整備事業が開始され古都首里城の歴史的風土にふさわしい区域として今日まで継続的に遺構確認調査に基づく復元整備が進められています。

首里城跡の復元整備の中で平成4（1992）年度には首里城正殿の復元と北殿、南殿、奉神門などの施設が再建され、在りし日の姿（1712年の首里城再建を始めとする18世紀前半）を現在に写し出す形で首里城公園として一部公開されました。その後、平成11（1999）年に白銀門、平成12（2000）年が系図座・用物座及び二階御殿、平成15（2003）年には京の内、平成19（2007）年が書院・鎖之間などの新たな建造物群が復元された。特に書院・鎖之間については、平成21（2009）年7月23日付で国の名勝として指定されています。

本書に収録された首里城の「京の内」と称された区域は、正殿、北殿、南殿、奉神門の存在する政治的建造物空間が集中する区域とは離れた内郭の南西地域にあり、文献や伝承に拠ると首里城の聖域的空間として国王即位の儀式をはじめ琉球王国の重要な儀式や祭祀がおこなわれた空間として位置付けられています。また、京の内には、首里城築城以前に古いグスクがあった場所としても考えられています。このような中で、「京の内」跡の復元整備事業に必要となる位置確認、規模、遺構の変遷などを解明する目的で平成6（1994）年度から平成9（1997）年度まで継続的に発掘調査が沖縄県教育委員会によって実施されました。この調査で平成6年度に1459年の火災で消失した倉庫跡が発見され、当時の琉球王国の海外交易によって将来された中国をはじめとする東南アジア（タイ、ベトナム）、本土を含めた各地域の陶磁器1,162個体と多くの金属製品やガラス製品が確認されました。これらの陶磁器や金属・ガラス製品は、平成12年6月27日付で国の重要文化財（考古資料の部）「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器518点　附一、金属製品 一括　附一、ガラス玉 一括」として戦前・戦後をとおして、沖縄県ではじめて指定されました。

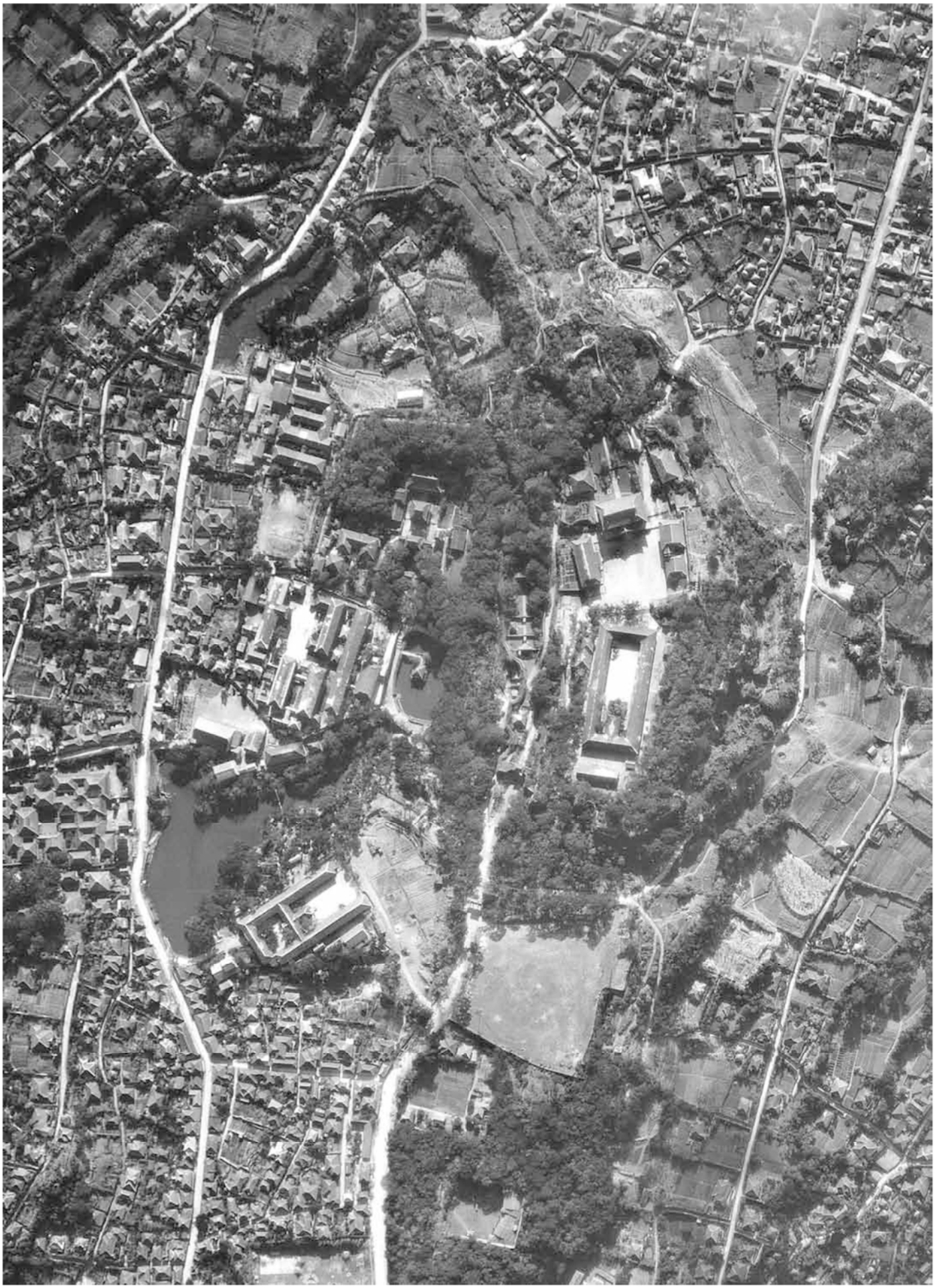
さて、今回の報告書に掲載した内容は、平成6年度の調査より検出された遺構を網羅したものであります。本書が首里城跡の城郭研究や考古学、民俗学、歴史の各研究分野に寄与することができれば幸いに存じます。

末尾ながら内閣府 沖縄総合事務局 沖縄記念公園事務所をはじめとする関係機関、並びに発掘調査や遺構の解釈および出土品の分析指導にご協力をいただきました関係各位に深く敬意を表すとともに心より厚く御礼申し上げます。

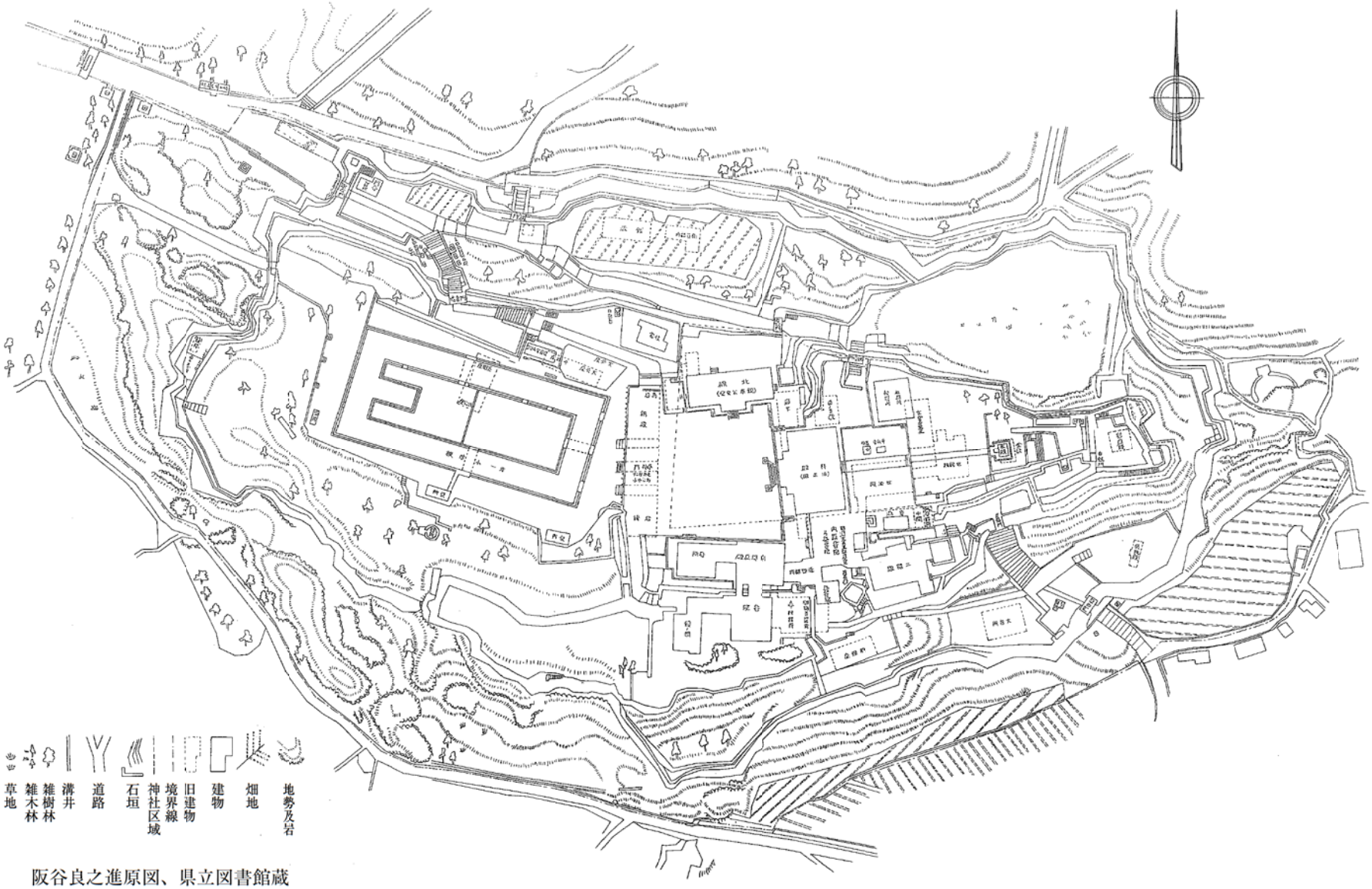
平成23年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　守内　泰三

巻首図版1　首里城航空写真（1944 年）の米軍撮影
（①首里城跡、②真玉橋、③豊見城グスク、④御物グスク、⑤屋良座森グスク、⑥三重グスク、⑦硫黄グスク）



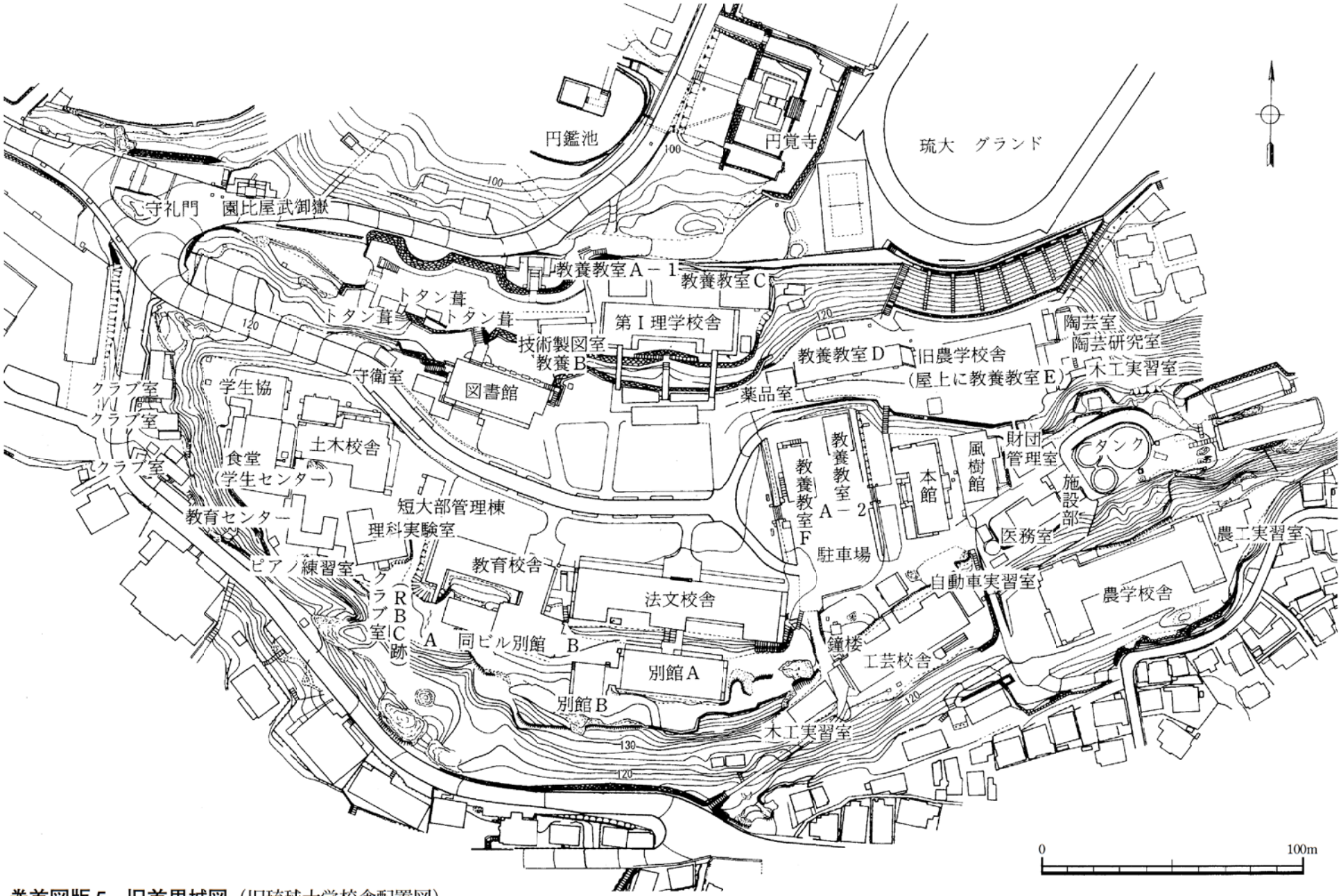
巻首図版2　1945年4月2日　米軍撮影（CV20-103-63）の首里城周辺
（財団法人沖縄県文化振興会　公文書管理部　史料編集室　所蔵）



阪谷良之進原図、県立図書館蔵

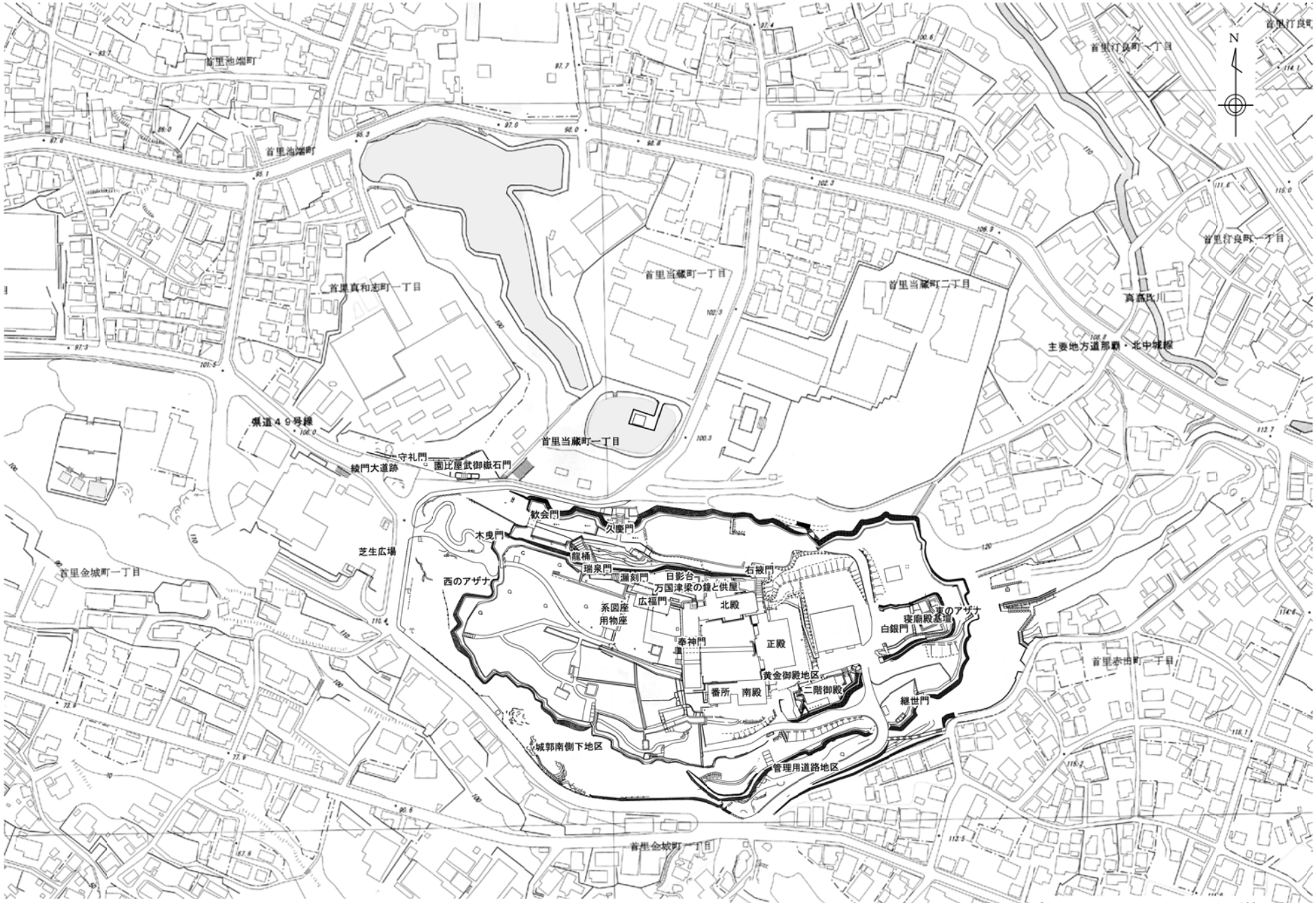
巻首図版 3　首里城平面図（昭和 6 年頃）

巻首図版 4　1984 年 国土地理院撮影（OK84-IX C-12-8）首里城跡と琉球大学



巻首図版５　旧首里城図（旧琉球大学校舎配置図）

巻首図版 6　2004 年 国土地理院撮影（COK2004-IX C-8-7）首里城跡



巻首図版7　首里城跡周辺地形図（平成19年　株式会社グラフィカ作成の1/2500に沖縄県教育庁文化課作成の「首里城跡測量図」を重ねて作成）

巻首図版8　2009年 首里城跡の航空写真（株式会社グラフィカ所有）

巻首図版９　上段：調査区全景（東側より望む）
　　下段：調査区の東半分を望む

巻首図版 10　上段：調査区の西半分を望む
下段：調査区西側遺構の状況

巻首図版11　上段：調査区西側（B～D-14～17グリッド）を望む
下段：調査区中央（B～D-12～15グリッド）を望む

巻首図版 12　上段：調査区を南側より望む
下段：調査区東側（B～D－10～14 ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む

巻首図版 13　上段：調査区東側（B～D－10 ～ 12 グリッド）を望む
下段：調査区東側（B～D－10・11 グリッド）を望む

巻首図版 14　上段：調査区東側（B・C－10～13グリッド）を望む
下段：調査区中央（B～D－14・15グリッド）を望む

巻首図版 15　調査区中央（B～D－13・14グリッド）を望む

巻首図版 16　上段：調査区西側（B・C－15～17グリッド）を望む
下段：調査区中央（C・D－13～15グリッド）を望む

巻首図版 17　上段：調査区西側（C・D－15・16グリッド）を望む
下段：調査区西側（C・D－15～17グリッド）を望む

例　言

1　本事業は国営首里城公園整備事業に伴うもので、内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所からの委託（受託）を受けて沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括及び業務調整等は所管課の沖縄県教育庁文化課が行い、発掘調査及び資料整理等については沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

2　本報告書は、平成６年度に実施した国営首里城公園（約４ha）の京の内北側地区（調査面積約 2,000㎡）で検出された遺構を網羅したものである。出土品の報告については、改めて報告するが、今回報告した遺構と出土品との時代関係について整合性は諮っていない。従って今後、遺構の時代観において変更もあり得る。

3　遺構の時代観は、平成９年度刊行の「首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）―」で遺構の数を 46 基と報告した。この報告書を基本にして、平成 12 年度刊行の「特別企画展 首里城京の内展―貿易陶磁からみた大交易時代―」及び平成 20 年度刊行の「首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）―」において遺構数を 39 基に整理をおこない本報告に至っている。

4　本報告書で掲載した航空写真は、国土地理院の 1944 年米軍撮影（3PR/5M3 Ⅳ XXIBC JAN-3F/152.4 REST）、1984 年（OK84-IX C-12-8）、2004 年（COK2004-IX C-8-7）を複写掲載した。2009 年首里城跡の航空写真は、株式会社グラフィカの航空写真を複写掲載した。1945 年４月２日米軍撮影（CV20-103-63）の航空写真は、沖縄県教育委員会史料編集室所蔵を複写掲載した。

　また、本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/25,000、1/50,000 の地形図を使用した。那覇市都市計画部都市計画課発行の 1/10,000 の地形図、平成 16 年度沖縄県教育庁文化課作成の首里城跡測量図、沖縄県企画部情報政策課委託作成の地形図を使用した。

5　報告書抄録に掲載した座標系は、地形測量及び写真測量業務で委託した成果をインターネットで公開（http://Vldb.gsi.jp/sokuchi/tky2jgd/）されている Web 版 TKY2JGD を利用した。日本測地系から世界測地系に変換した。入力方法を例示すると、入力値は平面直角座標を選択し、日本測地系「15 系」を選択後に「X 座標：23598.267m、Y 座標：21971.191m」を入力後に変換方法を「世界測地系→日本測地系」を選択した。計算結果は「北緯：26° 12′ 32.15599″、東経：127° 43′ 18.24229″」が求められたものを記した。

6　遺構及び土層図面及び写真の一部は、平成 11 年度に当センターへの首里・若狭・兼城の三資料室からの引っ越し作業の際に誤って廃棄されたようである。その為、図面や写真が欠落した部分については、これを補完するかたちで編集した。

7　本報告書は、金城亀信を中心に、瑞慶覧尚美・赤嶺雅子・伊藤恵美利・中山 晋ほかの協力を得て、編集を行った。なお、発掘調査・資料整理などの調査体制については、第Ⅰ章の第３節に記してある。報告の原稿は、全て金城が執筆した。

8　本報告書に掲載された現場の写真撮影は全て、金城亀信がおこなった。出土遺物の撮影及び現像・焼付けは矢舟章浩・伊佐えりながおこなった。

9　発掘調査で出土した遺物及び実測図、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目　　次

序
巻首図版
例言

第Ⅰ章　序　　章 …… 1
　第１節　首里城跡公園整備事業に至る経緯…… 1
　第２節　調査に至る経緯…… 7
　第３節　調査の体制…… 9
　第４節　調査の経緯……16

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……18
　第１節　地理的環境……18
　第２節　歴史的環境……23

第Ⅲ章　調査の概要……29
　第１節　調査地域……29
　第２節　調査区の設定……47

第Ⅳ章　遺　　構 ……49
　第１節　遺構の概要……49
　　Ａ．遺構の種類と概略……49
　　Ｂ．各時期別の遺構……52
　　イ．第Ⅰ期……57
　　ロ．第Ⅱ期……93
　　ハ．第Ⅲ期 ……127
　　ニ．第Ⅳ期 ……201
　　ホ．第Ⅴ期 ……269
　　へ．第Ⅵ期 ……337
　　ａ．第Ⅵ期前半 ……347
　　ｂ．第Ⅵ期後半 ……435

報告書抄録 ……486

挿図目次

図目次

第１図　沖縄（琉球王国）の位置と周辺諸国 ……（ｉ）
第２図　首里城跡とグスク時代の周辺遺跡……２
第３図　旧首里城図（旧琉球大学校舎配置図）……３
第４図　首里城城郭等復元整備事業等　年度別事業箇所……６
第５図　首里城周辺の横断図……19
第６図　首里城周辺主要文化遺産分布図……24
第７図　首里城と城内の地名……33
第８図　首里城と城内の地名……37
第９図　発掘調査地域（上段）と
『首里古地図』（1700年）（下段）……38
第10図　首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（1893年）……39
第11図　首里城平面図（島袋良徳氏所蔵）……39
第12図　首里城平面図（昭和6年頃）……40
第13図　首里城京の内の空間変遷……41
第14図　首里城跡京の内地区　年度別発掘調査箇所……42
第15図　京の内地区で検出された御嶽及び区画石積みから
推定した京の内空間の復元案……43
第16図　「京の内」跡遺構配置図及びグリッド設定 ……48
第17図　遺構全体図……53
第18図　京の内北地区第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）
遺構の推定復元……58
第19図　B-15･16石積みSA24 平面･断面及び層序……61
第20図　B-16土壙SK03 平面と層序……67
第21図　B-16土壙SK03の延長 平面と層序……77
第22図　B-13･14グリッド内のピット 平面と断面……84
第23図　C･D-15グリッド内のピット 平面と断面……87
第24図　京の内北地区第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）
遺構の推定復元……94
第25図　B-11･12石積みSA01 平面と立面及び断面 ……97
第26図　B-11･12石積みSA01 立面と刻印石 ……101
第27図　B-11･12石積みSA01 外面石積みの刻印石 ……105
第28図　B-11･12、C-12石積みSA01 背面石積みの根石
設置状況模式図 ……106
第29図　B-11･12、C-12 SA01（建物）推定プランと
根石設置ヶ所 ……106
第30図　B･C-10･11石積みSA05-A（外面)･SA05-A･B
（内面）平面及び層序 ……111
第31図　B-14･15土壙SK02 平面及び層序……121
第32図　京の内北地区第Ⅲ期（15世紀中頃）遺構の推定
復元 ……128
第33図　B･C-12石積みSA08･SA10 平面及び断面 ……131
第34図　C･D-14～17石積みSA17、SA18-B、SA25-A･B
平面配置図 ……135
第35図　C･D-14石積みSA17 平面及び層序 ……141
第36図　C･D-14石積みSA17 外面の刻印石 ……145
第37図　D-16石積みSA18-B 平面及び層序……151
第38図　D-17石積みSA25-A･B 平面及び層序……157
第39図　C-13･14石積みSA33･34 平面及び層序 ……165
第40図　C-13･14石積みSA33･34 立面及び層序 ……169
第41図　下之御庭首里森御嶽地区B･C-12石積み
SA18-A･SA32、排水溝SD04-A 平面図 ……173
第42図　下之御庭首里森御嶽地区及び京の内地区B･C-12
SD04-A 立面及び層序 ……177
第43図　B-12排水溝SD06-A 平面及び断面……189
第44図　B-15土壙SK01（石積みSA19･20、SA28）平面及び
層序 ……197
第45図　京の内北地区第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）
遺構の推定復元 ……202
第46図　C･D-10、D-11石積みSA04･SA35平面及び立面 …205
第47図　B･C-10･11石積みSA05-B（外面)･SA05-A･B
（内面）平面及び層序 ……213
第48図　B･C-12･13石積みSA07･SA11･SA12 平面及び
立面･断面……221
第49図　B-14･15石積みSA14 平面及び断面･層序 ……233
第50図　B-16･17石積みSA27･SA30 平面及び層序 ……239
第51図　C-10･11石敷きSS01･02、SS03-B、SS04-A･B
平面及び断面･層序……247
第52図　C-10･11石敷きⅠ期（SS01･02、SS03-B、SS04-A)･
Ⅱ期（SS02･SS04-A･B）の推定復元 ……251
第53図　C-10･11石敷きⅠ期（SS01･02、SS03-B、SS04-A）
平面及び断面･層序……255
第54図　C-10･11石敷きⅡ期（SS02、SS04-A･B）
平面及び断面･層序……259
第55図　C-10･11石敷きSS01･02、SS03-B、SS04-A
遺構残存の鑿痕や刻印石の位置図 ……263
第56図　C-10･11石敷きSS01･02、SS03-B、SS04-A
遺構残存の鑿痕と刻印石 ……263
第57図　京の内北地区第Ⅴ期（16世紀前半～19世紀後半）
遺構の推定復元 ……271
第58図　B･C-12～15石積みSA06、SA13、SA15、SA21、
SA23、SA31、北側ﾄﾚﾝﾁ 平面 ……275
第59図　B-12･13石積みSA06 平面及び断面･層序 ……281
第60図　B-12･13石積みSA13 平面及び層序 ……289
第61図　B-14石積みSA14･15 平面及び断面 ……295
第62図　B-14石積みSA14･15（東側ﾄﾚﾝﾁ）平面及び
断面･層序……297
第63図　B-14石積みSA14･15（西側ﾄﾚﾝﾁ）平面及び
断面･層序……301
第64図　C-13～15石積みSA21･SA23（排水溝①･②）
平面及び層序 ……311
第65図　B-14･15石積みSA31 平面及び層序……317
第66図　C･D-12塼敷きSS05 平面及び断面･層序 ……325
第67図　B-12･13北側ﾄﾚﾝﾁと石積みSA13 平面及び
層序 ……333
第68図　昭和6年頃の首里第一尋常高等小学校及び琉球大学
校舎配置図 ……339
第69図　京の内北地区第Ⅵ期（19世紀終末～昭和58年）
遺構の推定復元 ……343
第70図　首里城平面図（昭和6年頃）……348
第71図　京の内北地区第Ⅵ期前半（19世紀終末～昭和20年）
遺構の推定復元 ……349
第72図　首里城平面図（昭和6年頃）と京の内跡検出遺構
との重ね図 ……353
第73図　B-13～17石積みSA16･22･26･29、排水溝SD06-B、
SD07-A･B、石敷きSS03-A　遺構配置図 ……357
第74図　B-16石積みSA26、排水溝SD07-B 平面及び断面･
層序 ……363
第75図　B-16石積みSA29 平面及び層序 ……369
第76図　B-15～17石積みSA16、排水溝SD06-B 平面及び
層序 ……373
第77図　B-15石積みSA22、排水溝SD07-A 平面及び断面･
層序 ……381
第78図　B-13･14石敷きSS03-A 平面及び層序 ……
389
第79図　B･C-11便所：第Ⅰ期（石積みSA02、溝SD03）
平面及び断面 ……395
第80図　B･C-11便所：第Ⅱ期（溝SD03ほか）平面及び

断面・層序……403
第81図　C-12・13石積みSA09、排水溝SD05 平面及び層序 ……411
第82図　C・D-16・17建物SB01、排水溝SD04-B 平面及び断面・層序 ……421
第83図　C・D-16・17建物SB01（便所）の推定復元 ……425
第84図　旧首里城図（旧琉球大学校舎配置図）……436
第85図　旧琉球大学校舎配置図と（平成6～9年度）京の内地区の検出遺構との重ね図 ……437
第86図　京の内北地区第Ⅵ期後半（昭和24年～昭和58年）遺構の推定復元 ……441
第87図　旧琉球大学校舎配置と（平成6年度）京の内地区の検出遺構との重ね図 ……445
第88図　旧首里城図（旧琉球大学校舎配置図）……449
第89図　C-11・12石積みSA03 平面及び層序……451
第90図　琉球大学石積み①・②（SA03）と京の内跡検出遺構との相関関係図 ……455
第91図　琉球大学石積み①・②（SA03）と京の内跡検出遺構との相関関係図 ……457
第92図　B・C-13～16排水溝①～④ 平面 ……463
第93図　B・C-13～16排水溝①～④ 立面及び層序 ……467
第94図　C・D-15排水溝（琉大の布掘り基礎）SD01 平面 …479
第95図　C・D-16排水溝（琉大の布掘り基礎）SD02 平面・断面 ……482
第96図　B-11石列SR01 平面 ……484

表目次

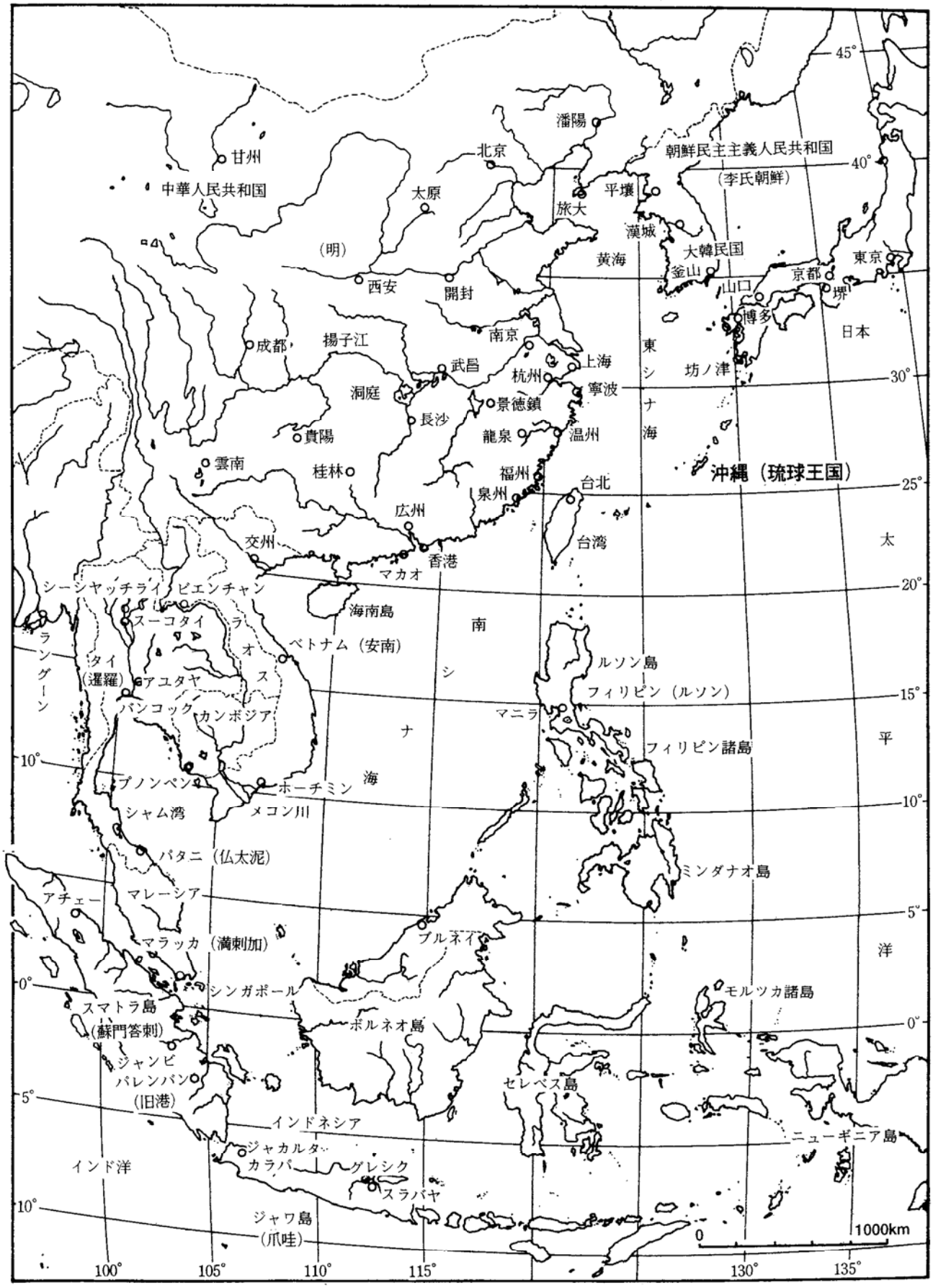
第１表　首里城城郭等復元整備事業等の事業費の推移……５
第２表　平成６(1994)年度「京の内」跡検出遺構件数の新旧関係……17
第３表　首里城周辺主要文化遺産分布表……25
第４表　當銘氏論文の内容を基に作成したフローチャート…26
第５表　切り石積みの外面と内面の関係……51
第６表　第Ⅰ期　SA24遺構観察表 ……60
第７表　第Ⅰ期　SK03遺構観察表 ……66
第８表　第Ⅰ期　SK03の延長（旧SK04）遺構観察表……76
第９表　第Ⅰ期　B-13・14ピット遺構観察表 ……84
第10表　第Ⅰ期　C・D-15ピット遺構観察表 ……86
第11表　第Ⅱ期　SA01遺構観察表 ……96
第12表　第Ⅱ期　SA05-A遺構観察表 ……110
第13表　第Ⅱ期　SK02遺構観察表 ……120
第14表　第Ⅲ期　SA08、SA10遺構観察表 ……130
第15表　第Ⅲ期　SA17遺構観察表 ……140
第16表　第Ⅲ期　SA18-B遺構観察表 ……150
第17表　第Ⅲ期　SA25-A、SA25-B遺構観察表……156
第18表　第Ⅲ期　SA33、SA34遺構観察表 ……164
第19表　第Ⅲ期　SA18-A、SA32、SD04-A遺構観察表 …172
第20表　第Ⅲ期　SD06-A遺構観察表 ……188
第21表　第Ⅲ期　SK01遺構観察表 ……196
第22表　第Ⅳ期　SA04、SA35遺構観察表 ……204
第23表　第Ⅳ期　SA05-B遺構観察表 ……212
第24表　第Ⅳ期　SA07、SA11、SA12遺構観察表 ……220
第25表　第Ⅳ期　SA14遺構観察表 ……232
第26表　第Ⅳ期　SA27、SA30遺構観察表 ……238
第27表　第Ⅳ期　SS01、SS02、SS03-B、SS04-A、SS04-B遺構観察表 ……246
第28表　石敷きⅠ期（SS01・02、SS03-B・SS04-A）・Ⅱ期（SS02・SS04-A・B）の規模比較 ……251
第29表　第Ⅴ期　SA06遺構観察表 ……280
第30表　第Ⅴ期　SA13遺構観察表 ……288
第31表　第Ⅴ期　SA15遺構観察表 ……294
第32表　第Ⅴ期　SA21、SA23遺構観察表 ……310
第33表　第Ⅴ期　SA31遺構観察表 ……316
第34表　第Ⅴ期　SS05遺構観察表 ……324
第35表　第Ⅴ期　B-12・13北側ﾄﾚﾝﾁ遺構観察表 ……332
第36表　廃藩置県後の首里城及びその周辺における主要文教施設等略年表 ……338
第37表　第Ⅵ期前半　SA26、SD07-B遺構観察表 ……362
第38表　第Ⅵ期前半　SA29遺構観察表 ……368
第39表　第Ⅵ期前半　SA16、SD06-B遺構観察表 ……372
第40表　第Ⅵ期前半　SA22、SD07-A遺構観察表 ……380
第41表　第Ⅵ期前半　SS03-A遺構観察表……388
第42表　第Ⅵ期前半　SA02遺構観察表 ……394
第43表　第Ⅵ期前半　SD03遺構観察表 ……402
第44表　第Ⅵ期前半　SA09、SD05遺構観察表 ……410
第45表　第Ⅵ期前半　SD04-B、SB01遺構観察表 ……420
第46表　SB01（便所）の規模 ……425
第47表　第Ⅵ期後半　SA03遺構観察表 ……450
第48表　第Ⅵ期後半　排水溝①～④遺構観察表 ……462
第49表　第Ⅵ期後半　SD01、SD02、SR01遺構観察表 ……478

図版目次

巻首図版１　首里城航空写真（1944年）の米軍撮影
巻首図版２　1945年4月2日 米軍撮影（CV20-103-63）の首里城周辺
巻首図版３　首里城平面図（昭和6年頃）
巻首図版４　1984年 国土地理院撮影（OK84-IX C-12-8）首里城跡と琉球大学
巻首図版５　旧首里城図
巻首図版６　2004年 国土地理院撮影（COK2004-IX C-8-7）首里城跡
巻首図版７　首里城跡周辺地形図
巻首図版８　2009年 首里城跡の航空写真
巻首図版９　上段：調査区全景
　下段：調査区の東半分を望む
巻首図版10　上段：調査区の西半分を望む
　下段：調査区西側遺構の状況
巻首図版11　上段：調査区西側（B～D-14～17ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む
　下段：調査区中央（B～D-12～15ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む
巻首図版12　上段：調査区を南側より望む
　下段：調査区東側（B～D-10～14ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む
巻首図版13　上段：調査区東側（B～D-10～12ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む、
　下段：調査区東側（B～D-10・11ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む
巻首図版14　上段：調査区東側（B・C-10～13ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む
　下段：調査区中央（B～D-14・15ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む
巻首図版15　調査区中央（B～D-13・14ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む
巻首図版16　上段：調査区西側（B・C-15～17ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む、
　下段：調査区中央（C・D-13～15ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む
巻首図版17　上段：調査区西側（C・D-15・16ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む、
　下段：調査区西側（C・D-15～17ｸﾞﾘｯﾄﾞ）を望む
図版１　上：B-15・16 SA24検出前の状況
　下：SA24検出直後の状況 …… 65
図版２　上：B-16 SK03西より東側を望む
　下：SK03北より南側を望む ……71
図版３　上：B-16 SK03東より西側を望む
　下：SK03南より北側を望む ……72
図版４　上：B-16 SK03（東側）試掘壙 南壁
　下：SK03（東側）試掘壙 西壁 ……73
図版５　上：B-16 SK03（東側）試掘壙 北壁
　下：SK03（西側）試掘壙 南壁 ……74
図版６　上：B-16 SK03（西側）試掘壙 西壁
　下：SK03（西側）試掘壙 北壁 ……75
図版７　上：B-16 SK03延長部分 南より北側を望む
　下：SK03延長部分 東より西側を望む ……81
図版８　上：B-16 SK03延長部分 東壁
　下：SK03延長部分 南壁 ……82
図版９　上：B-16 SK03延長部分 南壁
　下：SK03延長部分 西壁 ……83

図版10　B-13･14ピットを南側上空より望む　……85
図版11　上：C･D-15ピットを西側上空より望む
下：C･D-15ピット 東より西側を望む ……91
図版12　上：C･D-15ピット 西より東側を望む
下：C･D-15ピット 北より南側を望む ……92
図版13　上：B-11･12 SA01ほかを西側上空より望む
下：SA01 南側上空より望む……107
図版14　上：B-11･12 SA01 東より西側を望む
下：SA01 西より東側を望む　……108
図版15　上：B-11･12 SA01 北より南側を望む
下：SA01 北より南側を望む　……109
図版16　上：B･C-10･11 SA05-Aほかを南側上空より望む
下：SA05-A 北より南側を望む ……115
図版17　上：B･C-10･11 SA05-A 東より西側を望む
下：SA05-A 南より北側を望む ……116
図版18　上：B･C-10･11 SA05-A 外面の切り石を北より望む
下：SA05-A 外面の切り石を南より望む ……117
図版19　上：B-10 SA05-Aﾄﾚﾝﾁ 東壁
下：B･C-10･11　SA05-A 内側野面石積みと外面の
切り石 ……118
図版20　左：B-10･11 SA05-A 内側の野面石積みを西より望む
右：SA05-A 内側の野面石積み ……119
図版21　上：B-14･15 SK02ほかを東側上空より望む
下：B-14 SK02東側 西壁 ……125
図版22　上：B-14･15 SK02西側 西壁
下：SK02西側 北壁　……126
図版23　上：B･C-12 SA08、SA10ほかを南側上空より望む
下：SA08、SA10 西より東側を望む ……132
図版24　上：B･C-12 SA08、SA10 南より北側を望む
下：SA08、SA10 東より西側を望む ……133
図版25　C･D-14 SA17、D-16 SA18-B、D-17 SA25-A･B
を東側上空より望む ……134
図版26　C･D-14 SA17、D-16 SA18-B、D-17 SA25-A･B
を北側上空より望む ……137
図版27　上：C･D-14 SA17、D-16 SA18-Bの一部を西側上
空より望む、下：D-16 SA18-B、D-17　SA25-A･
Bを北側上空より望む ……139
図版28　上左：C･D-14 SA17 南壁、上右：C･D-14 SA17
南壁、下：SA17 南より北側を望む ……145
図版29　上：C･D-14 SA17 東より西側を望む
下：SA17　西より東側を望む ……149
図版30　上段：D-16 SA18-Bを西側上空より望む
中段左：SA18-B 西より東側を望む
中段右：SA18-B 東より西側を望む
下段左：SA18-B 南より北側を望む
下段右：SA18-B 北より南側を望む ……155
図版31　上：D-17 SA25-A･Bほかを北側上空より望む
下：SA25-A･Bほかを北側上空より望む ……161
図版32　上：D-17 SA25-A･Bを南側上空より望む
下：SA25-A･Bを南より北側を望む ……162
図版33　上：D-17 SA25-A･Bほかを西側上空より望む
下：SA25-A･B 西より東側を望む　……163
図版34　上：C-13･14 SA33･34 西より東側を望む
下：SA33･34北より南側を望む ……170
図版35　上：C-13･14 SA33･34 東より西側を望む
下：SA33･34南より北側を望む ……171
図版36　上：平成9（1997）年の下之御庭首里森御嶽地区
調査前の状況、下：発掘調査状況 ……178
図版37　下之御庭首里森御嶽地区 遺構検出状況……179
図版38　上･下：下之御庭首里森御嶽地区 遺構検出状況 …180
図版39　B･C-12 SA18-A、SA32、SD04-Aほかを南側
上空より望む ……181
図版40　B･C-12 SD04-A 南より北側を望む ……182
図版41　上：B･C-12 SD04-A、SA32 北より南側を望む
下：SD04-A 南壁 ……183
図版42　上：B･C-12 SD04-A 南壁と西壁
下：SD04-A 東壁 ……184
図版43　上：B･C-12 SD04-A 東より西側を望む
下：SD04-A 南より北側を望む ……185
図版44　上：B-12 SA18-A 西より東側を望む
下：SA18-A 東より西側を望む ……186
図版45　上：B-12 SA18-A 北より南側を望む
下：SA18-A 南より北側を望む ……187
図版46　B-12 SA18-A、SD06-Aほかを南側上空
より望む ……193
図版47　上：B-12 SD06-A 南より北側を望む
下：SD06-A 東より西側を望む ……194
図版48　上：B-12 SD06-A 北より南側を望む
下：SD06-A 西より東側を望む ……195
図版49　上：B-15 SK01ほかを西側上空より望む
下：SK01を西側上空より望む ……198
図版50　上：B-15 SK01 北より南側を望む
下：SK01 東より西側を望む　……199
図版51　上：B-15 SK01 西より東側を望む
下：SK01 北より南側を望む　……200
図版52　C･D-10、D-11 SA04、SA35を西側上空より
望む ……209
図版53　上：C･D-10、D-11 SA04、SA35 西より東側を望む
下：SA04、SA35 南壁…… 210
図版54　上：C･D-10、D-11 SA04、SA35 東より西側を望む
下：SA04、SA35 南より北側を望む ……211
図版55　上：B･C-10･11 SA05-Bほかを南側上空より望む
下：SA05-B 南より北側を望む ……217
図版56　上：B･C-10･11 SA05-B 西より東側を望む
下：SA05-B 北より南側を望む ……218
図版57　上：B･C-10･11 SA05-B 北より南側を望む
下：SA05-B 東より西側を望む ……219
図版58　上：B･C-12･13 SA07、SA11、SA12 西より東側を望む
下：B-13 SA07 南より北側を望む　…… 225
図版59　上：B-13 SA07 東壁ほかを西より望む
下：SA07 東壁ほかを西より望む　……226
図版60　上：B-13 SA07 北より南側を望む
下：SA07ほかを東より西側を望む……227
図版61　上：B-13 SA07ほかを南より北側を望む
下：B･C-12 SA11 東壁ほかを西より望む……228
図版62　上：B･C-12 SA11 西より東側を望む
下：SA11 東より西側を望む　……229
図版63　上：B･C-12 SA11 東より西側を望む
下：SA11ほかを北より南側を望む……230
図版64　上：B-12 SA12 北より南側を望む
下：SA12　南より北側を望む…… 231
図版65　上段左：B-14･15 SA14ほかを南側上空より望む
上段右：SA14 東壁、中段：SA14　南壁・西壁
下段：SA14　北壁 ……237
図版66　上：B-16･17 SA27、SA30を西側上空より望む
下：SA27、SA30 西より東側を望む ……243
図版67　上：B-16 SA30 東壁ほかを西より望む
下：B-16･17 SA27 南壁ほかを北より望む　……244
図版68　上：B-16･17 SA27、SA30 西壁
下：SA27、SA30 北壁…… 245
図版69　上：C-10･11 SS01～SS04ほかを南側上空より望む
下：SS01～SS04 西より東側を望む　……264
図版70　上：C-10･11 SS01～SS04 東より西側を望む
下：SS01、SS02 北より南側を望む　……265
図版71　上：C-10･11 SS01、SS02 南より北側を望む
下：C-10 SS03-B 西より東側を望む　……266
図版72　上：C-10 SS03-B 北壁ほかを南より望む

下：SS03-B･SS04-A 東より西側ほかを望む ……267
図版73 上：C-10 SS03-B、SS04-A･B 北より南側を望む
下：SS04-A･B 東より西側を望む ……268
図版74 上･下：B･C-12～15 SA06、SA13～15、
SA23、SA31、SS05 南側上空より望む ……270
図版75 上：B･C-12～14 SA06、SA13･15、SA31を東側
上空より望む、下：SA06、SA13･15、SA31を南
側上空より望む ……279
図版76 上：B-12･13 SA06ほかを南側上空より望む
下：SA06ほかを西より東側を望む ……285
図版77 B-12･13 SA06 東より西側を望む ……286
図版78 上：B-12･13 SA06 北壁ほかを南より望む
下：SA06ほかを北より南側を望む ……287
図版79 上段：B-12 SA13 西壁ほかを東より望む
二段：SA13東壁ほかを西より望む
三段：SA13ほかを北より南側を望む
下段：SA13ほかを南より北側を望む ……293
図版80 上：B-14 SA15東西ﾄﾚﾝﾁ 南側上空より望む
下：SA15東西ﾄﾚﾝﾁ 北より南側を望む ……296
図版81 上：B-14 SA15東側ﾄﾚﾝﾁ 北壁
下：SA15東側ﾄﾚﾝﾁ 東壁 ……305
図版82 B-14 SA15東側ﾄﾚﾝﾁ 西壁 ……306
図版83 上：B-14 SA15西側ﾄﾚﾝﾁ 北壁
下：SA15西側ﾄﾚﾝﾁ 東壁 ……307
図版84 上：B-14 SA15西側ﾄﾚﾝﾁ 東壁
下：SA15西側ﾄﾚﾝﾁ 南壁 ……308
図版85 B-14 SA15西側ﾄﾚﾝﾁ 西壁 ……309
図版86 上：C-13～15 SA21、SA23を南側上空より望む
下：C-13･14 SA21 北壁ほかを南より望む ……315
図版87 B-14･15 SA31ほかを南側上空より望む ……321
図版88 上：B-14･15 SA31 北壁
下：SA31 南壁 ……322
図版89 上：B-14･15 SA31 西壁
下：SA31（SA15西側ﾄﾚﾝﾁ）東壁 ……323
図版90 C･D-12 SS05ほかを南側上空より望む ……329
図版91 上：C･D-12 SS05 南より北側を望む
下：SS05 東壁 ……330
図版92 上：C･D-12 SS05 南壁
下：SS05 西壁 ……331
図版93 B-12･13 北側ﾄﾚﾝﾁを南より望む ……332
図版94 B-12･13 北側ﾄﾚﾝﾁの北壁層序 ……333
図版95 上･下：B-14～17 SA16･22･26･29、SD06-B、
SD07-A･B、SS03-Aを望む ……361
図版96 上段左：B-16 SA26、SD07-Bを南側上空より望む
上段右：SA26、SD07-B 北より南側を望む
中段：SA26、SD07-B 南より北側を望む
下段：SA26、SD07-B 西壁 ……367
図版97 上：B-16 SA29ほかを西側上空より望む
下：SA29 西壁 ……370
図版98 上：B-16 SA29 西壁
下：SA29 北より南側を望む ……371
図版99 上：B-15～17、SD06-B、SA16を南側上空
より望む、下：B-16･17 SD06-B 北壁 ……377
図版100 上：B-15～17 SD06-B、SA16 南より北側を望む
下：SA16 南より北側を望む ……378
図版101 上：B-15･16 SA16 南より北側を望む
下：SD06-B、SA16 西より東側を望む ……379
図版102 上：B-15 SA22、SD07-Aを西側上空より望む
下：SA22、SD07-Aを北側上空より望む ……385
図版103 上：B-15 SA22、SD07-A 南より北側を望む
下：SA22、SD07-A 西より東側を望む ……386
図版104 上：B-15 SD07-A 南壁
下：SD07-A 東より西側を望む ……387
図版105 上段左：B-13･14 SS03-Aを南側上空より望む
上段右：SS03-A 西より東側を望む
中段：SS03-A 南より北側を望む
下段：SS03-A 北より南側を望む ……393
図版106 上：B-11 SA02ほかを南側上空より望む
下：SA02東より西側を望む ……399
図版107 上：B-11 SA02 北より南側を望む
下：SA02 北東より南西側を望む ……400
図版108 上：B-11 SA02 北西より東南側を望む
下：SA02ﾄﾚﾝﾁ内を西より東側を望む ……401
図版109 上：B･C-11 SD03ほかを南側上空より望む
下：SD03 東より西側を望む ……407
図版110 上：B･C-11 SD03 北より南側を望む
下：SD03の一部を北より南側を望む ……408
図版111 上：B･C-11 SD03内 西壁
下：SD03内 東壁 ……409
図版112 上：C-12･13 SA09、SD05を北側上空より望む
下：SA09 西壁 ……415
図版113 上：C-12･13 SA09 南より北側を望む
下：SD05、SA09 南より北側を望む ……416
図版114 上：C-12･13 SA09 西より東側を望む
下：C-13 SD05 北より南側を望む ……417
図版115 上段左：C-12･13 SA09、SD05 東より西側を望む
上段右：C-13 SD05 東より西側を望む
下段：C-12･13 SA09、SD05 東より西側を望む …418
図版116 上：C･D-16･17 SB01、SD04-Bを北側上空より望む
下：SB01、SD04-B 北より南側を望む ……429
図版117 上：C･D-16･17 SB01、SD04-B 西より東側を望む
下：SB01、SD04-B 東より西側を望む ……430
図版118 上段左：C･D-16･17 SB01、SD04-B 西側北壁
上段右：SB01、SD04-B 東側北壁
下段：SB01、SD04-B 南より北側を望む ……431
図版119 1984年琉球大学校舎西側部の拡大国土地理院撮影
（OK84-IX C-12-8）……449
図版120 上：C-11･12 SA03を南側上空より望む
下：SA03ほかを南側上空より望む ……456
図版121 上右：C-11･12 SA03 南壁
下左：SA03ほかを南側上空より望む
下右：SA03 南壁 ……457
図版122 上：C-11･12 SA03 北より南側を望む
下：SA03 東より西側を望む ……461
図版123 上：B･C-13･14 排水溝①の南壁と排水溝④の状況
下：B･C-15･16 排水溝①の南壁と排水溝④の状況
……471
図版124 左：B･C-13･14 排水溝①･④を南側上空より望む
右：B･C-13～16 排水溝①～④を東側上空より望む
……475
図版125 上･下：B･C-14･15 排水溝①～④を西側上空より
望む ……476
図版126 上：B･C-15･16 排水溝①･②･④を西側上空より望む
下：B･C-13～16 排水溝①～④を西側上空より望む
……477
図版127 上：C･D-15 SD01を西側上空より望む
下：SD01を西より東側を望む ……480
図版128 上：C･D-15 SD01を北より南側を望む
下：SD01を東より西側を望む ……481
図版129 上：C･D-16 SD02を北側上空より望む
下：SD02を南より北側を望む ……483
図版130 上：B-11 SR01を南側より望む
下：SR01を北より南側を望む ……485



第1図　沖縄（琉球王国）の位置と周辺諸国　　14世紀末～16世紀の琉球王国主要対外交易国

日本、李氏朝鮮、明（中国）、呂宋（フィリピン）、安南（ベトナム）、
暹羅（タイ）、満剌加（マラッカ）、蘇門答剌（スマトラ）、
旧港（パレンバン）、爪哇（ジャワ）

第Ⅰ章　序　　章

第１節　首里城跡公園整備事業に至る経緯

沖縄県（第１図）の県庁所在地のある那覇市（第２図）首里当蔵町３丁目・金城町１丁目（第３図～第15図）には、室町時代（1338年～1573年）の中頃から明治時代（1868年～1912年）の初期頃までの約500年に亘って第一尚氏（1406年～1469年）、第二尚氏（1470年～1879年）の尚氏王統の居城となった首里城（第４図～第15図）があった。琉球王国の政治・経済・文化の中心として役割を果たしてきた首里城は歴代の琉球国王によって、当時の琉球王国の土木・建築技術などの粋を集めて築城された沖縄の代表的なグスク（城郭）であった。グスク内には正殿、北殿、南殿などの多くの建築物が存在し、そのいくつかは旧国宝（正殿、守礼門、歓会門、瑞泉門、白銀門、園比屋武御嶽石門の６件）として大正14（1925）年に指定されていた。

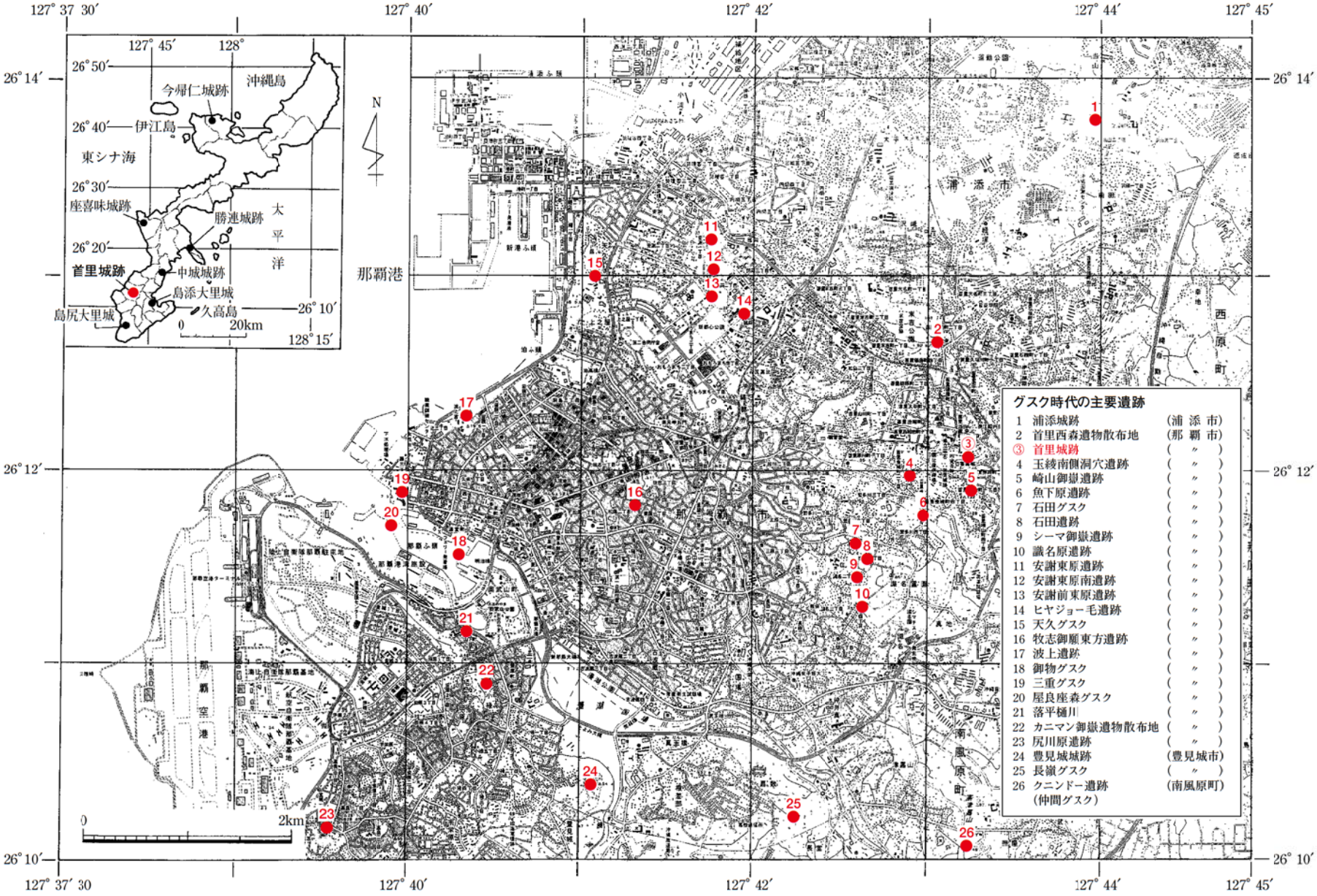
琉球王国の遺産でもあった首里城も昭和20（1945）年の太平洋戦争末期に起きた沖縄戦で、米軍の艦船及び航空機などからの集中砲火を受け、正殿や南殿・北殿などの多くの建造物が徹底的に破壊され、灰燼に帰してしまった。更に戦後は、首里城跡に琉球大学が昭和25（1950）年に創設され、その造成工事（昭和24年６月から校舎建設）によって改変がなされキャンパスとして昭和57（1982）年までの32年間使用された（第３図）。

首里城及びその周辺文化財の整備に至るまでの時系列的な経過として、昭和45（1970）年に当時の琉球政府文化財保護委員会によって首里城跡及び周辺文化財の復元整備計画を策定した。その後に、この構想を踏まえて日本政府が第一次沖縄復帰対策要綱を策定し、閣議決定がなされた。沖縄が本土に復帰した昭和47（1972）年度から『第一次沖縄振興開発計画』（1972年～1981年までの10カ年）が着手された。この計画では、戦災文化財の復元を積極的に推進することが明記されている。第一次沖縄振興開発計画を踏襲して昭和57（1982）年に策定された『第二次沖縄振興開発計画』（1982年～1991年）では、より具体的な公園計画の位置付けがなされ、この計画で首里城一帯の整備が提言された。現在の公園整備計画の骨子となったのが、同年度に那覇市が策定した『首里金城地区歴史的地区環境整備基本計画』であった。当該計画を基本に、二年後の昭和59（1984）年度に沖縄県が都市計画公園を決定する目的で調査を実施し、首里城と一体となる周辺文化財も含めた歴史的な風致を構成している区域約18haを公園の範囲とした。本計画が今日の首里城の復元整備の指針となった『首里城公園基本計画調査報告書』（註１）であった。

その後、昭和61（1986）年度に首里城内郭の約４haを沖縄県の本土復帰を記念して国営公園区域として『都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）』として復元整備をおこなうことが閣議決定された（第４図・第９図上段）。翌年の昭和62（1987）年度には、沖縄県が国営公園区域を除いた城郭の外側の区域約14haを『県営首里城公園』として位置付け、建設大臣より都市計画事業の認可を受けて『首里城公園基本設計』（註２）を策定し、計画に基づいて整備が実施されている。

以上のような計画を踏まえながら首里城跡の復元に伴う遺構確認の発掘調査と平行しながら復元整備が実施されてきた。但し、これらの計画が策定される以前の琉球政府時代には、昭和32（1957）年に復元修理された園比屋武御嶽石門（註３）や昭和33（1958）年復元の首里城第二の坊門守礼門（註４）などがあった。

首里城跡で最初に復元整備が着手されたのは、昭和49（1974）年に竣工した歓会門であった。次いで昭和59（1984）年竣工の久慶門であった。首里城正殿の復元工事は、平成元（1989）年から始まり、同時に北殿、南殿・番所、奉神門、廣福門などの復元工事も実施された。平成４（1992）年には首里城正殿を含めた建造物群が復元整備され、「首里城公園」として一部が公開されている。その後、系図座・用物座（平成12年３月復元竣工）、京の内（①平成13年度:工事着手、②平成15年度:復元竣工）、下之御庭首里森御嶽（平成９年12月復元竣工）、二階殿（①平成10年度：敷地造成及び外構整備着手、②平成10年度：建築工事着手、③平成11年度：復元竣工）、書院・鎖之間（①平成15年度：外構整備着手、②平成16年度：建築工事着手、③平成19年度１月：復元竣工）が順次整備され、一部地域（二階殿、書院･鎖之間）を除いて一般に公開された。その間の平成12（2000）年12月２日には『琉球王国のグスク及び関連遺産群』（註５）として首里城跡・園比屋武御嶽石門を含む９の資



第2図　首里城跡とグスク時代の周辺遺跡

第３図　旧首里城図　（旧琉球大学校舎配置図）

産がユネスコ「世界遺産」に登録されている。平成20年には書院・鎖之間の庭園が復元（註６）され一般に公開された。なお、書院・鎖之間については「首里城書院・鎖之間庭園」の名称で、平成21年７月23日付で国の名勝として指定されている（註７）。

次に首里城跡外郭等の復元整備に伴う遺構確認調査などについて時系列的にその概略を記すと、沖縄が本土に復帰した昭和47(1972)年度から沖縄開発庁の補助を受けて沖縄県教育委員会が「首里城城郭等復元整備事業」(第４図・第１表）として、首里城外郭の歓会門復元整備事業から着手した。順次年度計画に沿って外郭を半時計回りに復元整備が実施され、久慶門、木曳門、西のアザナ（物見）の石積み、京の内南側物見石積み、継世門、東のアザナ（物見）の石積み、そして本事業の最終年度にあたる平成13（2001）年度に右掖門北側城郭の石積みの復元工事をもって、首里城外郭の石積みや櫓門（歓会門、久慶門、継世門）及び石門（木曳門）の全てが復元整備（註８）された。復元整備された首里城外郭の全長は、1,080m（その内、10ｍは管理用道路）であった。

首里城内郭の施設等の整備に伴う遺構確認調査は、昭和59（1984）年度から歓会門・久慶門内側地区（調査面積：約4,000㎡、調査期間：８月20日～12月14日）の遺構確認調査（註９）から開始された。昭和60・61年度（1985・86年）に首里城正殿跡の遺構確認調査（調査面積約1,500㎡、調査期間：昭和60年８月～10月、昭和61年７月～３月）が実施され、正殿跡から５時期（Ⅰ期基壇～Ⅴ期基壇:14世紀代～1945年）の基壇跡（註10・11）が検出されている。この成果や沖縄県立図書館に収蔵されている阪谷良之進製図の「旧首里城図（昭和６年頃)」などを基にして首里城正殿の設計がなされ、昭和63（1988）年に首里城正殿の設計が完了し、平成元（1989）年から首里城正殿の建築工事が始まり平成４（1992）年に復元竣工している。

以下、昭和63年から平成21年度までに実施された遺構確認調査を便宜的に番号を冠し、時系列的に調査年度と調査地区などを記す。

① 昭和63(1988)年度:南殿･北殿跡の遺構調査(調査期間:６月24日～平成元年３月25日)。② 平成元(1989)年度：御庭跡・奉神門跡の遺構調査（調査期間：６月５日～平成２年３月)。③ 平成元（1989）年度：下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡（調査面積5,240㎡、調査期間：元年10月10日～平成３年３月26日)。④ 平成２（1990）年度：右掖門及び周辺地区発掘調査（調査面積：850㎡、調査期間：10月18日～平成３年３月26日)。⑤ 平成５（1993）年度:東のアザナ地区発掘調査（調査面積約700㎡､調査期間:10月５日～平成６年９月26日)。⑥ 平成６（1994）年度:京の内（北側）地区（調査面積約2,000㎡、調査期間:11月21日～平成７年３月28日)。⑦ 平成７（1995）年度：京の内（南側）地区（調査面積1,000㎡、調査期間：11月21日～平成８年３月28日)。⑧ 平成８（1996）年度：京の内（西側）地区（調査面積1,000㎡、調査期間：７月１日～平成９年３月28日)・下之御庭首里森御嶽地区（調査面積64㎡、調査期間：平成９年２月20日～３月21日)。⑨ 平成９（1997）年度:二階殿地区（調査面積1,300㎡、調査期間:８月４日～平成10年３月20日)。⑩ 平成13・14（2001・02）年度：書院・鎖之間地区発掘調査（調査面積850㎡、調査期間：９月17日～平成14年３月15日)。⑪ 平成15（2003）年度：黄金御殿地区発掘調査（調査面積450㎡、調査期間：６月２日～12月27日)。⑫ 平成16（2004）年度：淑順門地区発掘調査（調査面積：570㎡、７月20日～平成17年３月１日)。⑬ 平成17（2005）年度：御内原西地区（調査面積565㎡、調査期間：８月１日～平成18年１月31日)・黄金御殿地区発掘調査（調査面積50㎡、調査期間：10月24日～12月１日)。⑭ 平成18（2006）年度：銭蔵跡発掘調査（調査面積300㎡、調査期間：９月１日～平成19年３月14日)。⑮ 平成19（2007）年度：銭蔵跡・御内原北地区発掘調査（調査面積300㎡、調査期間：９月３日～平成20年２月29日)。⑯ 平成20（2008）年度：銭蔵跡南側～西側地区発掘調査（調査面積300㎡、調査期間：９月１日～平成21年２月28日)。⑰ 平成21（2009）年度：御内原北地区発掘調査（調査面積370㎡、調査期間：９月14日～平成22年３月26日）が実施されている。

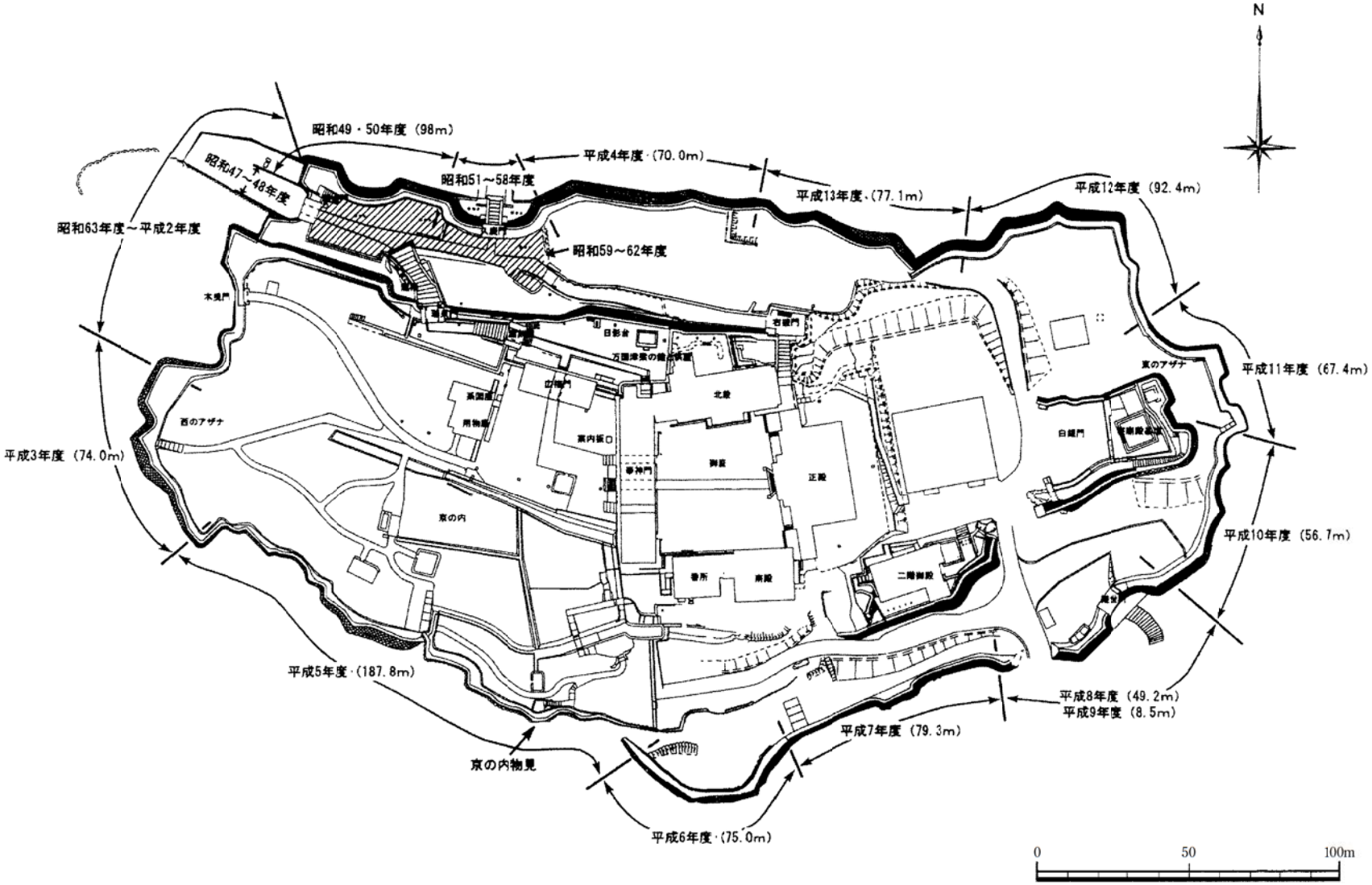
このような中で、首里城内でも最も重要な聖域であった「京の内」地域の復元整備の気運が高まり、「京の内」地域の実施計画に必要な当時の石積み遺構などを検出して、「京の内」の実施計画に反映させるべき情報の収集を目的として内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所（首里出張所）からの委託を受けて沖縄県教育庁文化課が「京の内」地区の遺構確認を目的とした発掘調査を平成６年度から平成９年度まで実施（第９図上段・第14図）した。

第１表　首里城城郭等復元整備事業等の事業費の推移

（単位：千円）

No.	年度	事業名（事業箇所等）	事業費	うち国費	補助費
1	昭和47(1972)年度	首里城歓会門復元整備	24,925	23,678	9.5/10
2	48(1973)	〃	12,992	12,324	〃
3	49(1974)	首里城歓会門久慶門接続石垣復元整備	22,094	11,047	1/2
4	50(1975)	〃（49～50年度計 98m）	51,016	12,008	〃
5	51(1976)	首里城久慶門遺構調査	4,184	2,092	〃
6	52(1977)	首里城久慶門復元整備	22,408	17,926	8/10
7	53(1978)	〃	24,235	19,388	〃
8	54(1979)	〃	31,333	19,388	〃
9	55(1980)	〃	23,872	19,097	〃
10	56(1981)	〃	25,263	19,979	〃
11	57(1982)	〃	34,466	16,295	〃
12	58(1983)	〃	22,019	16,463	〃
13	59(1984)	首里城城郭復元整備（歓会門・久慶門内側の石垣・石畳等）	20,051	15,720	〃
14	60(1985)	〃（歓会門・久慶門内側の石垣・石畳等）	20,051	15,720	〃
		首里城城郭復元整備検討委員会	1,091	1,091	－
		首里城正殿位置確認調査委託	4,155	4,155	－
15	61(1986)	首里城城郭復元整備（歓会門・久慶門内側の石垣・石畳等）	20,050	15,719	8/10
16	62(1987)	〃（歓会門・久慶門内側の石垣・石畳等）	20,050	15,719	〃
17	63(1988)	〃（歓会門右掖門城壁）	26,230	20,564	〃
18	平成元年(1989)年度	〃（歓会門前庭及び歓会門接続城壁 24.6m）	107,764	84,487	〃
19	2年(1990)	〃（木曳門とその接続城郭 70.0m）	107,784	84,502	〃
20	3年(1991)	〃（西のアザナ等城郭 74.0m）	107,790	86,640	〃
21	4年(1992)	〃（久慶門東側城郭 70.0m）	116,195	92,956	〃
22	5年(1993)	〃（西のアザナから継世門にかけての城郭 187.8m）	116,195	92,956	〃
23	6年(1994)	〃（西のアザナから継世門にかけての城郭 75.0m）	116,195	92,956	〃
24	7年(1995)	〃（西のアザナから継世門にかけての城郭 79.3m）	125,465	100,372	〃
25	8年(1996)	〃（西のアザナから継世門にかけての城郭 49.2m）	125,465	100,372	〃
26	9年(1997)	〃（継世門及び両側石垣 8.5m）	127,804	102,243	〃
27	10年(1998)	〃（継世門の東側城郭 56.7m）	127,804	102,243	〃
28	11年(1999)	〃（東のアザナ東側城郭 67.4m）	130,038	104,030	〃
29	12年(2000)	〃（東のアザナ北側城郭 92.4m）	130,037	104,030	〃
30	13年(2001)	〃（右掖門北側城郭 77.1m）	123,169	98,532	〃
	①外郭の距離 1.030m ②外郭城門（歓会門～継世門）及び各門接続石積みの距離 40m ③外郭を横断する管理用道路の幅 10m 外郭全長 ①＋②＋③＝ 1.080m		1,972,190	1,524,692	－

＊　沖縄県教育庁文化課発行『平成14年度版　文化行政要覧』に加筆修正



沖縄県教育庁文化課発行『平成6年度版～平成14年度版　文化行政要覧』を基に作成

第4図　首里城城郭等復元整備事業等　年度別（1972年度～2001年度）事業箇所

註文献・引用文献

註１．首里城公園基本計画調査委員会『首里城公園基本計画調査報告書』1984 年９月。
註２．沖縄県土木建築部『首里城公園基本設計』1986 年３月。
註３．仲座久雄〔園比屋武御嶽石門復元工事報告〕「沖縄文化財調査報告 1958 年」『沖縄文化財調査報告（1956 年～ 1962 年)』監修 沖縄県教育庁 文化課 那覇出版社 昭和 53（1978）年７月。
註４．沖縄県教育委員会『沖縄県有形文化財 旧首里城保存修理工事報告書』1993 年３月。
註５．文化庁・沖縄県教育委員会 監修『世界遺産 琉球王国のグスク及び関連遺産群－玉陵・園比屋武御嶽石門・今帰仁城跡・座喜味城跡・勝連城跡・中城城跡・首里城跡・識名園・斎場御嶽－』「琉球王国のグスク及び関連遺産群」世界遺産登録記念事業実行委員会（沖縄県教育委員会 教育庁文化課気付）2001 年２月８日。
註６．沖縄タイムス「書院・鎖之間庭園を復元」・「首里城公園内あすから公開」（内容：17 世紀の首里城内書院・鎖之間庭園が復元された。首里城内にあった三つの庭園の中でも本格的に復元。絵図や古文書、古写真などを根拠資料として、岩場は琉球石灰岩を使用し、樹種はソテツやリュウキュウマツを植栽、芝生は与那国島から取り寄せ、当時の姿に地形を再現した。庭園は 17 世紀中頃に冊封使などの接待に使用。）沖縄タイムス社 2008（平成 20）年７月 31 日（木）朝刊。
註７．平成 21 年度版『文化行政要覧』沖縄県教育庁文化課 平成 22（2010）年３月。
註８．平成 14 年度版『文化行政要覧』沖縄県教育庁文化課 平成 15（2002）年 11 月。
註９．沖縄県教育委員会『首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査－』1998 年３月。
註 10. 沖縄県教育委員会『旧首里城正殿跡位置確認調査報告書』1986 年３月。
註 11. 當眞嗣一・上原　静「首里城正殿跡の調査」『文化課紀要』第４号 沖縄県教育委員会 1987 年３月。

参考文献（発行年度順に記載）

１．沖縄県『首里城公園整備計画調査』1986 年６月。
２．内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所・社団法人 日本公園緑地協会『首里城地区造園土木基本設計報告書』1988 年３月。
３．財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』1995 年３月。
４．沖縄県教育委員会『首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告書－』1995 年３月。
５．沖縄県教育委員会『首里城跡－御庭跡・奉神門跡遺構調査報告書－』1998 年３月。
６．沖縄県教育委員会『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－」1998 年３月。
７．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』2001 年３月。
８．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』2003 年３月。
９．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－東のアザナ地区発掘調査報告書－』2004 年３月。
10. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』2005 年３月。
11. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－』2005 年３月。
12. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－淑順門地区発掘調査報告書－』2006 年３月。
13. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－御内原地区発掘調査報告書－』2006 年３月。
14. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－御内原西地区発掘調査報告書－』2007 年３月。
15. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－黄金御殿地区発掘調査報告書－』2007 年３月。
16. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－下之御庭首里森御嶽地区発掘調査報告書－』2008 年３月。
17. 沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』2009 年３月。
18. 沖縄県土木建築部 南部土木事務所 街路公園班『首里城公園』（概要ﾘｰﾌﾚｯﾄ）2009 年３月。
19. 首里城公園管理センター『沖縄 首里城公園』（案内ﾘｰﾌﾚｯﾄ）2010 年３月。

第２節　調査に至る経緯

第１節の首里城跡公園整備事業と関連して、本格的に首里城跡の復元整備が動き出してきたのは、昭和 42（1967）年から始まった琉球大学の移転と、これに伴う跡地利用計画で次の三つの構想｛①県立芸術大学構想（県企画調整部)、②広域史跡公園構想（那覇市)、③首里城復元を核とした史跡整備構想（県教育庁・県文化財保護審議会)｝（註１）が検討された。最終的に首里城正殿などの文化遺産を復元し、首里城を含む地域を歴史的な都市公園として整備（註２）することで構想が決まり、『首里城公園基本計画報告書』（註３）で確定した。なお、琉球大学移転の開始と終了時期は、昭和 56（1981）年から始まり、翌年の昭和 57（1982）年までの二ヶ年間を要して、現在の西原町字千原へ移転した。琉球大学の移転直後から沖縄県教育委員会は、沖縄開発庁の補助を受けて昭和 60（1985）年に国指定史跡首里城跡の現状変更申請の手続きを経て、戦後初めて城内の歓会門・久慶門内郭地域の発掘調査が実施された。この発掘調査と平行して沖縄県教育委員会は、県単独の予算で昭和 60（1985）年 10 月２日～昭和 61（1986）年２月 14 日迄の期間、旧首里城正殿跡の位置確認を目的とした発掘調査がなされた。

昭和 61（1986）年度に首里城内郭の約 4 ha を沖縄県の本土復帰を記念して国営公園区域に位置付け「都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）」として復元整備をおこなうことが閣議決定された。内郭の約 4 ha の復元整備に伴う遺構確認調査が昭和 63（1988）年から内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所より沖縄県教育委員会が委託を受けて復元整備に伴う遺構確認の発掘調査が行われ、今日まで継続的に実施している。

復元整備に伴う内郭の遺構確認調査は、昭和 63（1988）年の南殿跡･北殿跡地域の発掘調査から始まっている。翌年の平成元（1989）年は、特に調査対象面積が広範囲となり、その対象地域が御庭跡・奉神門跡地域および下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門まで達した。平成 2（1990）年は右掖門及び周辺地区の発掘調査が実施された。これらの発掘調査で確認された遺構などの調査成果を基にして首里城正殿･南殿･北殿などを含めた建造物群が復元整備され、平成 4（1992）年に首里城公園の第一期開園部分として首里城正殿を初めとする多くの建造物群が一部公開されて今日に至っている。

首里城内の復元整備や遺構確認のための発掘調査の進捗に伴い、未整備地域の首里城南側にある「京の内」地域の復元整備が課題となり、整備に必要な基礎資料となる石積み遺構などの情報の収集を兼ねて平成 6（1994）年度より調査が開始された。「京の内」地域の一部は、明治 11（1936）年に伊東忠太・鎌倉芳太郎の両氏によって発掘調査が実施された。伊東・鎌倉の両氏の報告（註 4）では首里城の第一拡張時期に造成された古い段階の郭であると解釈がなされているのみであり、復元整備に必要な情報としては不足しているようであった。

その後、伊東・鎌倉の両氏が発掘した首里城京の内跡から出土した明代の華南彩釉陶（三彩手軟陶器）の研究をおこなった亀井明徳氏は、華南彩釉陶が国内で最も多量、且つ器種も豊富に出土していることを確認（註 5）している。

上記の伊東・鎌倉の論文や亀井氏の論文などの情報や現存する『首里城古図』・『首里城図』などの古絵図（第 13 図）の手掛かりを得てから「京の内」地区の発掘調査の事前調査とした。

ところで「京の内」地域は正殿、南殿、北殿、奉神門の存在する政治的建造物が集中する区域とは離れていて、内郭の南西側にあり、首里城の発祥とも関係のある聖域的な場所でもあった。京の内は、城内でも東のアザナ（標高 135.5m）に次いで、高所（標高 135m）に位置する。古絵図から精度の高い第 13 図の『首里城古絵図』に基づくと「京の内」には、五つの御嶽が存在していたようであり、南側の高所には首里森御嶽、西南側に真玉森御嶽、西側に「京の内之三御嶽」と称された三つの御嶽があったようである。その他に、首里森御嶽の東隣りに家屋（第 13 図 - 図 B の区画 B）や南殿番所の北西側（第 13 図 - 図 B の区画 A）には家屋が 2 棟描かれている。その他に「京の内」の内郭には御嶽や建物空間を仕切る石積みが四基程度と、最も高い南側地域に入る西側部分には、階段と石造りの拱門（アーチ門）が描かれている。以上の配置を念頭に入れながら発掘調査を平成 6（1994）年 11 月 21 日から平成 7（1995）年 3 月 28 日までの期間実施した。

註文献

註 1．琉球新報「難航する琉大跡地利用 / 県立芸大 / 史跡公園 / 首里城復元 / 三構想の意見対立」1980（昭和 55）年 9 月 16 日（火）朝刊 。

註 2．沖縄ﾀｲﾑｽ「首里城公園を国営公園に / 復帰 20 年事業へ / 正殿 67 年度までに復元 / 植木構想を発表」1984（昭和 59）年 6 月 13 日（水）朝刊。

註 3．首里城公園基本計画調査委員会『首里城公園基本計画調査報告書』1984 年 9 月。

註 4．伊東忠太・鎌倉芳太郎『南海古陶瓷』宝雲舎 1937 年。

註 5．亀井明徳「明代華南彩陶をめぐる諸問題」三上次男博士喜寿記念論文集 陶磁編 三上次男博士喜寿記念 論文集編集委員会 1985 年。

参考文献

1．糸数兼治・當眞嗣一・上原　静『旧首里城正殿跡位置確認調査報告書』沖縄県教育委員会　1986 年 3 月。

2．當眞嗣一・上原　静「首里城正殿跡の調査」『紀要』第 4 号　沖縄県教育委員会 文化課　1987 年 3 月。

3．沖縄県教育委員会『首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査－』1998 年 3 月。

4．沖縄県教育委員会『首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告書－』1995 年 3 月。

5．首里城研究グループ『首里城入門－その建築と歴史－』ひるぎ社 1989 年。

6．『首里城公園ガイドブック』財団法人 海洋博覧会記念公園 管理財団首里城公園管理センター 2000 年 3 月。

第３節　調査の体制

京の内跡の発掘調査は、平成６（1994）年度～平成８（1996）年度までの三カ年実施し、資料整理については京の内発掘調査報告書（Ⅰ）の刊行年度である平成９（1997）年度と今回の報告書作成までに係った平成21（2009）・平成22（2010）年度に限定して、下記のような体制で実施した。なお、職名等は当該年度のものを標記。

◎ 平成６（1994）年度　組織　（遺構調査年度）

○ 事業主体　沖縄県教育委員会　教育長　嘉陽 正幸
○ 事業所管　沖縄県教育庁文化課　課長　西平 守勝
同上　副参事　上原 武次
○ 事業総括　同上　課長補佐　知念　勇
同上　課長補佐　新垣 末子
○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　管理係　係長　比屋根　正治
同上　〃　主査　新垣 和子
同上　〃　副主査　新崎 文子
同上　〃　副主査　宮城 直子
同上　〃　主事　伊波 盛治
○ 事業実施　沖縄県教育庁文化課　埋蔵文化財係　係長　大城　慧
同上　〃　主任専門員　岸本 義彦
同上　〃　主任　島袋　洋
同上　〃　専門員　長嶺　均・専門員　金城　透
同上　〃　指導主事　西銘　章
同上　埋蔵文化財係史跡整備班　班長　上原　靜（発掘総括者）
同上　〃　〃　指導主事　運天 和夫
同上　〃　〃　指導主事　我那覇　念
同上　〃　〃　主任　盛本　勲
同上　〃　〃　主任　金城 亀信（発掘担当者）
同上　〃　〃　調査嘱託員　高宮とり・渡邊尚子
○ 専門調査指導・助言（遺構調査、資料整理　平成６年度～平成８年度）
文化庁記念物課　調査係　整備部門　主任文化財調査官　田中哲雄　平成６年
同上　〃　史跡部門　文化財調査官　伊東正義　平成７年
同上　〃　史跡部門　文化財調査官　増渕　徹　平成８年
奈良国立文化財研究所　元所長　坪井清足　（平成６年）
同上　飛鳥藤原宮跡発掘調査部　元部長　牛川喜幸　（庭園　平成６年）
中国福建省文化庁文物所　副所長　鄭　國　珍　（陶磁器・城郭　平成７・８年）
福建省博物館　副研究員　楊　琮　（陶磁器・城郭　平成６年）
ベトナム　国立ハノイ考古学研究所　主任研究員　チン・カオン・トゥホンー（Trinh Cao Tuong）
カナダ　トロント大学　教授　リチャード・ピアソン（R.J.Pearson）
九州大学　文学部　教授　西谷　正　（城郭　平成７年）
専修大学　文学部　教授　亀井明徳　（陶磁器　平成６年）
愛媛大学　法文学部　助教授　村上恭通　（鉄製品　平成８年）
東京外国語大学　専任講師　小川英文　（フィリピン・東南アジア考古学　平成６年）
青山学院大学　文学部　教授　田村晃一　（考古学　平成６年）

熊本大学　法文学部　元教授　白木原和美（考古学　平成６年）
鹿児島大学　法文学部　教授　上村俊雄　（考古学　平成６年）
名古屋大学　文学部　教授　渡邊　誠　（考古学　平成７年）
沖縄国際大学　文学部　教授　高宮廣衛　（考古学　平成６・８年）
ノルウェー科学アカデミー　博士　トゥール　ハイエルダール（Thor Heyerdahl）（平成８年）
鎌倉考古学研究所　所長　手塚直樹　（陶磁器　平成８年）
漆器文化財科学研究所　所長　四柳嘉章　（漆器　平成６年）
沖縄県指定無形文化財保持者　前田孝允　（琉球漆器　平成６年）
沖縄県文化財保護審議会　委員長　嵩元政秀　（史跡・名勝・考古学　平成６年）
沖縄県文化財保護指導委員　玉津博克　（史跡・名勝　平成６・７年）
福岡市美術館　学芸員　尾崎直人　（タイ・ベトナム陶磁　平成７年）
福岡市教育委員会　埋蔵文化財係　主事　佐藤一郎　（陶磁器　平成８年）
宇佐市教育委員会　文化課　文化財係　技師　江藤和幸　（史跡・考古学　平成８年）
浦添市美術館　学芸員　金城聡子　（漆器　平成６年～８年）
那覇市教育委員会　文化課　課長　金武正紀　（陶磁器・考古学・史跡　平成６年～８年）
同　上　〃　主査　島　弘　（考古学　平成６～８年）
同　上　〃　主事　玉城安明・主事　仲宗根　啓（考古学　平成６・７年）
那覇市教育委員会　壺屋焼物博物館準備室　室長　渡名喜　明　（美術・工芸　平成７・８年）
同　上　非常勤学芸員　我部太郎　（美術史　平成７・８年）
北谷町教育委員会　文化課　主　事　山城安生　（考古学　平成６年）
南風原町教育委員会　文化課　学芸員　上地克哉　（考古学　平成６年～８年）
玉城村教育委員会　社会教育課　主　事　西平　剛　（史跡・考古学　平成６年～８年）
糸満市教育委員会　文化課　主　事　湖城　清（考古学　平成７年）
同　上　〃　主事補　大城一成　（考古学　平成７年）
中城村教育委員会　生涯学習課　主事　渡久地　真　（史跡・考古学　平成６年）
今帰仁城跡整備研究委員会　委員　名嘉正八郎　（歴史　平成７年）
同　上　委員　赤嶺和男　（建築　平成８年）
財団法人　沖縄県文化振興会　史料編集室　主幹　安里嗣淳（考古学　平成６～８年）
沖縄県立博物館　学芸課長　當眞嗣一　（史跡・考古学　平成６年）
琉球大学　元教授　仲松弥秀　（民俗・地理学　平成７年）
法政大学　文学部　元教授　外間守善　（国文学　平成６年）
琉球大学　法文学部　教授　池宮正治　（国文学　平成６～８年）
琉球大学　法文学部　教授　高良倉吉　（歴史学　平成６～８年）
浦添市教育委員会　文化課　主幹　安里　進　（考古学　平成８年）
琉球大学　法文学部　教授　池田榮史　（考古学　平成６・７年）
基山町教育委員会　係長　山田　正　（史跡・考古学　平成８年）

○ 聞き取り調査および情報提供者（平成６～８年度）

阿波根直盛・新垣幸有・石川逢仁・上江洲安英・上間秀政・大城宜英・我喜屋宗徳・我喜屋　満・桂　辰哉・小橋川興永・島　秀範・城間富吉・高江洲良吉・田場典喜・仲本政治・真栄平房敬・宮城盛長・屋嘉比朝勇・屋比久益貞・首里城復元期成会・琉球大学

○ 発掘調査協力者（遺構実測など　平成６～８年度）

県教育庁文化課　埋蔵文化財係　主任　島袋　洋・金城　透　（平成６～８年）
県教育庁文化課　埋蔵文化財係　指導主事　西銘　章　（平成６年）

県教育庁文化課　埋蔵文化財係　嘱託調査員　新城　恵・田中ゆきの・仲座久宜　（平成６・７年）
同　上　〃　〃　上原清乃・仲與根ゆかり　（平成６～８年）
同　上　〃　〃　仲間留美・又吉純子　（平成６～８年）
同　上　〃　〃　長田　剛　（平成７・８年）
同　上　史跡整備係　嘱託調査員　矢沢秀雄　（平成６～８年）
同　上　〃　〃　上原　久　（平成６・７年）
石垣市教育委員会　文化課　主事　島袋綾野（平成６年）
下地町教育委員会　文化財係　主事　川満邦弘　（平成７年）

○ 発掘調査作業員（平成６年度）
呉屋正一・小波津夏子・山畑キミ・玉城富子・呉屋光子・大城輝子・小波津ヨシ子・幸地ヨシ子・小橋川恵子・小橋川幸子・永吉弘子・小湾清美・仲程喜美子・川鍋敬子・稲嶺フミ子・仲里ハル子・玉城信子・嘉数キミエ・呉我フジ子・新垣美智子・中田邦子・嘉手納　太・諸見里幸子・島袋文子・松本倫子・柚木崎末子・堀切邦子。琉球大学 学生　米須美津・北谷 香・比嘉宮子・神里利恵子。富山大学 学生 古屋聡洋。

○ 資料整理作業員（平成６年度）
安和千代子・平良貴子・外間　瞳・島袋春美・金城礼子・西銘パトロシニア・仲村恒子・島　京美・備瀬枝美子・座間味美津子・立津春枝・島袋里美・喜屋武さおり・源河秀子・玉城恵美利・知念純子・石嶺眞由美・新垣千恵子・川満奈美子・喜舎場かおり・高良三千代。
別府大学　学生 城間　肇。

○ 発掘調査協力者（平成６年度）
金成淳一・松本　茂（以上２名　富山大学　学生)。山本 正昭（奈良大学　学生)。
松竹　譲・喜屋武盛世・宮里富二男（以上３名　松竹重機)。澤岻直彦（与那嶺測量設計）
国営沖縄記念公園事務所 首里出張所・海洋博覧会記念公園 管理財団首里城管理センター

◎ 平成７（1995）年度　組織　（遺構調査年度）

○ 事業主体　沖縄県教育委員会　教 育 長　仲里 長和
○ 事業所管　沖縄県教育庁文化課　課　長　西平 守勝
同　上　副 参 事　濱比嘉 勝
○ 事業総括　同　上　課長補佐　日越 国昭
同　上　課長補佐　新垣 末子
○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　管 理 係　主幹兼係長　比屋根 正治
同　上　〃　主　査　新垣 和子
同　上　〃　副 主 査　宮城 直子
同　上　〃　副 主 査　新崎 文子
同　上　〃　主　事　伊波 盛治
○ 事業実施　沖縄県教育庁文化課　史跡整備係　係　長　上原　靜（発掘総括者）
同　上　〃　指導主事　運天 和夫
同　上　〃　指導主事　我那覇　念
同　上　〃　主　任　盛本　勲
同　上　〃　主　任　金城 亀信（発掘担当者）
同　上　〃　嘱託調査員　高宮とり・渡邊尚子
○ 事業協力　沖縄県教育庁文化課　埋蔵文化財係　係　長　大城　慧
沖縄県教育庁文化課　埋蔵文化財係　主　任　島袋　洋

沖縄県教育庁文化課　埋蔵文化財係　指導主事　西銘　章
同　上　〃　専門員　金城　透

○ 発掘調査作業員（平成７年度）

大城輝子・仲程喜美子・永吉弘子・島袋文子・稲福フミ子・仲里春子・玉城信子・小波津ヨシ子・柚木崎末子・城間智子・呉屋正一・小波津夏子・山畑キミ・呉屋光子・幸地ヨシ子・玉城富子・小橋川恵子・小橋川幸子。

別府大学 学生 城間　肇、琉球大学 学生 米須美津、富山大学 学生 金成淳一・松本 茂、沖縄国際大学 学生　上原 久

○ 資料整理作業員（平成７年度）

伊波小百合・新垣千恵子・石橋朝子・小嶺禮子・浜元春江・又吉純子・仲間留美・大村広美・高良三千代・玉城恵美利・安和千代子・平良貴子・金城 薫・知念純子・岡村綾子・上原園子・外間 瞳・津波古好子・比嘉登美子・折田衣代・金城美折・金城さおり・長田 剛・伊波和歌子・又吉亜由美

◎ 平成８（1996）年度　組織　（遺構調査年度）

○ 事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	仲里 長和	
○ 事業所管	沖縄県教育庁文化課	課　長	大城 将保	
	同　上	副参事	川満 一成	
○ 事業総括	同　上	課長補佐	日越 国昭	
	同　上	課長補佐	稲嶺 靖子	
○ 事業事務	沖縄県教育庁文化課	管理係	主幹兼係長	比屋根 正治
	同　上	〃	主　査	村山 佐代
	同　上	〃	副主査	新垣 敏子
	同　上	〃	主　任	當間 保智
	同　上	〃	主　事	上原 直樹
○ 事業実施	沖縄県教育庁文化課	史跡整備係	係　長	上原　靜（発掘総括者）
	同　上	〃	指導主事	運天 和夫
	同　上	〃	指導主事	我那覇　念
	同　上	〃	主　任	盛本　勲
	同　上	〃	主　任	金城 亀信（発掘担当者）
	同　上	〃	嘱託調査員	高宮とり・渡邊尚子
	同　上	〃	嘱託調査員	矢沢秀雄・稲垣千明
○ 事業協力	沖縄県教育庁文化課	埋蔵文化財係	係　長	大城　慧
	同　上	〃	主　任	島袋　洋
	同　上	〃	指導主事	比嘉　聡
	同　上	〃	専門員	長嶺　均・金城　透
	同　上	〃	専門員	上地　博・仲座 久宜

○ 発掘調査作業員（平成８年度）

大城輝子・仲程貴美子・永吉弘子・小波津ヨシ子・桃原隆信・瑞慶覧長祐・瑞慶覧繁美・真栄城千枝子・宮城澄子・中原ミツ子・安次富マサ子・諸見里幸子・金城和也・城間 肇・山本正昭・喜舎場盛安・安次富正寿・桃原佐恵美・仲村トヨ子・山内利江子・小松博幸・中塚末子・呉我フジ子・宮国恵子・与那嶺勢津子・大城愛子・大城かおる・外間徳男

○ 資料整理作業員（平成８年度）

米田愛子・知念純子・岡村綾子・新垣千恵子・伊波小百合・嘉数禮子・金城 薫・備瀬枝美子・浜元春江

・玉寄智恵子・石橋朝子・石垣奈美・津波昭史・島袋春美・仲宗根三枝子・城間千鶴子・田場直樹・當山慶子・金城美祈・我那覇悠子・比嘉孝子

◎ 平成９（1997）年度　組織　（「京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）」報告書刊行年度）

○ 事業主体　沖縄県教育委員会　教育長　安室　肇
○ 事業総括　沖縄県教育庁文化課　課　長　大城 将保
同　上　課長補佐　日越 国昭
同　上　課長補佐　稲嶺 靖子
○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　管理係　主幹兼係長　大浜　節
沖縄県教育庁文化課　管理係　主　査　村山 佐代
同　上　〃　主　査　砂川 邦子
同　上　〃　主　事　上原 直樹
○ 事業実施　沖縄県教育庁文化課　史跡整備係　係　長　上原　静
同　上　〃　充指導主事　運天和夫
同　上　〃　充指導主事　我那覇 念
同　上　〃　主　任　盛本　勲
同　上　〃　主　任　金城　透
同　上　埋蔵文化財係　主　任　金城亀信
同　上　〃　補助員　渡邊尚子・花城五百子・宮城利香・崎浜陽子
同　上　〃　嘱託調査員　矢沢秀雄・島袋春美・赤嶺雅子・玉寄智恵子
同　上　〃　嘱託調査員　又吉純子・比嘉優子・城間　肇
○ 資料整理指導および協力者

文化庁　記念物課　埋蔵文化財部門　文化財調査官　坂井秀弥（中国陶磁）
文化庁　〃　〃　文化財調査官　小池伸彦（考古学　生産遺跡）
出光美術館理事（元東京国立博物館　次長）　長谷部楽爾（中国陶磁）
出光美術館　学芸課長　弓場紀知（同　上）
国立歴史民俗博物館　考古研究部教授　吉岡康暢（中世陶器）
財団法人　市原市文化財センター　調査研究員　牧野光隆（考古学）
財団法人　沖縄県文化振興会　史料編集室　主幹　安里嗣淳
沖縄県教育庁文化課　埋蔵文化財係　係　長　大城　慧
同　上　〃　主任専門員　岸本義彦
同　上　〃　主　任　島袋　洋
同　上　〃　専門員　上地　博
同　上　〃　充指導主事　比嘉　聡
沖縄県立博物館　学芸課　主幹兼課長　當眞嗣一（「京の内」出土品展関係者）
同　上　〃　充指導主事　津波古　聡（「京の内」出土品展指導助言）
同　上　〃　学芸員　仲間留美（「京の内」出土品展示協力）
佐賀県教育庁文化課　課長補佐　大橋康二
沖縄県教育庁文化課　文化財係　有形文化財（美術工芸）主任　園原　謙
同　上　〃　民俗文化財　充指導主事　桃原茂夫
財団法人岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター調査課　課長補佐　高橋與右衛門
那覇市教育委員会　文化課　課長　金武正紀
岡山県古代吉備文化財センター調査第二課長　伊藤　晃

東洋陶磁学会会員　森本朝子
山口県立萩美術館　学芸員　宮田絵津子

○ 発掘調査作業員（平成９年度）
小波津ヨシ子・大城輝子・大嶺愛子・永吉弘子・仲程喜美子・瑞慶覧 長祐・瑞慶覧 繁美・諸見里幸子・安次富マサ子・勢理客智也・真栄城千枝子・宮城澄子・中原ミツ子・桃原隆信・島袋朝輝・桃原さおり・島仲恵子・比嘉清恵・比嘉 剛・浦崎京子・伊佐美幸・上間宏美
沖縄国際大学卒業生 藤崎　京。別府大学卒業生 城間 肇。奈良大学 学生 山本正昭。

○ 資料整理作業員（平成９年度）
請盛智秋・嘉数禮子・備瀬枝美子・石橋朝子・知念純子・岡村綾子・伊波小百合・玉城恵美利・源河秀子・渡邊尚子・牧志加代子・国吉春美・池原直美・瑞慶覧尚美・謝名元かずみ・茂太春枝・川上貴美子・上原富士子

○ 資料整理作業協力者（平成９年度）
比嘉孝子・新垣利津代・比嘉登美子・大城勝江・上原園子・城間千鶴子・外間　瞳・仲宗根三枝子・安和千代子・永友和子・村山理代・折田衣代・長田　剛・田中ゆきの・金城洋子・高良三千代・玉榮さとみ・吉田昌子・金城　薫・手嶋永子

◎ 平成 21（2009）年度　組織　（「京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）」資料整理年度）

○ 事業主体　沖縄県教育委員会　教　育　長　金武 正八郎
同　上　教育指導統括監　大城　浩　・教育管理統括監　岩井 健一

○ 事業総括　沖縄県教育庁文化課　課　長　大城　慧
同　上　副参事兼文化班長　仲本　興彦

○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　文化班　主　任　篠田　卓也
同　上　〃　主　任　林　梨津子
同　上　記念物班　班　長　島袋 洋
同　上　〃　指導主事　久高　健

○ 事業実施　沖縄県立埋蔵文化財センター　参事兼所長　玉栄　直
同　上　総務班　班　長　嘉手苅　勤
同　上　総務班　主　査　本永 恵
同　上　〃　再任用主査　知念 百合子
同　上　〃　主　任　村吉 由美子（予算担当）
同　上　調査班　班　長　金城 亀信（資料整理・報告書作成担当）
同　上　〃　主　任　仲座 久宜（御内原地区発掘調査担当）

○ 資料整理指導および協力者
沖縄国際大学　総合文化学部　社会文化学科　教授　上原　静（考古学）
京都国立博物館　学芸課　工芸室長　久保　智康（金属製品解釈指導）
佐賀県立九州陶磁文化館　館長 大橋 康二（陶磁器）
千葉県立中央博物館　動物学研究科　上席研究員　黒住 耐二（貝類分析解釈指導）

○ 資料整理作業及び協力者（平成 21 年度）
沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班　主 任　知念 隆博（金属製品・ガラス製品 軟Ｘ線撮影・現像）
文化財調査嘱託員　岩元さつき・大城 歩・大堀 皓平・内間 真吾・岸本 竹美
埋蔵文化財資料整理嘱託員　赤嶺雅子・新垣利津代・池原直美・伊藝由希・石嶺敏子・伊藤恵美利・伊禮若奈・上原園子・上原美穂子・大村由美子・荻堂さやか・金城政史・金城友香・久保田有美・崎原美智子・城間千鶴子・瑞慶覧尚美・平良貴子・

高良三千代・玉城照美・玉城実子・玉寄智恵子・友利映子・仲宗根三枝子・
譜久村泰子・外間瞳・比嘉登美子・久田慎子・又吉純子・矢舟章浩・
吉村綾子

資料整理作業員　上地由紀子・具志良子・津多 恵・宮里有季子・又吉志麻子

◎ 平成 22（2010）年度　組織　（「京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）」報告書刊行年度）

○ 事業主体　沖縄県教育委員会　教　育　長　金武 正八郎
同　上　教育指導統括監　大城　浩　・教育管理統括監　山里　清

○ 事業総括　沖縄県教育庁文化課　課　長　大城　慧
同　上　副参事兼文化班長　仲本　興彦

○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　文 化 班　主　任　篠田 卓也
同　上　〃　主　任　城間 奈津子
同　上　〃　主　任　林　梨津子

○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　記念物班　班　長　島袋 洋
同　上　〃　指導主事 久高　健

○ 事業実施　沖縄県立埋蔵文化財センター　所　長　守内 泰三
同　上　総 務 班　班　長　嘉手苅 勤
同　上　〃　主　査　玉寄 秀人
同　上　〃　主　査　本永　恵
同　上　〃　主　査　恩河 朝子
同　上　〃　再任用主査　比嘉 市子
同　上　〃　臨任主事 玉城 飛鳥
同　上　調 査 班　班　長　金城 亀信（資料整理・報告書作成担当）
同　上　〃　主　任　瀬戸 哲也（叔順門西地区発掘調査担当）

○ 資料整理指導（平成 22 年度）
沖縄国際大学　総合文化学部　社会文化学科　教授　上原　静（考古学）
京都国立博物館　企画室長　久保　智康（金属製品解釈指導）
東京文化財研究所　保存修復科学センター　分析化学研究室長　早川　泰弘（保存科学）
佐賀県立九州陶磁文化館　館長　大橋 康二（陶磁器）
糸満市役所 経済観光部 商工労働課　課長　金城　善（歴史民俗関係指導）

○ 資料整理作業及び協力者（平成 22 年度）
沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班　主 任　中山 晋（地形図データ処理加工）
文化財調査嘱託員　岩元さつき・内間真吾・大城 歩・岸本竹美・具志堅清大・菅原沙香・瑞慶覧長順・
徳嶺里江・長嶺 優・比嘉優子・宮城明恵・山口こずえ
埋蔵文化財資料整理嘱託員 赤嶺雅子・新垣みどり・新垣裕子・池原直美・伊藝由希・伊佐えりな・
石嶺敏子・伊藤恵美利・殷 兪平・上地由紀子・上原園子・上原美穂子・
大村由美子・金城政史・具志良子・久保田有美・城間千鶴子・瑞慶覧尚美・
高良三千代・玉城実子・玉城照美・玉寄智恵子・津多 恵・土田智恵美・
當山哲也・仲宗根三枝子・仲宗根めぐみ・中山まり・野村知子・比嘉登美子・
譜久村泰子・外間 瞳・又吉志麻子・又吉純子・宮里絵里・矢舟章浩・
山川由美子・吉村綾子

資料整理作業員　城間裕子

第４節 調査の経緯

首里城京の内跡の発掘調査は、平成６（1994）年11月21日から開始して翌年の３月28日までの約５ヶ月間にわたって実施された（第９図上段）。なお、事前に不発弾検出のための磁気探査を９月19日・20日の二日間実施し、異常点の掘削探査に立ち合って調査を実施した。

調査地区の発掘前の状況は、平成４(1992)年の首里城正殿、北殿、南殿、奉神門、廣福門などの復元整備が完了し、首里城公園として一部が開園した。開園に伴って京の内地域は、北側の下之御庭から南側の斜面地まで客土がなされ、全面に芝張りで暫定的な仮整備が行われていた。客土は琉球大学の基礎跡より上になされていて、調査は仮整備の芝の除去から始まり、次に客土の除去をバックホウ（クローラ型）でおこない琉球大学の旧地表面まで剥ぎ取った後に磁気探査（水平探査）をおこなった。磁気探査の測線間隔は、１m間隔の35測線で探査の総距離程は2,432 mであった。磁気探査の結果、発掘調査地区内で異常点が61ヶ所が確認された。掘削を伴う確認探査で61ヶ所の内、29ヶ所が鉄筋コンクリート、鉄筋、鉄パイプ、鉄片、鉄筋コンクリート板、鉄屑、鉄管、番線（針金）入りコンクリート、マンホールの９種類が確認された。磁気探査での磁気異常測定から反応した磁気量は、５ガウス～50ガウス以上で鉄屑・鉄片・鉄パイプのサイズなどの差で、磁気量が変化するようであった。異常点61ヶ所の内、深度が90cm ～ 100cmまでの範囲内で、磁気量が14ガウス～60ガウスの範囲内に収まった10ヶ所については、調査員が立ち合いで往時の遺物や遺物包含層を確認する目的も兼ねて不発弾の検出を行った。磁気探査の結果、琉球王国時代の遺物や沖縄戦で使用された不発弾等は検出されなかった。

この時点で磁気探査を終了したが、琉大地盤を東側から西側へバックホウ（クローラ型）で慎重に旧表土を削平しながら掘り下げたところ手榴弾４発、砲弾２発を検出したため、関係機関に連絡を入れて処理を依頼した。その後、遺構内の崩れた栗石を手作業による除去をおこなっていた調査員が持ち上げた石の下から完形の信管付の不発弾（推定サイズは長さ64.2cm、幅17.1cmで、野戦砲155ミリ砲弾以上から203ミリ未満の砲弾とみられる。弾頭信管が東を向いている事から米軍が那覇の西方13kmのチービシにある神山島に重砲陣地を構築、この陣地から発射された砲弾の可能性がある。）が見つかり、調査員は手に持った石（25kg）を下ろすわけにもいかず、そのままゆっくりと栗石の中を歩きながら10数m離れた土砂置き場まで石を運んだ。急ぎ、調査員が戻って不発弾の状況を確認したところ砲弾先端の信管に青錆が発生し、非常に危険な状態にあると判断して土嚢袋に土砂を入れて、土嚢袋で不発弾の周辺を囲い、更に直射日光が当たらないようにブルーシートで覆い、直ちに警察に通報し、自衛隊へ不発弾処理を依頼した。

不発弾も無事撤去されたが、磁気探査は地表面から１m以内しか反応しないことが後になってわかった。また、発見された不発弾は、砲弾が回転しながら飛来し、回転しながら遺構内の栗石に潜り込んで、砲弾先端部分の信管が栗石に衝突することなく栗石と栗石の間に挟まったまま停止して不発弾となったことが判明した。

このような状況で琉球王国当時の地表面と首里第一尋常高等小学校（1912年～1945年）当時の地盤までバックホウ（クローラ型）や手掘りで掘り下げたが、調査地区の南側半分は琉球大学校舎（短大管理棟、理科実験室、教育校舎及び同ビル別館、法文校舎及び同ビル別館Ｂなど）建築の際の造成により琉球石灰岩の掘削や削平がなされ、遺構の残り具合は悪かった。逆に北側は琉大校舎地盤のレベルより低い地域は、道路、中庭、各校舎への通路と利用されたことと校舎などの構築物が建設される事がなかった事が幸いして、旧表土レベル内での軽微な攪乱を受けている程度で、全体的に遺構の保存状態は良好であった。遺構検出に際しては、遺構直上までバックホウで慎重に削平しながら遺構を確認しながら掘り下げた。この辺はオペレーターの松竹譲氏の長年の経験(10年）と技術が生かされ5cm前後の誤差で剥ぎ取りが可能となり、調査がスムーズに進行していった。遺構直上より下部の発掘調査は、人力による手作業で遺構を露出させながら掘り下げていった。

遺構の検出に際しては確認され次第、第16図のように遺構の形状などから記号と番号を検出順に冠していった。また、遺構の性格や時期を具体的に把握する目的で、遺構沿いにトレンチを入れながら発掘調査を進行させた。結果として検出された遺構は51基（調査終了時点で、遺構番号に重複が発生）を数えた（註１）。その後、遺構の整理（途切れた石積み遺構同士が繋がり一つの遺構として整理、SA19・SA20・SA28が土壙SK01の倉庫跡となるなど）と検討をすすめたところ平成12（2000）年度の段階で39基（註２）となった（第１表）。

これらの遺構発掘調査で約５ヶ月を要したが、土層図や遺構の断面図の作成などで時間を要し、実測図が完成したのは、平成７（1995）年12月14日までの期間となり、実に発掘調査開始から終了までの期間は１年１ヶ月間〔平成６（1994）年11月21日～平成７（1995）年12月14日〕を要した。その間、国営沖縄記念公園事務所より新たに平成７年度事業（第14図）で、京の内南側一体の1,000㎡を受託事業として県教育委員会が発掘調査を実施することとなり、管理用道路の北側一帯を「京の内北地区」（平成６年2,000㎡）と同道路の南側一帯を「京の内南地区」（平成７年1,000㎡）と地区を分けて、平成７年度の南地区の発掘調査と平行しながら平成６年の北地区の図面実測作業を行い、両地区とも無事に作業を平成７（1995）年12月14日に終了した。引き続き、平成８（1996）年７月１日～３月28日までの９ヶ月間、「京の内西側地区」（調査面積約1,000㎡）を実施した。

第２表　平成６（1994）年度「京の内」跡検出遺構件数の新旧関係

NO.	種　類	遺構の記号と番号	旧件数（1994年時点）	新件数（2000年時点）
１．	石 積 み	SA01～SA27・SA29～SA34	33基	17基
２．	石　　列	SR01・SR02	２基	２基
３．	石敷き・磚敷き	SS01～SS03	３基	６基
４．	溝	SD01～SD07	７基	10基
５．	土　　壙	SK01～SK03	３基	３基
６．	建　　物	SB01・SB02	２基	１基
７．	階　　段	SA28	１基	０基
遺　構　合　計			51基	39基

平成６（1994）年に実施した京の内北地区（約2,000㎡）の埋め戻しは、平成８（1996）年２月29日に遺構や往時の面を保護するために白砂を15cm前後の厚さで岩盤の石灰岩を含む調査区2,000㎡に敷いて、その上に残土を50～70cmの厚さで盛って埋め戻した。この埋め戻しに際しては、重機（バックホウ、タイヤショベル、ローラー）を使用するため、埋め戻しの方法について協議しながら行った。遺構面については調査員立ち会いのもとで人力による埋め戻しを実施した。

註文献

註１．沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会 平成10（1998）年３月。
註２．金城亀信「首里城「京の内」跡の発掘調査概要」重要文化財指定記念 特別企画展『首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年３月。

引用及び参考文献

１．財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』平成７（1995）年３月。
２．金城亀信「首里城跡「京の内」跡出土の輸入陶磁器－紅釉水注を中心に－」『特集 琉球考古学最新情報』考古学ジャーナル N0.437 1998年。
３．沖縄県不発弾対策協議会『不発弾等処理対策便覧』2004年３月。
４．平成15年度 大規模駐留軍用地等利用推進調査事業 文化庁支出委任『埋蔵文化財広域発掘手法検討調査業務概要－物理探査及び検証発掘調査の検討成果－』沖縄県教育委員会 2004年３月。
５．平成15年度 文化庁支出委任『物理探査を利用した埋蔵文化財広域発掘調査手法－物理探査実施マニュアルおよび解説－』沖縄県教育委員会・社団法人物理探査学会 2004年３月。
６．金城亀信「沖縄における物理探査の現状」『文化財と探査』vol.6 No.2 日本文化財探査学会 2005年８月。
７．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2009年３月。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

首里城跡は、昭和 47（1972）年５月 15 日の本土復帰の際に国の史跡として指定された。その後、平成 12（2000）年 12 月２日に国際連合教育科学文化機関「ユネスコ（UNESCO）」の世界遺産（文化遺産）として首里城跡を含む９資産が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として登録され、平成 22（2010）年に登録 10 周年目を迎えた。

国指定史跡首里城跡は、沖縄県庁の所在地である沖縄本島南部の那覇市にあり、地番が那覇市首里当之蔵３丁目１番となっている。かつては琉球大学が所在した場所（第３図・第 84 図・第 85 図）であった。

那覇市の総面積は、平成 20（2009）年 10 月現在で 39.24㎢（参考：1995 年の総面積は 38.74㎢）を有している。那覇市の総人口は、平成 21（2010）年 11 月末現在で 318,300 人、世帯数 136,088 世帯である〔参考：平成８（1996）年 10 月１日現在の人口は 300,809 人、世帯数 105,638 世帯〕。気候は亜熱帯気候に属している。

那覇市の平成 22（2010）年 12 月現在の気象概要は、平均気温は 23.1℃、最高気温 33.2℃、最低気温 9.1℃、総降水量 2,895.5mm であった〔参考：京の内跡の発掘調査を最初に実施した平成６（1994）年の那覇市の平均気温は 23.0℃、最高気温 33.7℃、最低気温 10.3℃であった〕。

曾て琉球王国の王都であった首里の町は、那覇市内でも比較的に標高の高い地域（第２図、第５・６図）にあり、概ね 70 ～ 135m 程度を有する第四紀層の琉球石灰岩台地に形成された町でもある。町の南側にある標高 100 ～ 135m の丘陵上に首里城が立地している。

首里城跡（第５・６図）の北には、末吉の丘陵があり、西から西森（標高 102.1m）や虎頭山（標高 132.5m）、そして北東には王府時代に旧暦の正月・五月・九月に国王の親祭がなされた弁ヶ嶽（標高 165.6m）と称される丘へと途切れながら小丘陵が点在する。これらの丘陵と首里城の間を儀保川が西へと流れ注いでいる。弁ヶ嶽の南側には、南風原町との境界となるナゲーラ川が南西へと流れる。南側には首里城眼下を流れる金城川と識名丘陵を望むことができる。首里丘陵の南側から西側一帯は急傾斜や緩斜面となり、金城川や真嘉比川が安里・大道の区域を流れて漸次、緩い傾斜をもって平坦地の那覇市内へと移行する。

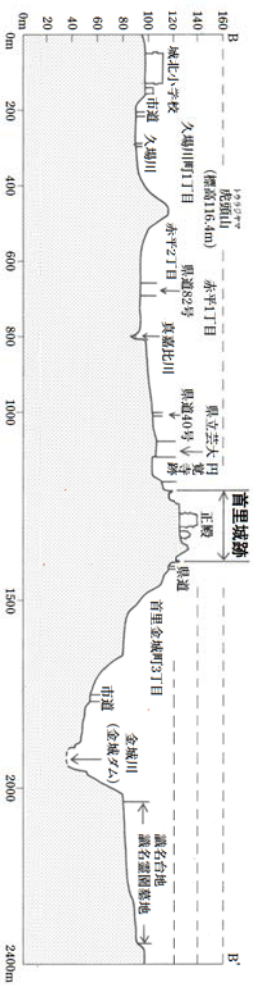
首里城を中心に周辺地形をみると東側および南・北の両側は、三方向に丘陵や河川による自然地形が城の障壁となっていて、西側の一部（松川・大道方面）と北西側の一部（松島・古島方面）が丘陵の尾根となり、緩やかな斜面となっている。この尾根緩斜面の内側が急斜面となり漸次、南西方向へ扇状に開いたような盆地状の地形となっている。首里周辺の地質の基盤は新第三紀与那原層下部シルト岩（泥岩）で、その上部に前述した琉球石灰岩（第四紀層琉球層群下部）が堆積している。

このように首里の南側丘陵地の西寄りの高所（標高 100 ～ 135m）に城を普請するには最良の適地（第５図）であったものとして理解される。また、首里城内の東のアザナ（135.5m）、西のアザナ（125.5m）、京の内の物見（135m）からは、北は座喜味城跡・浦添城跡の立地する丘陵、東は久高島や大里城跡・糸数城跡の所在する丘陵地を確認することができる。南に目を向けると遠くは多々名グスク・八重瀬グスクのある丘陵地も確認できる。西側は天候が良ければ久米島・渡名喜島・粟国島までが視野に入る日もある。

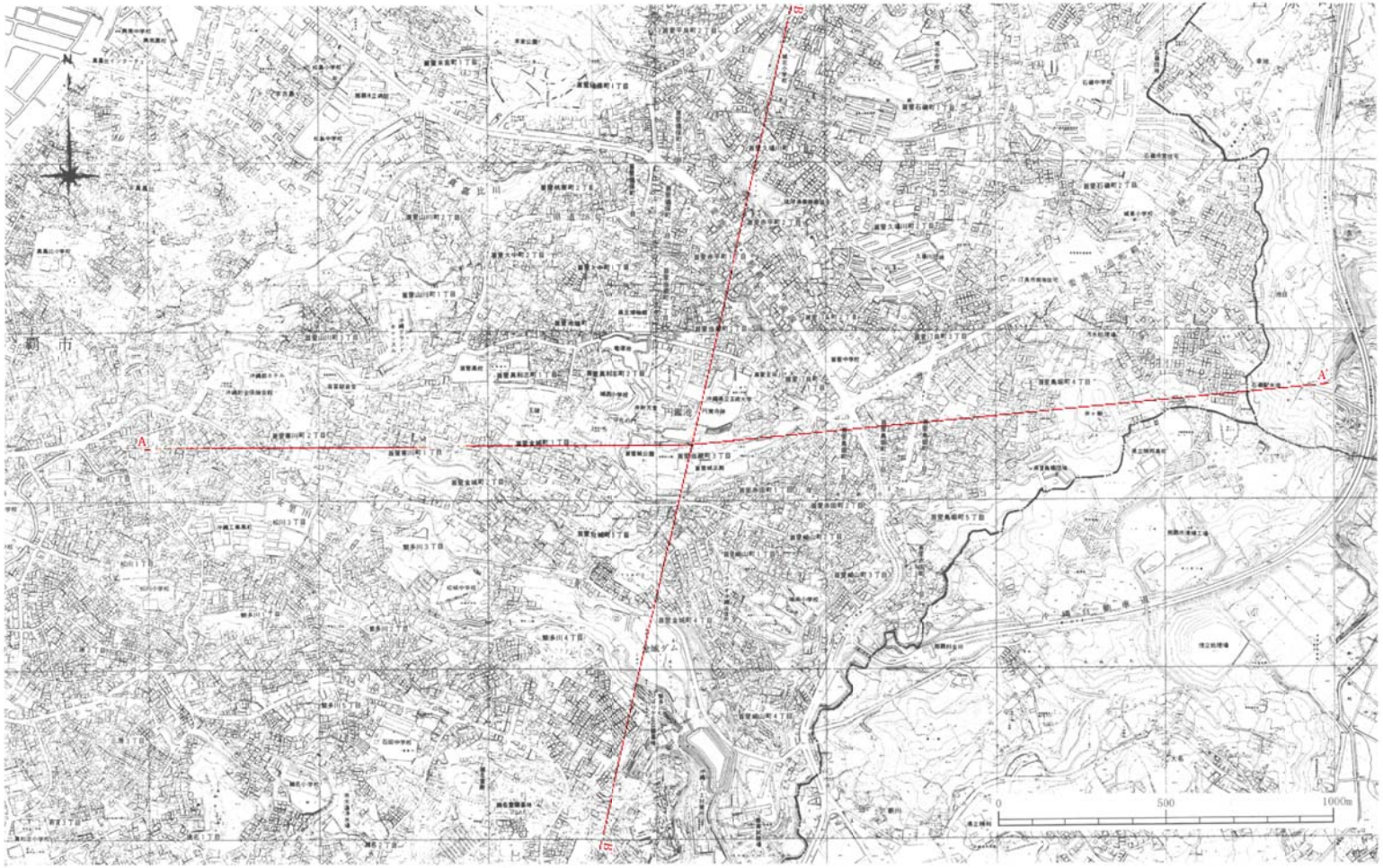
今回報告の対象となる地域は、首里城の内郭下之御庭に接する南側の地域で琉球王国時代においては３～７ｍ程度の高い石積みで区画されていた。俗に「京の内」と呼称されていた区域である。京の内は首里城の中でも聖域として崇められていた場所でもあった。京の内の南側は城内でも高い位置にあり、標高は 135 ｍを有し、北側に向かって傾斜しながら標高 121 ｍの平坦地である下之御庭へ移行する。下之御庭の北側から下位の久慶門・歓会門の内側地域は、昭和 59（1984）年の発掘調査で斜面の中間から下は琉球王国時代の土木事業による造成で埋め立てられた人工の地盤であることが確認されている。

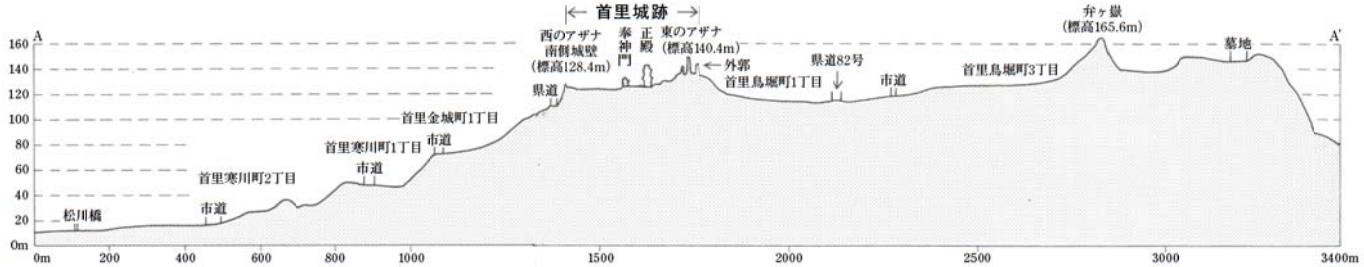
参考および引用文献

・沖縄県統計協会　『2011 県民手帳』　2011 年度版。



城北小学校～識名台地間（総延長2400m）の横断図





松川橋～弁ヶ嶽間（総延長3400m）の横断図

第5図　首里城周辺の横断図

（『那覇市全図（1：10,000）』那覇市都市計画部計画課 平成8年3月と『首里城跡測量図』県教育庁文化課作成を貼り合わせて作成した）

・那覇市教育委員会 『那覇市歴史地図－文化遺産悉皆調査報告書－』 1986 年。
・沖縄タイムス社 『沖縄大百科事典』 1983 年。
・木崎甲子郎編著 『琉球弧の地質誌』 沖縄タイムス社 1985 年。
・沖縄県文化財調査報告書 第 88 集『首里城跡－歓会門・久慶門内側地区の復元整備にかかる遺構調査－』沖縄県教育委員会 1988 年 3 月。
・沖縄県文化財調査報告書 第 132 集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会 1998 年 3 月。
・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)－』沖縄県立埋蔵文化財センター2009年 3月。
・那覇市役所「那覇市」公式ホームページ www.city.naha.okinawa.jp 確認日：2010 年 12 月 31 日。

第 2 節　歴史的環境

昭和 57（1982）年に那覇市教育委員会が報告した遺跡の実数は、38 遺跡（註１）が確認されていたが、22 年後の平成 16（2004）年に沖縄県立埋蔵文化財センターが県内各市町村に依頼作成した「市町村別遺跡情報一覧（暫定）」に拠ると那覇市内には 79 遺跡が登録されている（註２）。22 年間で遺跡数が 41 件増加している。増加の原因は、個人住宅及び公共施設の建て替えによるものや昭和 62（1987）年に米軍用地（牧港ハウジングエリア）が返還され、これに伴う土地区画整理事業で古墓群やグスク期の遺跡が 21 箇所（註３）発見され、発掘調査が実施された。那覇市教育委員会文化財課のひとつの考え方として、首里城周辺を「城下町的遺跡群」、那覇港周辺を「港町的遺跡群」などとして位置づけているようである（註４）。

首里周辺での遺跡調査（第６図）で、南側の識名丘陵では沖縄県農業試験場跡地の西方にある識名台地東縁の琉球石灰岩崖下に嵩下原第Ⅰ洞穴（旧石器時代）・嵩下原貝塚（縄文後期相当）の報告（註１）がある。識名台地内では識名原遺跡（弥生～平安時代相当～近世・近現代。註５）・識名シーマ御嶽遺跡（グスク時代。註６）などが確認されている。そして、首里城の南側に近接する崎山御嶽遺跡からは奄美諸島で形式設定された縄文後期の面縄東洞式土器や石斧などが報告（註７）があり、首里城城郭南側斜面（京の内南側崖下一帯）からも面縄東洞式土器が２片と荻堂式若しくは大山式土器１片、弥生～平安時代相当の土器１片などが報告（註８）されている。

更に首里城内郭の下之御庭～木曳門地区の調査では、面縄東洞式土器２片、嘉徳Ⅱ式系統の土器１片が報告（註９）されている。

次に首里城の北側に位置する末吉丘陵の東南縁及び周辺には、末吉町シカ化石出土地や首里西森遺物散布地（縄文後期・グスク時代）が報告（註１）されている。また、鳥堀から儀保に延びる石灰岩丘陵を「虎頭山」と称しているが、この丘陵地内で石斧が１点出土した虎頭山石器出土地（註１）がある。首里城の北に隣接した第一尚氏の墓陵であった天山陵（註 10）の所在する丘陵西端近くに約 2,500 年前の山川貝塚（縄文晩期相当）が報告（註１）されている。

首里城に関する文献資料で京の内との兼ね合いから、特に高世層理殿に関する主要な文献や最新の研究成果を記載する（参考図面：第７・８図）。

僧侶の袋中上人が記した『琉球神道記（1608 年編集）』（註 11）には、「この国の国王で、大世の主と申しあげる方は、毒蛇を恐れて高楼を建立し、厚い板で囲いを作った。・・後略・・」と記載がある。

『中山世鑑（1650 年編集）』（註 12）には、1392 年（洪武 25 年）に「察度王モ後ニハ驕奢ノ御心ヤ出来ケン高ヨサウリトテ数十丈ノ高楼ヲ作リ遊観ヲシ給ケル‥(後略)」と、中山王察度が数十丈の高楼の“高ヨサウリ”（高世層理殿）にて遊観していることが記載されている。

『蔡鐸本中山世譜（1697 年～ 1701 年編集）』（註 13）の洪武 25 年の項にも「王後驕奢建造数十丈之高楼‥後略‥」と記載されている。

『琉球國由来記（1713 年編集）』（註 14）項目の「楼」には、「當國、楼者、察度王、始高世層裡、造營於下之玉庭之南（向北方）」と記載されている。

『球陽（1743 年～ 1876 年編集）』（註 15）の察度王 43 年（1392 年）項目「高楼を建造して以て遊観に備る」に、「是れに由りて王、稍驕奢にして、数丈の高楼を建造し、以て遊観に備ふ。一日、楼に登り戯言して曰く、予此の楼に居る。誰か敢へて害を加へんやと。・・後略・・」と記載されている。

第６図　首里城周辺主要文化遺産分布図

第3表　首里城周辺主要文化遺産分布表（第6図の番号と一致）

●遺跡

1.	虎頭山石器出土地（丸ノミ型石斧1点採集）
2.	首里窯（窯業の窯ではなく、カマキー（竈飯）との説もある）
3.	山川貝塚（沖縄貝塚時代 中期：縄文晩期相当）
4.	中城御殿跡（1875年に創建）
5.	天山陵跡（第一尚氏：尚巴志の墓）
6.	円覚寺跡（1494年建立）
7.	貝摺奉行所跡（1612年創設）
8.	国学・孔子廟跡（国学王府の最高学府で1798年創建。孔子廟1837年建立）
9.	御細工所跡（17世紀初頭に創設）
10.	上ノ毛（グスク～近・現代）
11.	首里城跡（14世紀～19世紀後半）
12.	クンダグスク（1469年、第二尚氏を興した金丸（尚円）のクーデターで殺害された第一尚氏尚徳の幼世子の脛骨を葬った墓）
13.	ジングンジューウスメ墓（首里城内の王族の墓だと伝承される）
14.	真珠道跡（1522年に整備）
15.	守礼門（首里城第二の坊門。1528年創建）
16.	綾門大道跡（15世紀初頭～15世紀前半頃に整備）
17.	天界寺跡（第一尚氏：尚泰久時代の1450年～56年に創建）
18.	玉陵南側洞穴遺跡（グスク～近世）
19.	玉陵（第二尚氏王統の墓陵。1501年創建）
20.	世子殿跡（中城御殿ともいう。1875年に旧県立博物館に移転）
21.	中山門（首里城第一の坊門。1428年創建）
22.	崎山御嶽遺跡（グスク時代）
23.	崎山遺跡（シカ化石出土）
24.	首里崎山古墓群（19世紀以降）
25.	首里金城町フチサ古墓群（近世）
26.	ナカンダカリヤマの古墓群（グスク～現代）
27.	御茶屋御殿跡（1677年創建。東苑とも言う）
28.	東苑（御茶屋御殿と崎山御殿。旧王家の別荘）
29.	崎山御殿跡（御茶屋御殿の別邸として、1682年創建）
30.	魚下原第1洞穴（シカ化石採集）
31.	魚下原遺跡（グスク時代）

▲庭園・主要御殿・池・橋

32.	聞得大君御殿跡（王府時代の最高神女の官邸）
33.	伊江殿内の庭園
34.	仲田殿内の庭園
35.	中城御殿跡の庭園
36.	首里殿内跡（王府時代の高級神女首里大阿武志良礼の官邸）
37.	当真家の庭園（華茶苑）
38.	天女橋
39.	円鑑池
40.	龍潭池
41.	世持橋
42.	金城橋

★御嶽・拝所等（首里城内を除く）

43.	白金ダケノ御イベ
44.	アモトダケノ御イベ
45.	クムデ森ノ御イベ
46.	アスイ森ノ御イベ
47.	安谷川ノ嶽
48.	中里大嶽
49.	中里小嶽
50.	アカス森ノ御イベ
51.	国中城ノアマフレダケノ御イベ
52.	ソノヒヤブイ御イベ
53.	カナヒヤンウタキ
54.	貝上森ノ御イベ
55.	キミコイシ嶽
56.	末衛増（シーマシ）嶽
57.	雨乞ノ嶽
58.	崎山ノ嶽
59.	内金城之大嶽
60.	内金城之小嶽
61.	ビジュル毛
62.	チュンナー瀬川

■井泉

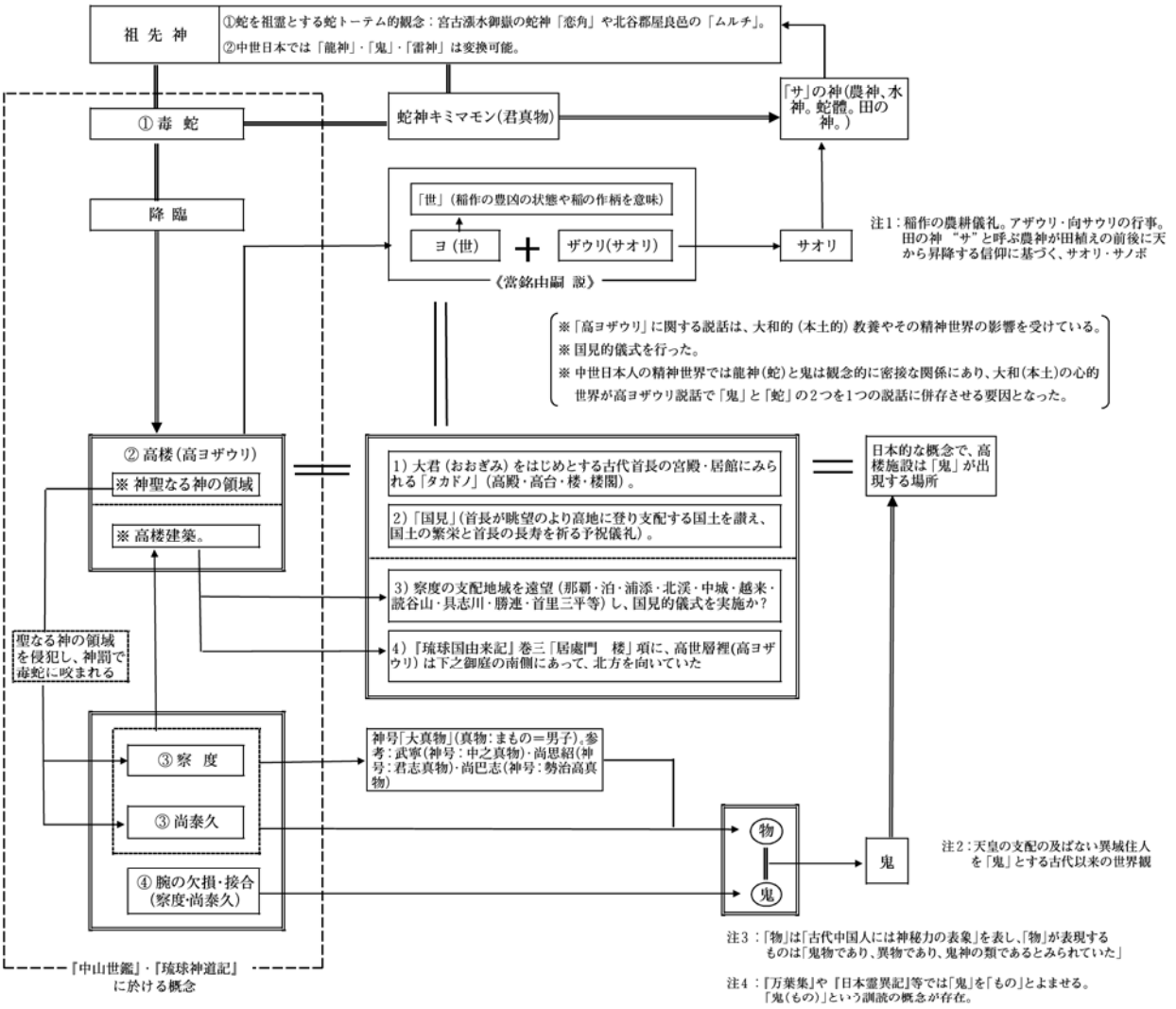
63.	ヤマノカー
64.	安谷川（アダンガー）
65.	ヤマトガー
66.	ミーガー
67.	山川樋川
68.	佐久之川
69.	赤田寒水川
70.	崎山樋川
71.	大悲院（デーヒン）ガー
72.	金城大樋川（ウフヒージャー）
73.	ボージガー
74.	潮汲（ウスク）川（ガー）
75.	寒水（スン）川樋（ガーヒージャー）川
76.	ハルガー

主な参考文献

・那覇市教育委員会『那覇市歴史地図ー文化遺産悉皆調査報告書ー』1986年3月。
・久手堅憲夫『首里の地名ーその由来と縁起ー』南島文化叢書22 第一書房 2000年3月。
・内間靖「首里金城町フチサ古墓群発掘調査」『南島考古だより』第42号 沖縄考古学会 1990年6月20日。

以上のように、この高世層理殿が浦添城内にあったとする解釈と首里城内に存在したとする二つの解釈があったが、真栄平房敬氏の研究では、「・・・京ノ内には古くは「高よそうり殿」をはじめいくつかの殿舎がたっていたであろうが、長い歴史の中であるいは焼けた（向氏湧川家々譜に 1576 年高よそうり殿の炎上の記あり）」（註 16）と記している。また、県内の家譜を整理・研究をおこなった比嘉朝進氏は、向氏湧川家々譜関係で、向氏一世越来王子朝理（尚宣威王長男）の五世を次いだ朝首の解説で、「1576 年に天界寺（守礼門と玉陵の中間にあった）が失火し、火の手は城内の高楼に燃え移った。しかし、高所なのでだれも消しに登るものはなく、朝首ひとりが登って火を消し止めた。（中略）十一世朝略のとき湧川に改名。」（註 17）と記載されている。

第 4 表　當銘氏論文の内容を基に作成したフローチャート



その他、當銘由嗣氏による「察度」や「高ヨザウリ」説伝に関する研究論文（註 18）がある。當銘氏論文については、内容を整理して第３表のフローチャートを作成した。

當銘氏は、「察度」・「高ヨザウリ」の名称やそのもの本来有する語意などについて文献資料などを駆使し、高世層理の機能として、「高ヨザウリ」を、ヨ（世）＋ザウリ（サオリ）であると考え、ヨ（世）は稲の作柄を意味するものと解釈し、ザウリ（サオリ）は、「サの神」が降臨することを意味しているのではなかろうかと推察している。また、高ヨザウリにおいて国王による国見的儀式が行われたという認識が過去にあったのではないだろうかと推察し、その根拠として『中山世鑑』（註 12）に記載された事項を整理して、英祖王統第４代の玉城王の時代に琉球が北山・中山・南山の三山に分裂し、首里城を王城とする中山に支配する領域を那覇・泊・浦添・

北溪・中城・越来・読谷山・具志川・勝連・首里三平等があり、これらの地域は、概ね首里城の北側に望むことができ、高ヨザウリが北を向くとされたのは中山王である察度が自分の支配地を遠望して国見的儀式を行ったとの事ではないかと想定している。その他、當銘氏は、高ヨザウリ説話に関して「察度（神号：大真物）」＝「物」＝「鬼」と「蛇」＝蛇神（キミマモン：君真物）＝「サ」の神＝祖先神という２つの視点から考察を加えて、中世日本人の精神世界では龍神（蛇）と鬼は観念的に密接な関係から、その大和（本土）の心的世界の影響が高ヨザウリ説話において「鬼」と「蛇」の２つを１つの説話に併存させる要因となったのではないかと考察している。

高楼「高ヨザウリ」に関する説話は、純粋に琉球の内的世界からのみ生じたものではなく、大和的（本土的）教養やその精神世界の影響を色濃く受けているものと結論付けている。高世層理の位置については、『琉球国由来記』（註 14）の記載にある「高ヨザウリ（高世層裡）は首里城の下之御庭の南側にあって、北方に向いていたという。」と記述している。

以上のような状況から家譜資料の調査などから首里城内に“高ヨザウリ”が存在していたことがほぼ確定的となっているようである。

その他に、察度の子である中山王武寧を第一尚氏王統二代の尚巴志が 1406（永樂４）年に攻め滅ぼした城は、浦添城ではなく首里城であったことが上記した高世層理殿の内容などからも推測されるところである。

また、第一尚氏王統の尚巴志が首里城に居住してたであろう察度王統の中山王武寧を滅ぼした事については、『おもろそうし』（註 19）第四巻 あおりやゑさすかさのおもろ御双紙「あぢおそいしょょしられが節（一連番号 206)」、第六巻 しょり大君せんきみ君がなしもゝとふみあがり きみのつんじのおもろ御双紙「あぢそいしょょせりが節（一連番号 292)」、第二十巻 くめすおもろ御さうし「あぢおそいしよよしれが節（一連番号 1375)」の三巻に謡の節回しの題目は異なるものの同じ内容の謡が重複した形で謡が存在することからも首里城内に察度王統による御嶽の創建が在ったことを謡ったものとして考えられる。具体例として次ぎに挙げる謡を記す。

第二十巻　あぢおそいしよよしれが節（一連番号 1375）

「一　首里大君ぎや　末　選びやり　降れわちへ　君ぎゃせぢ　もちよる成ちへ　みおやせ　又　鳴響も国守りぎゃ　真末　選びやり　降れわちへ　又　首里杜　ちょわる　英祖にや末按司襲い　又　真玉杜　ちょわるてだが末按司襲い　又　見物内の真庭に　国揚がりは　煽らちへ　又　かわるめの御内に　君撓い　煽らちへ　又　聞声大君ちよ　ゑりちよ　遣り交わちへ」

（大意：鳴り轟く首里の大君、国守り神女が、神の末裔選びをして降り給いて、首里杜、真玉杜にまします英祖様の末裔、太陽神の末裔の国王様は、城内の見物内の真庭、かわれめの御内に、国揚がり、君撓いを煽らして、国を守ろう。神女の持つ霊力をきらめき輝かせて国王様に奉れ。）

ところで、首里城の城主となった尚巴志は、三山統一前の宣徳２（1427）年に城下の北西隣の安国山に池を掘り“龍潭”の完成と、その記念碑である“安国山樹樺木記碑”を建立している。その２年後の宣徳４（1429）年には南山王の他魯毎を滅して三山統一を成しとげたようである。

昭和 60（1985）年～昭和 61（1986）年の首里城正殿跡の発掘調査（註 20）で、正殿の創建は 14 世紀前半～中葉もしくは 14 世紀代に第Ⅰ期の正殿の創建がなされていたのではないかとの見解を提示し、少なくとも 15 世紀初頭～前半には察度を滅ぼした第一尚氏の尚巴志によって首里城内郭（当時は外郭）と“龍潭”が整備されたようである。

このことは、戦前の昭和 11（1936）年 12 月 29 日～昭和 12（1937）年１月 11 日までの期間に伊東忠太・鎌倉芳太郎の両氏によって正殿前（北殿西側）１ヶ所、京の内北西側下（露頭した大岩斜面地に包含層か）２ヶ所、西ノアザナ東南側下１ヶ所の合計４ヶ所で発掘調査を実施している。伊東・鎌倉両氏の結論として「此の三地點の出土品は略一致して、首里城第一次擴張時代と推察される永樂 16 年（西紀 1416 年）～宣徳２年（西紀 1427 年）の頃の埋蔵であろうと想定される。」（註 21）と記している。この三地点とは正殿前・京の内北西側下（東）、西ノアザナ東西側下である。また、次のようにも記している「此の第一次擴張の際には、瑞泉門から京の内西面の城門に至る線以西を、埋め立てたのではなかろうか・・・中略・・・北面の低地に對しては、石垣を築いて其の中に盛土し、更に其の石垣を地盤の鞏固な瑞泉門で支えてゐる。・・・中略・・・それ故に埋立地北部の城壁は、一方に

於いて降雨の際の水壓の防備を考へ、一方に於いては雨水を瑞泉門に集中するように工作してあるらしい」。この見解は今日の発掘調査の成果からも卓越された見解であることが確認されている。

第二尚氏の初期に尚真王により中央集権の体制が築かれ強固な琉球王国の基礎ができあがり、首里城外郭である歓会門や久慶門の両門（1447年～1526年）が普請され、その頃に外郭の整備がなされたようであるが、外郭の着工時期や完成時期についてはよくわかっていないようである。

尚真の後を次いだ尚清王は、尚真によって確立した王国の基礎を継承し、発展させる。1546（尚清25）年には首里城石垣の補強工事と1553年の那覇港の防備拠点であった屋良座森城の築造などが行われ、倭寇の侵入による対策が取られたようである。

尚真・尚清の両王統の頃に城の整備と城下の整備などが積極的に推進されたものとして考えられているようである。

明治12（1879）年の廃藩置県により首里城の500余年にわたる歴史も最終の琉球王国となった尚泰王によって明治政府に首里城を明け渡して王城を去る。首里城の明け渡しと同時に熊本鎮台沖縄分遣隊の首里城入城があり、明治29（1897）年の撤退するまでの17年間が分遣隊が配備された（第10図）。その後は沖縄県師範学校や首里第一尋常高等小学校（第12図）などの文教施設として利用され、昭和19（1944）年には首里城地下に第32軍指令部壕が造られ、昭和20（1945）年4月には首里城は灰盡に帰してしまった。このように首里城は幾多の歴史的な変更を経て今日に至っている。

註文献

註1．那覇市文化財調査報告書 第5集『那覇市の遺跡－詳細分布調査報告書－』那覇市教育委員会　1982年3月。
註2．「遺跡分布地図情報システム作成事業」『市町村別遺跡情報一覧（暫定）』沖縄県立埋蔵文化財センター　2004年3月。
註3．那覇市文化財調査報告書 第59集『銘苅古墓群（Ⅳ）－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告XⅢ－天久公園整備事業に伴う緊急発掘調査Ⅳ－』那覇市教育委員会 2004年3月。
註4．1997年5月27日に那覇市教育委員会文化課の島 弘主査に遺跡数を確認した際に教示を戴いた。実数については遺跡を大系的に整理した上でしか判断はできないとのことであった。
註5．那覇市文化財調査報告書 第49集『識名原遺跡－識名上間線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市教育委員会　2001年3月。
註6．那覇市文化財調査報告書 第34集『識名シーマ御嶽遺跡－真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市教育委員会　1997年3月。
註7．那覇市文化財調査報告書 第67集『崎山御嶽遺跡－首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』那覇市教育委員会　2005年3月。
註8．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第19集『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター　2004年3月。
註9．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月。
註10．安里嗣淳・盛本　勲「天山陵跡調査の概略」『紀要』第1号　沖縄県教育委員会文化課　1984年。
註11．弁蓮社袋中 著・訳注 原田禹雄『琉球神道記（1608年編集）』榕樹書林　2001年7月。
註12．沖縄県教育委員会『重新校正中山世鑑』巻二「洪武二十九年（中略）不思議ナケン高ヨサウリトテ数十丈ノ楼ヲ作り遊観ヲシ給ケルカ或時此楼ニ上リ戯言ニ常ニ此楼上ニ居給程ナラハ毒蛇ノ恐モ無物ヲトソ宣ケル」。昭和57（1982）年10月。
註13．嘉手納宗徳『第二巻 蔡鐸本中山世譜（上）（1697年～1701年編集）』訳注松涛書屋史料叢書全三十巻 沖縄史料館松涛書屋発行 昭和58（1983）年5月。
註14．伊波普猷・東恩納寛淳・横山　重『琉球國由来記（1713年編集）』風土記社　昭和63（1988）年2月。
註15．島尻勝太郎・嘉手納宗徳・渡口真清・名嘉順一・糸数兼治・外間守善『球陽（1743年～1876年編集）』読み下し編　沖縄文化史料集成5　球陽研究会編　角川書店　昭和57（1982）年5月。
註16．真栄平 房敬『首里城物語』ひるぎ社 1991年。
註17．比嘉朝進『沖縄のサムレー』風土社 1990年。
註18．當銘由嗣「高ヨザウリ説話に関する一考察」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第25号 読谷村立歴史民俗資料館 2001年。
註19．校注者 外間守善『おもろさうし』（上・下）全2冊　株式会社 岩波書店 2006年11月6日第3刷発行。
註20．當眞嗣一・上原　静「首里城正殿跡の調査」『紀要』第4号　沖縄県教育委員会文化課　1987年。
註21　a．伊東忠太・鎌倉芳太郎「B　琉球 Riukiu 発掘」『南海古陶瓷』　宝雲社　1937年。
　　b．鎌倉芳太郎『セレベス　沖縄発掘古陶瓷』国書刊行会　1971年。

参考および引用文献

・沖縄県教育委員会　『首里城跡』　歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査　1988年。
・沖縄タイムス社　『沖縄大百科事典』　1983年。
・首里城公園基本計画調査委員会　『首里城公園基本計画報告書』事務局沖縄県土木建築部　1984年9月。
・首里城復元期成会・那覇出版社編集部　『写真集　首里城』　那覇出版社　1987年。
・金城亀信「首里城「京の内」跡の発掘調査概要」重要文化財指定記念 特別企画展『首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－』沖縄県 立埋蔵文化財センター　2001年3月。
・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』県立埋蔵文化財センター 2009年3月。
・金城亀信宛：那覇市教育委員会 當銘由嗣より“高楼「高ヨザウリ」に関する私見”　2010年10月。

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査地域

京の内地域については、第Ⅰ章第２節でも概略を記したように首里城内でも最も神聖な聖域であった。また、京の内は、首里城発祥の“古グスク”として創建されたとする見解（註１）もある。ここでは京の内の性格について述べることにする。

最初に「京の内」の語義については『おもろさうし』（註２）で「きやのうち」・「けおのうち」・「けよのうち」と表現され、「けお」は「せぢ」の同義語で“霊力”の意味を持つ「きおのうち」は「せぢ“霊力”のある場所“聖域”」（首里城内の聖域）として考えられているようである（註３）。

民俗学の研究によると「きよう」の意味として、知念村の斎場御嶽内にある三庫理に入る右手側の大岩の頂上を“キヨウノハナ”（ギョウノハナ）と称し、大岩直下の香炉から岩の上の“キヨウノハナ”を拝み、香炉の側にあったクバの神木を足掛かりにしてアマミキヨが天降りされたといわれている（註４）。また、仲松弥秀氏は「神の来臨のことであるが、（中略）その前方に微小島が存在する場合は、神は一たんその小島に上陸滞在される。（中略）このような浜前の岩島や小島を、沖縄では「トングヮ」と称しているが、「京」（きょう）と称している村もある。」（註５）と記している。「京」（きょう）という表現に関する民俗事例として名護市嘉陽の集落前面の東方海上にある神が来訪する聖なる小島を“きょう”と称しているとのことである（註６）。

以上のようなことから「京の内」の「きょう」は神が降臨もしくは来訪する場所の意味合いと「うち」は“聖域”・“区域”などの意味もあることから「京の内」は神が降臨もしくは来訪する聖域として位置づけて整理ができるようである。その他に首里城の立地する丘陵一帯が、「京の内」と称されていたともいわれている（註１・７）。

首里城「京の内」については、『首里城古図』（註８）や『首里城略図』（註９）などの古絵図（古地図を含む）や『おもろさうし』・『琉球國由来記』（註 10）などの文献がある。これらの資料や古絵図などから「京の内」地域には、『首里城古絵図』（第 13 図の図 B）に描かれた御嶽と建物２棟の他に四・五条の区画石積みが確認される。

古絵図の描かれた時代差によっては、第 13 図の図 A ⑤の『弐百年前首里城鳥瞰図』にあるように御嶽とみられるものが８基程度描かれている時期もあったようであるが、基本的には５基（第 13 図の図 B）の『首里城古絵図』にみえる四つの御嶽で構成されていたものとして解釈がなされるところであるが真珠森御嶽は、洞穴（開口部）であるため、描かれていないようである。真珠森御嶽を含めた五つの御嶽で基本的に構成されている。

「京の内」の五つの御嶽（第７・８図・第 15 図）として、“京の内之三御嶽”（第７図 56 ～ 58）｛同図 56 ＝神名：きょうのうちのあかるいの御いべ。同図 57 ＝神名：きょうのうちのしきやちしきやたけ御いべ。同図 58 ＝神名：きょうのうちのそのいたしきの御いべ。の三神）と称される三つの御嶽と第７図 55 の首里森御嶽（神名：玉ノミヤノ御いべ）・同図 51 の真珠森御嶽（神名：真玉城の玉のみやの御いべ）の二つの御嶽である。京の内の御嶽構成は５基の御嶽が基本的なパターンとみられる。

この五つの御嶽の内、京の内の南側高所（標高 135 m）に城内でも最も神聖で重要な御嶽であった「首里森御嶽」があった。この首里森御嶽の西側にある拱門（アーチ門）直下の洞穴が「真珠森御嶽」（標高 132 m）である。

真珠森御嶽の北側から北西の平場空間（緩やかな傾斜地や小規模な平場を利用。標高 131 ～ 132 m）に“京の内の三御嶽”がある。“京の内之三御嶽”の神名を『琉球國由来記』（註 10）から共通する神名の存在の有無を検索したところ久志間切嘉陽村（名護市嘉陽）の濱板敷御嶽の神名が“そのいたじき御いべ”であった。“京の内之三御嶽”のひとつの御嶽と神名が一致していることが判った。京の内之三御嶽のひとつの御嶽と名護市嘉陽の濱板敷御嶽の神が仮に同一神であれば、将来において名護市嘉陽の濱板敷御嶽での祭祀を含めた研究をとおして“そのいたじき御いべ”がどのように嘉陽の濱板敷御嶽から京の内の御嶽へ来訪するのかを解明することができる鍵となるかもしれない。仮に北部の“そのいたじき御いべ”が南下して首里城へ来訪すると仮定すれば、第一・第二尚氏が伊平屋と伊是名を出自としていることから、名護市嘉陽の濱板敷御嶽と京の内之三御嶽との関係が解明されれば、琉球王国の祭祀や儀式を紐解くことのできる興味深い結論が導き出せるのではないだろうかと思慮

される。その他に京の内の前庭にあたる下之御庭には、京の内に所在する御嶽と同名の首里森御嶽（神名：きょうの内の前の御庭首里の御いべ）があり、首里森御嶽への遙拝所（第７図 50）として考えられている。

ところで、首里城は聖名を“首里森グスク”あるいは“真玉森グスク”と称されるのは、京の内に所在した首里森御嶽・真玉森御嶽の名に由来するようである（註 11）。両御嶽の中でも首里森御嶽は、沖縄の開闢神であるアマミキヨがつくられた御嶽とされる。この首里森御嶽のある平場空間の西側城壁と拱門（アーチ門）がすりつけられた箇所があり、この拱門手前の城壁近くに降臨神である天神または陽神のキミテズリ（君手摩）を迎えた場所と言われています。キミテズリの神を迎えた琉球王国の最高神女であった聞得大君を中心に高級神女三十三君と共に歴代琉球国王に“世おそうせぢ”（世を治める霊力）が高まるように“オボツ・カグラ”と“ニライ・カナイ”の神に祈願し、託宣を下した御嶽でもあったようである（註 12）。

真玉森御嶽については、『球陽』（註 13）巻二 尚徳王の項に「附 腓城由来」に次のように記載されている「遺老伝に説く。尚徳王薨じ世子幼冲にして国人皆叛く。王妃・乳母、世子を擁着して以て乱難を避け、皆真玉城に隠れる。軍兵追ひて之を弑し、遂に之れを王城巌下に葬る。」と記載されていることから、尚徳王の王妃・世子らが隠れた場所が、京の内の平成７・８年度に実施した洞穴が該当するのではないかと考えられる。この洞穴が『球陽』に記載された真玉森城、即ち真玉森御嶽（第７・８図・第 15 図）ではないかと推定される。参考までに腓城の位置は、京の内南側崖下（第７・８図・第 15 図）にある。

ところで宮城栄昌氏は「神女は沖縄社会の政治的発展に即応してカミ→ノロ→キミの順序で発生し、キミ（君）は少なくとも神女の政治的組織化が進んだ段階に現れたもので、中央集権制国家が確立した尚真王代（1477 年～ 1526 年）のころの『おもろさうし』では、ほとんどの神が君と化している。」（註 14）と記している。首里森御嶽の降臨神キミテズリ（君手摩）は、聞得大君を中心とする三十三君の君々に神が乗り降って琉球国王へ神託を伝えたパターンが完成するようである。三十三君の大部分は王室関係の女性であったようである。従って歴代の琉球国王と京の内の神事などを掌る高級神女組織とは密接な祭政一致の関係にあったことが推察される。

ところで第一尚氏王統（1406 年～ 1469 年）の最高神（神女）は佐司笠（さすかさ）であったが、第二尚氏王統（1470 年～ 1879 年）には、その地位を聞得大君に譲るが、佐司笠の地位は依然として高い神格であったようである（註 15）。15 世紀中頃まで京の内での祭祀や儀式において、その最高神は佐司笠であったことが理解されるところである。

京の内については、『中山世鑑』（註 16）にあるように察度が 1392 年（洪武 25 年）に数十丈の高楼“高ヨザウリ”（高世層理殿）を造り遊観したことが記されている。高世層理殿については、第Ⅱ章第２節で詳細に記してあるので参照されたい。高世層理殿の位置については、『琉球國由来記』（註 10）に高ヨザウリは下之御庭の南側にあって、北方に向いていたと記載されていることから京の内地域で物見のできる高台は、南側の標高 135 mにある首里森御嶽のあった一帯に高楼があったものと考えられる。平成７年度の遺構確認調査で礎石と瓦溜まりなどが検出されている（第 15 図：首里森御嶽から西側の城壁が途切れる城壁内側部分）。この礎石や瓦溜まりの遺構が高世層理殿の建物基礎として考えられる。この建物基礎（礎石、瓦溜まり）などが、1392 年に察度が遊観した高世層理殿の基礎なのか、或いは 1576 年の家譜資料（註３）にみえる天界寺が失火し、その火の手は城内の高楼に燃え移った際の高楼（高世層理殿）の礎石のいづれかに該当するものとして考えられるところである。

因みに久手堅憲夫氏は第７図に掲載した京の内の南西側城壁直下の崖下に“ジングンジュー・ウスメェーヌ墓”が察度王の墓陵として考えている。その根拠として久手堅氏は、首里方言で“ジングンジュー”とは、守銭奴のことをいうが、これほどの陵墓を創建できるのは、一定の権力を有する豪族をおいていないとし、万松院の先代住職松久宗宗師の先々住職からの伝聞として「ジングンジュー・ウスメェーヌ墓は、国王の墓だと伝えられている」。そして『球陽』の「察度伝説」で察度は国人から“仁君”と敬称されていたことなどから、“ジングンジュー・ウスメェーヌ墓”は本来、“ジングンシュー・ウシュメェーヌ墓”が変化したものであり、“ジンクンシュー”は“仁君主（じんくんしゅー）”、“ウスメェー”を尊貴や長上の人への敬称である“御主前（うしゅーめぇー）”として解釈している（註 17）。

前記した京の内南側崖下一帯にある“腓城（クンダグスク）”や“ジングンジュー・ウスメェーヌ墓”などの発掘調査が県立埋蔵文化財センターによって 2001（平成 13）年度に実施（註 18）されている。調査報告によると

Ⅲ地区石積み遺構１がクンダグスクと考えられ、上段石積みと下段石積みの境目から15世紀に比定される和鏡が出土したとあり、伝承にあるクンダグスクの由来である腓骨は検出できなかったとある。次にジングンジュー・ウスメェーヌ墓は、金網で囲われ調査ができなかったが、Ⅰ地区で古墓２基が確認されて、その内の古墓②は石積み外側に暗渠や細粒砂岩の蓋石が検出され、その構造から屋根や袖などを持たず、全体の印象として浦添市仲間の浦添ようどれや宜野湾市嘉数の小禄墓を彷彿させるとし、当該遺構の戦前の状況に関する聞き取り調査から墓口のなく、梯子で登って墓室を覗きみることができたとある。この内容から今帰仁村運天の百次按司墓と同様の構造を持った遺構であった可能性を示唆し、聞き取り調査などの所見から当該墓を「ジングンジュー・ウスメェーヌ墓」に相当するのではないかと結論付けているが、位置関係などから前記した京の内南西側崖下に未調査である「ジングンジュー・ウスメェーヌ墓」が位置することなどから今後の調査によって判断がなされるものと思慮されるところである。

さて、京の内の区画石積みや御嶽の位置が変更された時期として考えられたのが、1453（尚金福４）年に起きた王位継承をめぐる志魯・布里の乱の直後と1470（尚円元）年の第二尚氏王統のはじめ頃の1576年に失火した高楼（高世層理殿）の取り壊しなどによって「京の内」の区画石積みや御嶽の再建と位置の変更がなされたのかもしれないところである。ところで、1453年に起きた志魯・布里の乱について、高瀬恭子氏の研究（註19）で、1450～1451年に朝鮮人漂流民万年と丁録がみた王城で暮らしや1456年２月に久米島漂着の梁成と高石寿が四年余りを王城で暮らし、1461年５月末に朝鮮に帰国している事などから正殿の炎上はなかったとしている。

京の内の性格を概略的に述べたが、平成６年度の調査地区は、京の内の総面積約5,000㎡の内の北側部分約2,000㎡を対象とした。当該地域を京の内の北側に位置することから発掘調査地域を「京の内北地区」として仮称した（第９図上段・第14図）。平成７（1995）年度の発掘調査地域は、京の内の南側に位置することから「京の内南地区」、平成８年度の調査地域を京の内の西側に位置することから「京の内西地区」と仮称している。

註文献

註１．首里城研究グループ『首里城入門－その建築と歴史－』ひるぎ社　1991年。
註２．外間守善・西郷信綱「おもろさうし」『日本思想大系』18　岩波書店　1972年。
註３．註１・２に同じ。
註４．仲松弥秀「新垣孫一翁よりの聞き書き」『知念城跡・斎場御嶽及び周辺整備基本構想・基本計画』1993年。
註５．仲松弥秀（三、来訪神の経路）「南島の海神祭」『古層の村』沖縄民俗文化論　タイムス選書４　沖縄タイムス社　1977年。
註６．平成９年に沖縄県教育庁文化課民俗文化財指導主事の桃原茂夫氏より教示を戴いた。
註７．真栄平房敬『首里城物語』ひるぎ社　1991年。
註８．加藤三吾『琉球の研究』文一路社　1906年。
註９．鎌倉芳太郎『セレベス　沖縄発掘古陶瓷』国書刊行会　1975年。
註10.「琉球国由来記」『琉球史料叢書』　第２巻　東京美術　1972年。
註11- a．伊波普猷「三、きみよし考－守護神の成長に関する試論－」『伊波普猷選集』下巻　沖縄タイムス社　1962年。
b．平敷令治「首里森グスク」『沖縄大百科事典』中巻　沖縄タイムス社　1983年。
c．平敷令治「真玉森グスク」『沖縄大百科事典』下巻　沖縄タイムス社　1983年。
註12．平敷令治「きみてづりのももかほうごと」『沖縄大百科事典』　上巻　沖縄タイムス社　1983年。
註13．島尻勝太郎・嘉手納宗徳・渡口真清・名嘉順一・糸数兼治・外間守善『球陽』読み下し編　沖縄文化史料集成５　球陽研究会編　角川書店　1982年。
註14．宮城栄昌「三十三君」『沖縄大百科事典』上巻　沖縄タイムス社　1983年。
註15．宮城栄昌「佐司笠」『沖縄大百科事典』中巻　沖縄タイムス社　1983年。
註16．沖縄県教育委員会『重新校正 中山世鑑』1982年。
註17．久手堅憲夫『首里の地名－その由来と縁起－』南島文化叢書22 第一書房 2000年10月12日。
註18．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』県立埋蔵文化財センター2004年３月。
註19．高瀬恭子ほか『アジアの海の古琉球－東南アジア・朝鮮・中国－』琉球弧叢書⑳ 有限会社 榕樹書林 2009年７月30日。

参考文献

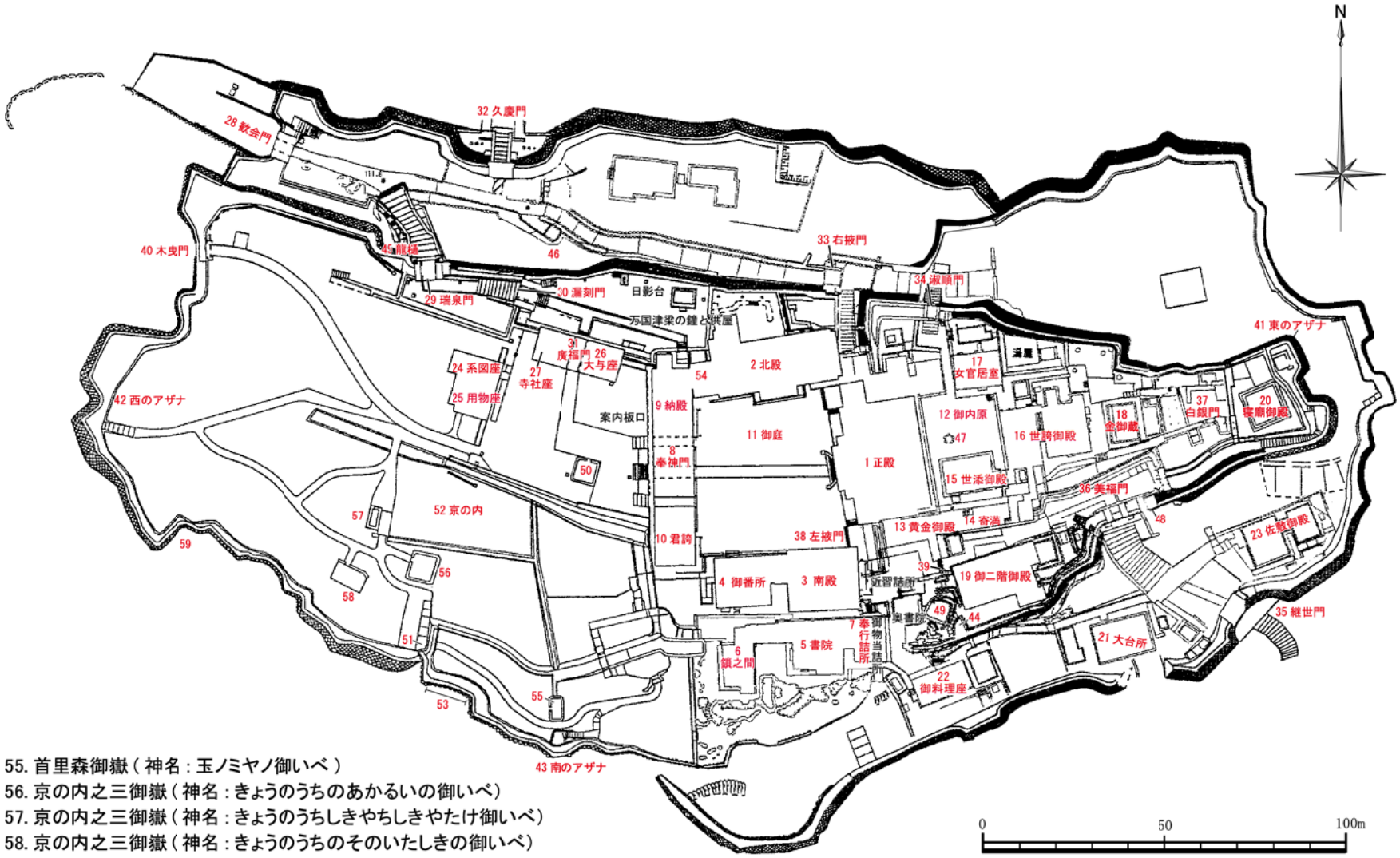
・仲松弥秀　『神と村－沖縄の村落－』　伝統と現代社 1968年。
・沖縄県教育委員会『首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告－』1995年。
・社団法人 日本公園緑地会「平成11年度 首里城京の内地区調査検討会（第１回）説明資料」1998（平成11）年12月10日

首里城と城内の地名

1．正殿：唐玻豊（百浦添）
2．北殿：ニシヌウドゥン（西之御殿）
3．南殿：フェーヌウドゥン（南御殿・南風之御殿・南風御殿）
4．御番所
5．書院（国王の政務を聴取決裁などの場所客殿、対面所の義がある。意味がある）
6．鎖之間
7．奉行詰所
8．奉神御門（君誇御門）
9．納殿
10．君誇
11．御庭
12．御内原
13．金御殿（黄金御殿）
14．寄満
15．世添御殿
16．世誇御殿
17．女官居室
18．金御蔵（銭御蔵を御用酒御蔵と曰ふ）1733年
19．御二階御殿（御住居所御殿）
20．寝廟御殿
21．大台所（百次）
22．御料理座（御振舞座）
23．佐敷御殿
24．系図座
25．用物座
26．大与座
27．寺社座
28．歓会門（アマヒ御門）
29．瑞泉門（御龍樋）第一尚氏代の首里城正門か
30．漏刻門 "かごゐせ御門"
31．廣福門（長御門）
32．久慶門（"ほこり御門"）または、樋川御門（フィジャー（ヒカワ）御門）
33．右掖門
34．淑順門
35．継世門
36．美福門（第一尚氏尚巴志の頃の正門）
37．白銀門（しらかねうぢやう）
38．左掖門
39．かわるめの御門
40．木曳門
41．高アザナ（東のアザナ、高あざな）
42．島添アザナ（西のアザナ）
43．南のアザナ（京の内の南側高所）
44．二階御殿アザナ
45．瑞泉（龍樋）
46．寒水川井戸
47．御地原の井戸
48．赤田ウヂョウノ御嶽
49．御内原ノミモノ内ノ御嶽
50．首里森御嶽への遥拝所。神名：京ノ内ノ前ノ御ミヤ首里ノ御イベ
51．真玉城ノ御嶽（神名:真玉城の玉のみやの御いべ）
52．京の内
53．腓城（第一尚氏最後の王「中和」(16歳)、王弟「於思」(13歳)、次弟「截渓」(10歳)のいづれかの墓）
54．僊誇
55．首里森御嶽（神名：玉ノミヤノ御いべ）
56．京の内之三御嶽（神名：きょうのうちのあかるいの御いべ）
57．京の内之三御嶽（神名：きょうのうちしきやちしきやたけ御いべ）
58．京の内之三御嶽（神名：きょうのうちのそのいたしきの御いべ）
59．ジングンジュー・ウスメューヌ墓（仁君主御主前墓：察度王墓か）

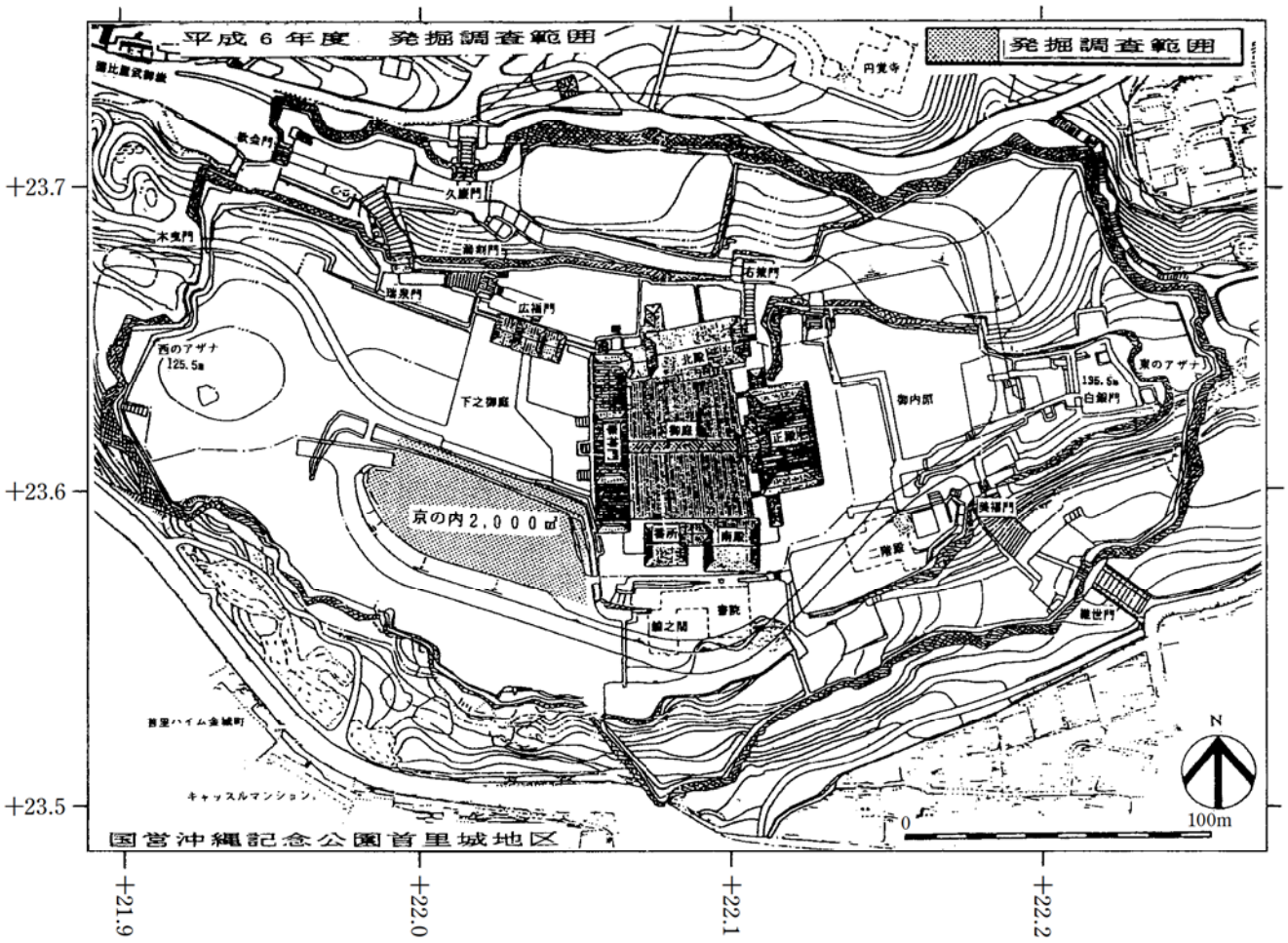
＊首里城と城内の地名については、久手堅憲夫氏の『首里の地名－その由来と縁起』（南島文化叢書22. 第一書房 2000年10月12日発行）を基本にして、作成した。
＊京の内之三御嶽の位置や神名は、社団法人日本公園緑地協会作成の『平成11年度首里城京の内区画調査検討会（第1回）説明資料』（平成11年12月10日）を参考にした。
＊高瀬恭子（5. 第一尚氏最後の工「中和」）『アジアの海の古琉球－東南アジア・朝鮮・中国－』琉球弧叢書20 榕樹書林 2009年7月

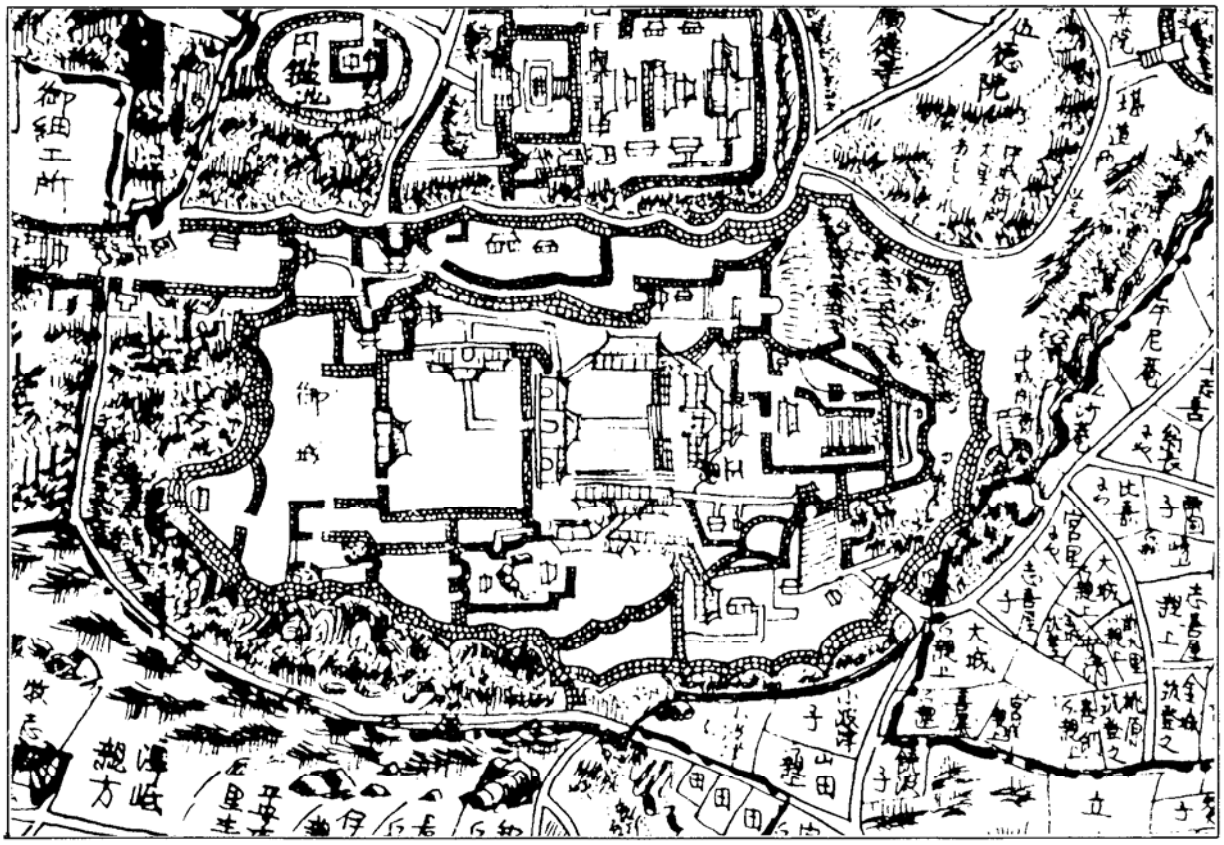
第7図　首里城と城内の地名　平成16年度　沖縄県教育庁文化課作成の測量図（加工処理後）を基本にして田村泰氏の『琉球建築』（1972年）、内閣府沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』（平成13年3月）などを参考にして作成した。



55. 首里森御嶽（神名：玉ノミヤノ御いべ）
56. 京の内之三御嶽（神名：きょうのうちのあかるいの御いべ）
57. 京の内之三御嶽（神名：きょうのうちしきやちしきやたけ御いべ）
58. 京の内之三御嶽（神名：きょうのうちのそのいたしきの御いべ）
59. ジングンジュー・ウスメェーヌ墓（仁君主御主前墓：察度王墓か）

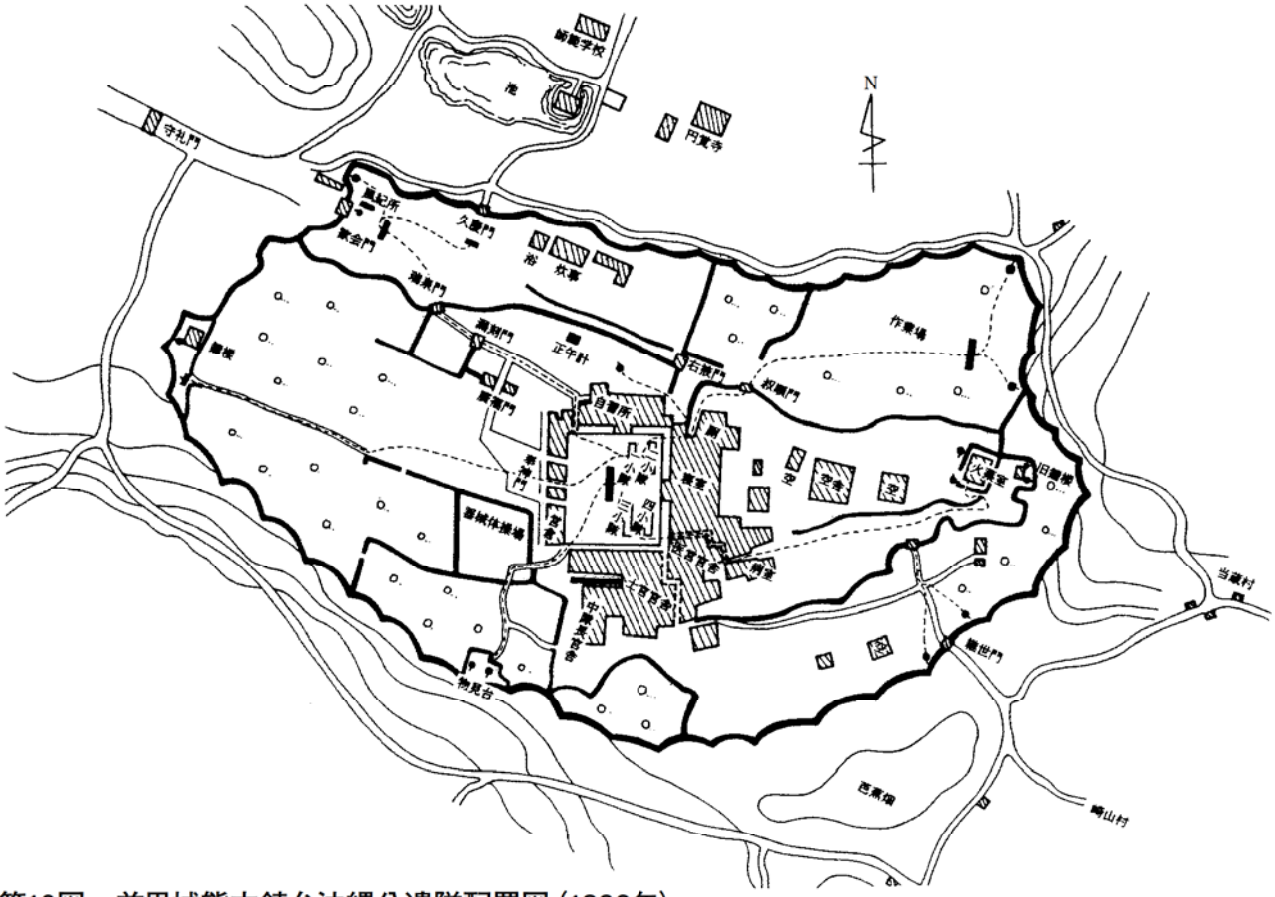
第8図　首里城と城内の地名　平成 16 年度　沖縄県教育庁文化課作成の測量図（加工処理後）を基本にして田村泰氏の『琉球建築』（1972 年）、内閣府沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』（平成 13 年 3 月）などを参考にして作成した。



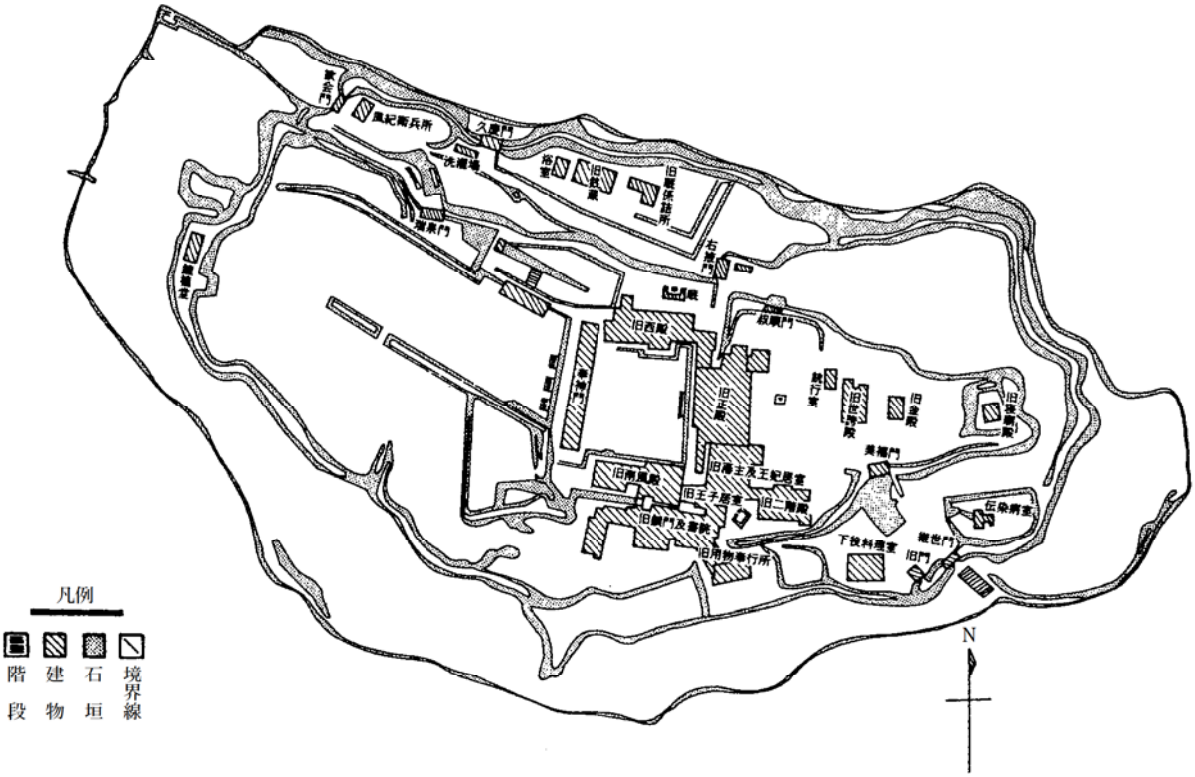


第9図　発掘調査地域（上段）と『首里古地図』（1700年）（下段）

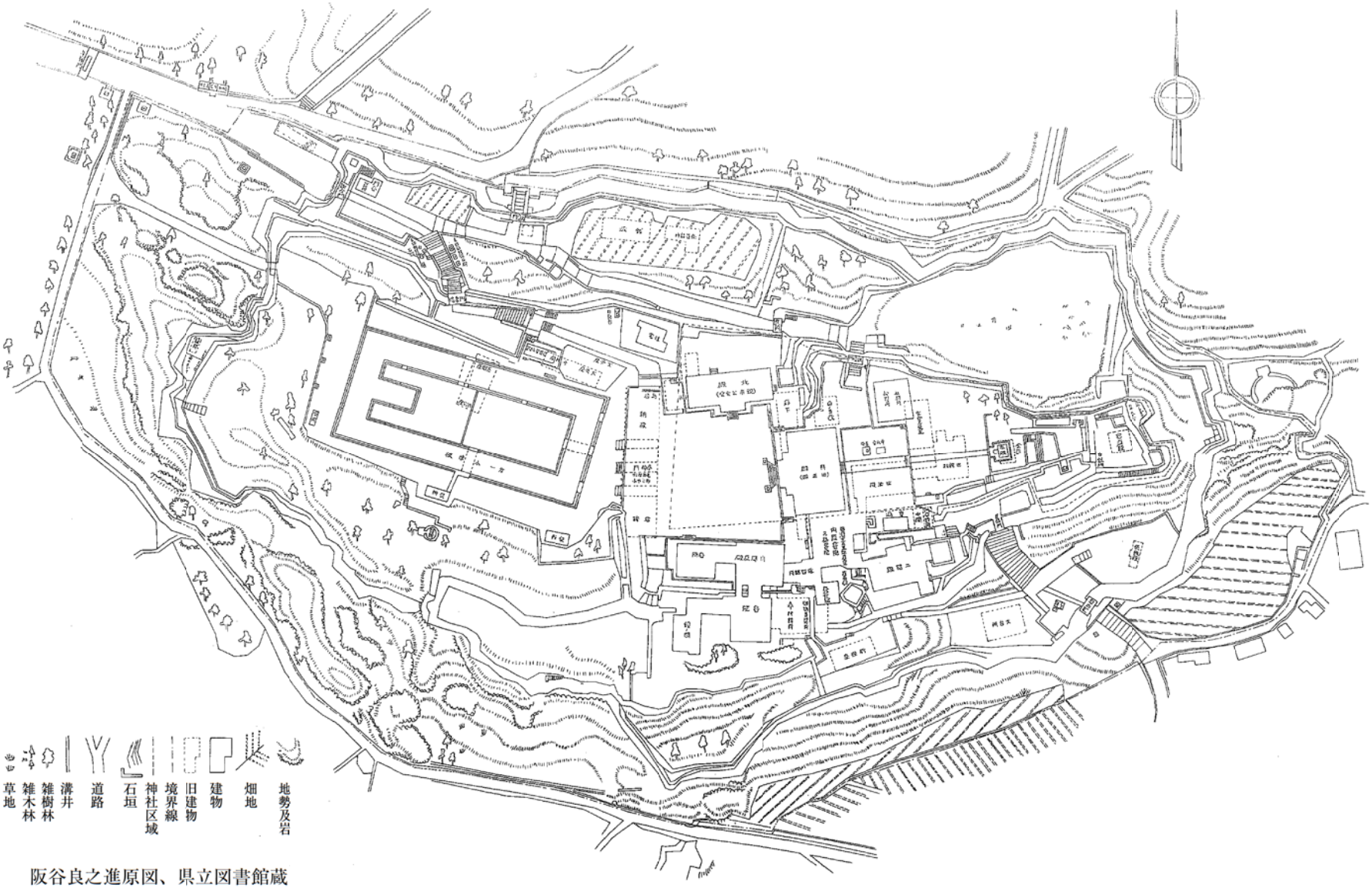
「琉球国絵図資料集第三集付録」1994年より複写：原図は沖縄県立図書館所蔵



第10図　首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（1893年）
『首里城跡』（1995年より複写）原図は沖縄県史編集室蔵（方位のみを加筆）



第11図　首里城平面図（島袋良徳氏所蔵）『首里城跡』（1995年より複写）

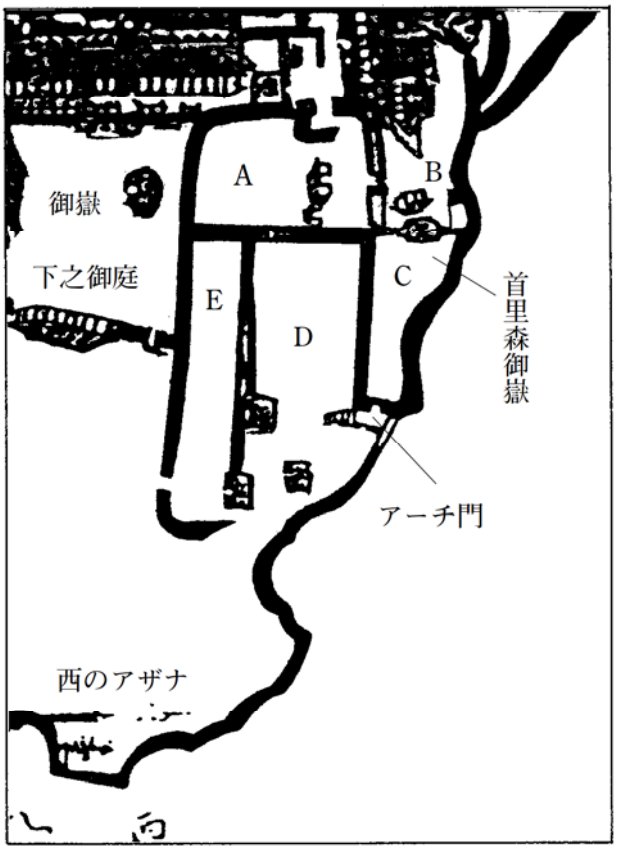


阪谷良之進原図、県立図書館蔵

第 12 図　首里城平面図（昭和 6 年頃）

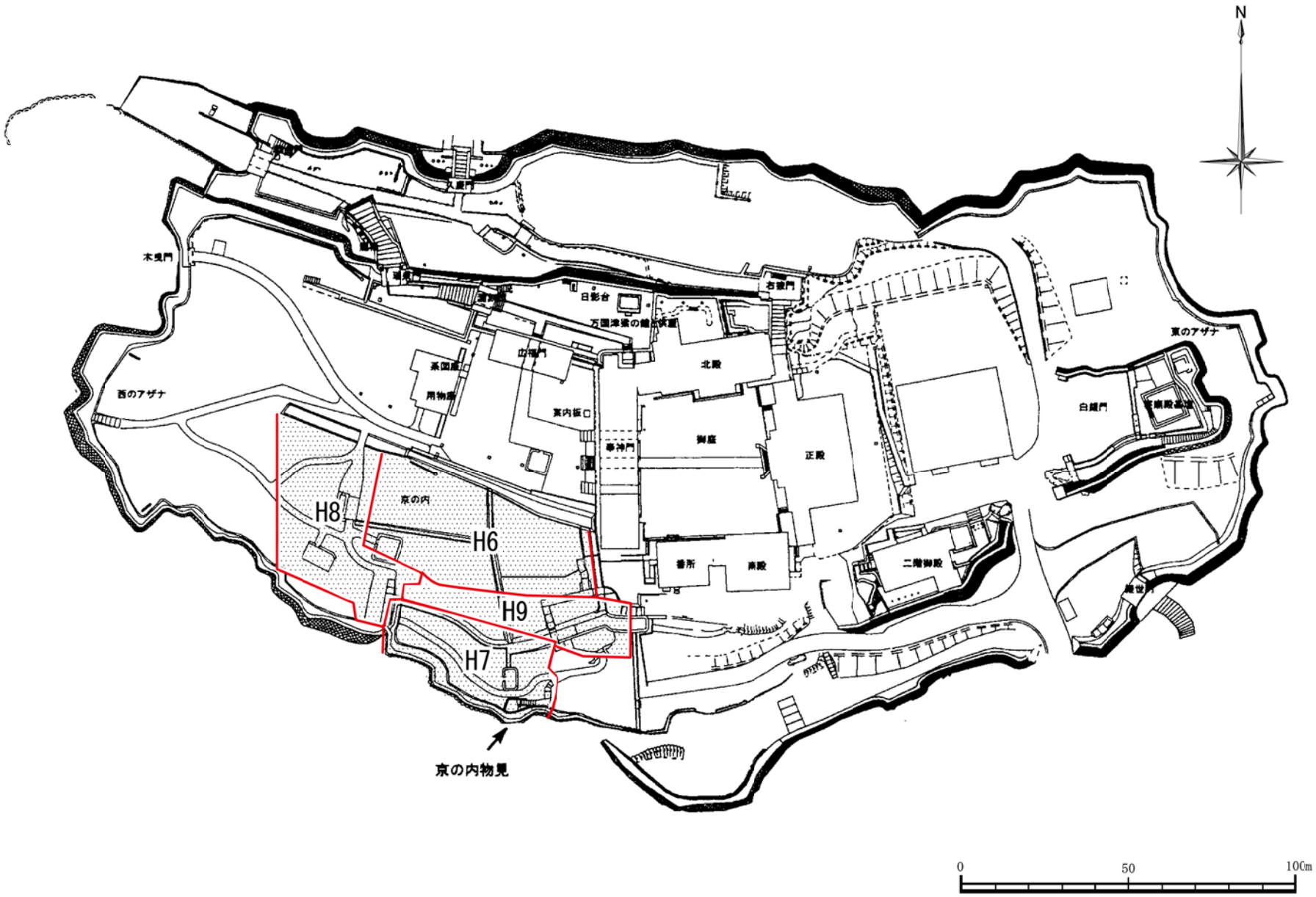
図A　首里城京の内空間の変遷

①『首里城古絵図』(1703年～1707年か)
②『首里古地図』(1700年、1854年)
③『琉球建築』(1937年)
④『首里城熊本鎮台分遣隊配置図』(1893年)
⑤『貳百年前首里城鳥瞰図』

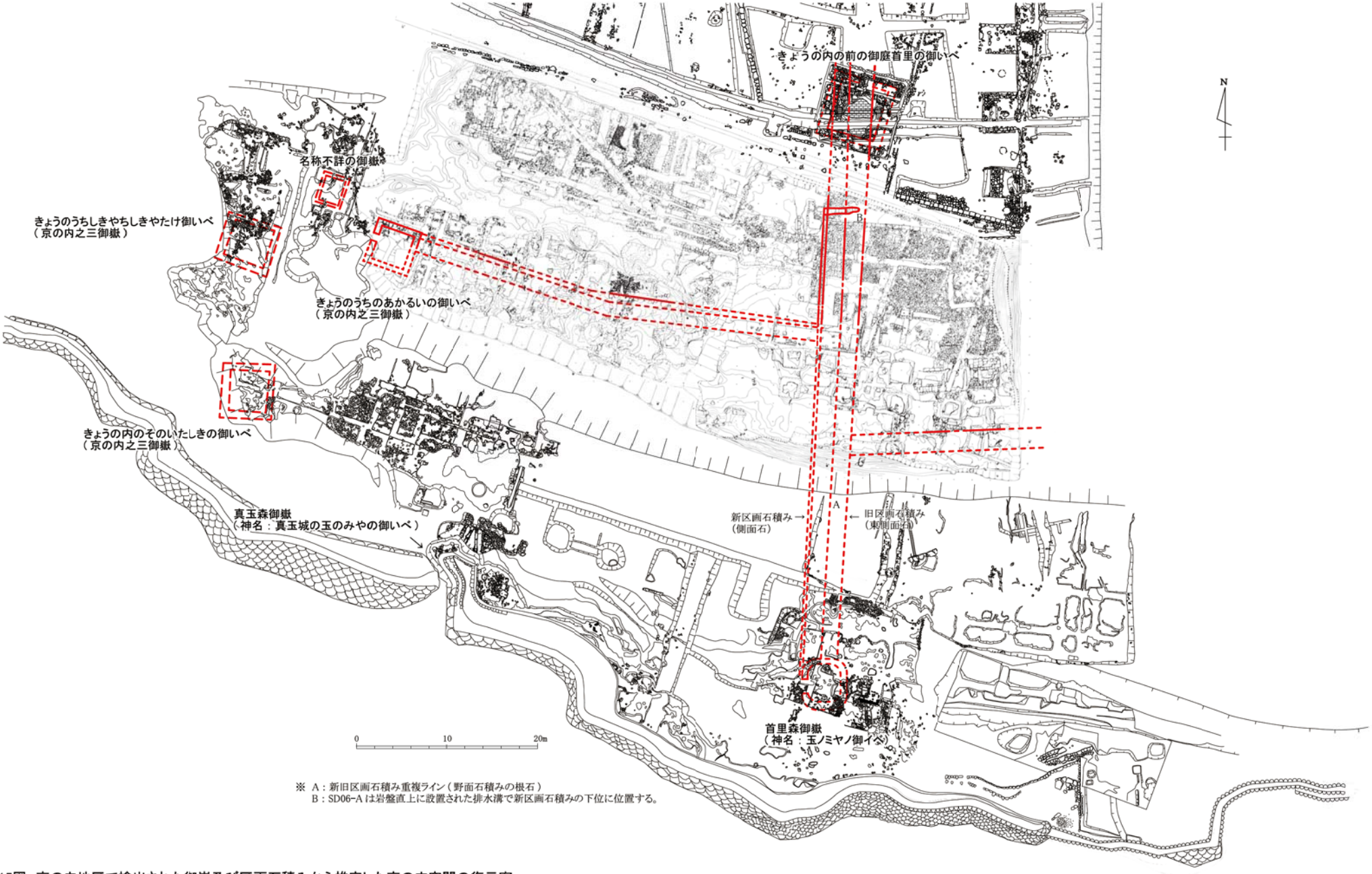


図B『首里城古絵図』
(1703～1707年か) に修正・加筆

第13図　首里城京の内の空間変遷　特別企画展『首里城京の内展ー貿易陶磁からみた大貿易時代ー』沖縄県立埋蔵文化財センター　2001年3月より転載



第14図　首里城跡京の内地区　年度別発掘調査箇所



※ A：新旧区画石積み重複ライン（野面石積みの根石）
B：SD06-Aは岩盤直上に設置された排水溝で新区画石積みの下位に位置する。

第15図　京の内地区で検出された御嶽及び区画石積みから推定した京の内空間の復元案
（御嶽の名称は、社団法人 日本公園緑地協会作成の平成11年度　首里城京の内地区調査検討会（第1回）説明資料 平成11年12月10日を参考に修正した）

第２節　調査区の設定

平成６年度の京の内跡の発掘調査地区は、第Ⅰ章第４節でも記したように京の内北地区2,000㎡が発掘調査の対象となった。首里城地下には昭和20（1945）年のアジア・太平洋戦争末期に起きた沖縄戦の際に第32軍司令部壕が昭和19（1944）年に構築されたことにより米軍の集中砲火を受けている事から事前に調査区内に不発弾等の有無確認を目的とした磁気探査を実施した。磁気異常のあった61箇所については調査員立ち合い（グスク時代～近世期の金属製品が反応する）で異常箇所の掘削を行った。

磁気探査の磁気異常箇所の有無を確認後に本格的な発掘調査を平成６（1994）年11月21日から開始して、平成７（1995）年の３月28日までの約５ヶ月間実施した。

発掘調査で検出された遺構のプランを基に京の内の復元整備の計画がなされるため遺構保護を目的として、調査地区内全域に保護砂の白砂を厚さ10cm～15cmを敷きならした後に廃土で埋め戻した。

埋め戻しによって遺構の位置関係が直接的に把握できなくなるので、調査地区及びその周辺に基準点測量の三点（基－１、基－２、基－３）を測量業務に委託した。基準点の成果は下記のとおりである。

	X = 23622.856		X = 23594.909		X = 23606.382
基－１	Y = 21998.541	基－２	Y = 21985.276	基－３	Y = 22047.613
	H = 125.009 m		H = 126.486 m		H = 125.054 m

グリッドの設定（第16図）は、１グリッドの規模が10ｍ×10ｍを単位とした。基準となった杭は、下之御庭の南側にあった東西に延びるコンクリート製側溝の南側縁より50㎝の地点に基準杭Ａ－11を設定した。以下、側溝と平行させながら東西方向に10ｍ間隔でＡ－12からＡ－17の杭を設定した。南北方向には基準杭Ａ－11からＡ－17を視準し、これを軸線としてＡ－17からＷ90°0′00″Ｓに振って10ｍ間隔でＢ－11・Ｃ－11・Ｄ－11の杭を設置し、グリット番号は東から西へ10・11・12･･･と数字を冠した。グリッドの番号はアルファベットを採用し、北から南へＡ・Ｂ・Ｃ･･･とした。グリッド名は記号と番号を組み合わせてＡ－10・Ｂ－10･･･と標記した。なお、グリッド名はグリット内の東南隅の杭に冠して、将来の調査に使用できるように設定した。

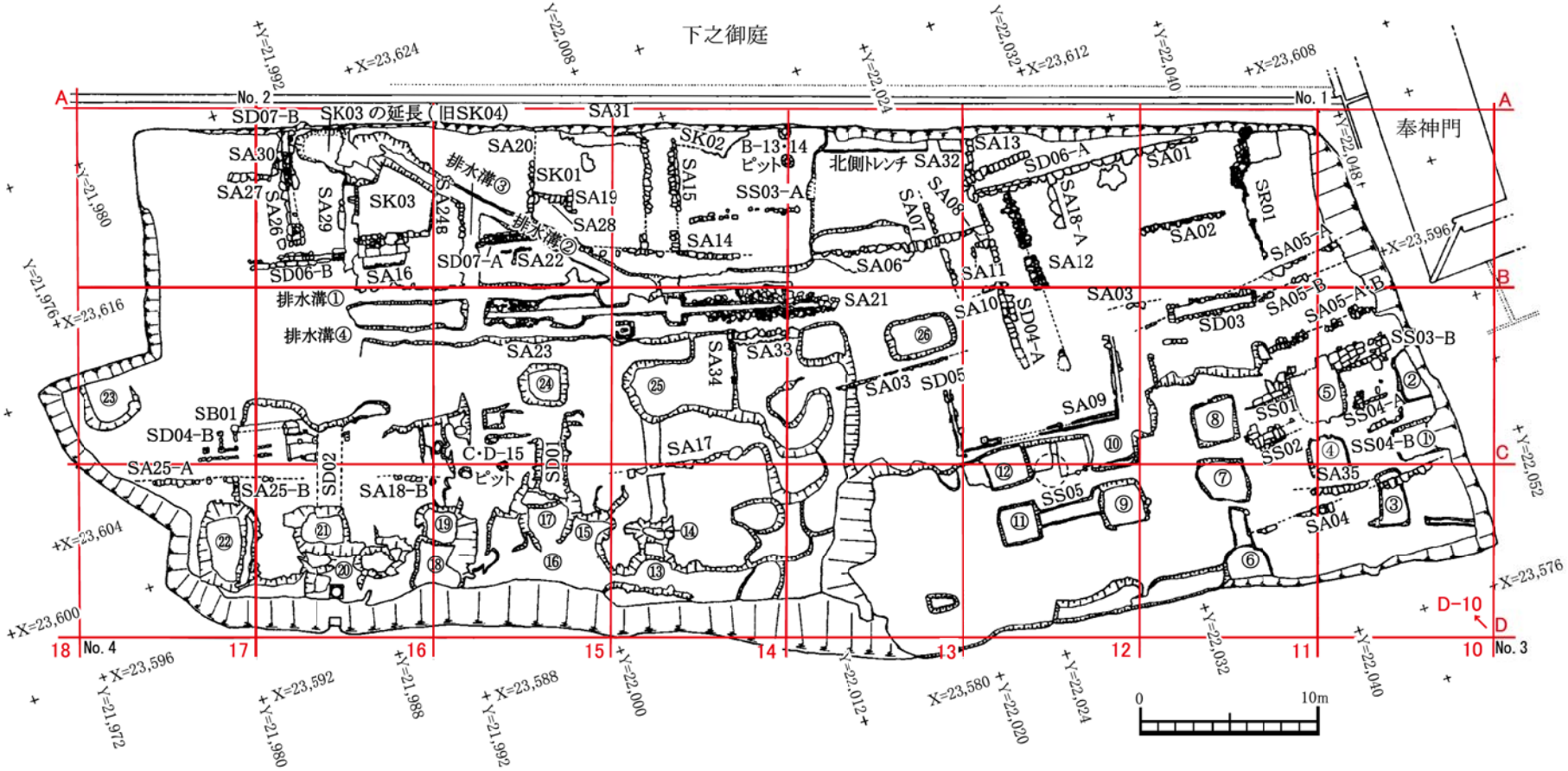
基準杭Ａ－11とＡ－17を結ぶ軸線（南北基準座標軸Ｎ°19′00″Ｗに偏る座標軸）からＷ180°0′00″Ｅへ振って、Ａ－11から東側へ170cmの箇所にある奉神門基檀と丁度かち合うように基準杭Ａ－11を設定した。

調査地区のＡ－11（北東）、Ａ－17（北西）、Ｄ－10（南東）、Ｄ－18（南西）の４点のＸ座標とＹ座標については、写真測量図の読み取りから下記の結果が得られた（第16図）。

Ａ－11（Ｘ＝23604.474　Ｙ＝22047.078）　Ａ－17（Ｘ＝23623.565　Ｙ＝21990.239）

Ｄ－10（Ｘ＝23572.885　Ｙ＝22047.018）　Ｄ－18（Ｘ＝23598.267　Ｙ＝21971.191）

その他、Ａ－11から東側にある奉神門基壇とかち合う接点（170cm）から奉神門南側階段がとり付けられた基壇（階段南側縁と基壇との接点）までの直線距離は６ｍと判読した。



平成6年（1994）度の京の内跡から検出された遺構については下記のとおりに記号化した。

石積み（SA）……SA01～SA15-A・B、SA16～SA18-A・B、SA19～SA25-A・B、SA26～SA35(38基)
石敷き・塼敷き（SS）……SS01～SS03-A・B、SS04-A・B、SS05(7基)
土壙（SK）……SK01～SK03、SK03の延長（旧SK04）（4基）
溝（SD）……SD01～SD04-A・B、SD05、SD06-A・B、SD07-A・B(10基)
建物（SB）……SB01(1基)
石列（SR）……SR01(1基)
※検出遺構の合計……(61基)
※記号は必ずしも遺構そのものの性格を示したものではない。将来において遺構番号等の追加がある。
※遺構の配置は写真測量図より縁石ライン等をトレースしたものである。
※琉球大学の建設基礎跡は、検出順に①～㉖迄を冠した。

No.1 A-11 X=23,604.474 Y=22,047.078
No.2 A-17 X=23,623.565 Y=21,990.239
No.3 D-10 X=23,572.885 Y=22,047.018
No.3 D-18 X=23,598.267 Y=21,971.191

第16図 「京の内」跡遺構配置図およびグリッド設定

第Ⅳ章　遺　構

第１節　遺構の概要

Ａ．遺構の種類と概略

平成６年度の首里城京の内跡発掘調査で検出された遺構には石積み（階段を含む）、石敷き（塼敷きを含む）、土壙、溝、建物、石列などがある。検出された遺構のほとんどは真北に対し、やや西に振れるものと西よりに振れるものが存在した（第16図・第17図）。

各種の遺構は発掘直前に推定された遺構の種類や性格によって記号化し、検出された順に番号を冠した。

具体的には、建物と付属する溝、石敷き、石積みの外面や内面にも個別に記号と番号を付した。また、個別の遺構として取り扱っていたものが完掘後に一連の遺構となり、種類や性格も明らかとなった遺構もある。これについては古い記号と番号を尊重しながら新しい記号と番号を付して、新旧の番号と記号を併用した。基本的に同一遺構であっても調査時点に冠した記号や番号の改正などは実施しなかった。これは記号や番号の改正などによって図面整理や資料整理（ナンバーリングの変更など）で時間を費やし、資料整理の進捗に支障を来すことが予想されたからであった。遺構の記号は以下のとおりであるが必ずしも遺構の種類と性格を示すものではないことを付する。なお、今回の報告で新たに遺構が３基確認されたことは、大きな成果であった。

遺構の種類は石積み（ＳＡ）、石敷き・塼敷き（ＳＳ）、土壙（ＳＫ）、溝（ＳＤ）、建物（ＳＢ）、石列（ＳＲ）の６種類である。以下、遺構別に性格などを略記する。

石積み（ＳＡ）

石積みの大部分はその上部を欠くため上部の構造は判っていない。石積みは外面と内面を並行に南北方向や東西方向に配置する区画石積みが主であった。古絵図にみられた区画石積みに空けられた通用門は戦後の造成（岩盤の削平と掘り下げ）で破壊され確認されていない。他に基壇状の建物の縁石や倉庫の壁石などのように外面のみが検出されたものもある。これは石積みの位置変更や幾度となる造成による嵩上げ等による内面の破壊や石積みの際に直接岩盤上に積み上げた事に起因するようである。その他に完掘の結果、階段や階段の脇石積みとして判明した石積みもある。石積みも大半が根石のみが存在する状況にあった。根石は粗加工の切り石や野面石に粗い加工を加えたものを用いて造成土盤（遺物包含層を二次的に使用）や削平した岩盤上に直接的に配置し、その上から切り石を積み上げているものが主であった。石積みの外面と内面において、外面は切り石で、内面が野面積みを用いたものがある。内面に野面積みを用いた理由として、内面側の土盤の仕上げ高が高い位置にあったため、野面石を基礎石として積み上げ途中から設定された土盤近くから切石に変更がなされたからであろう。この方法を用いた例は二例のみ確認されている。他にも例外的ではあるが野面積みを積み上げ途中から裏込目石の代りに礫混りの土砂を投入する特殊な例があった。発掘調査の結果、明確な石積み（区画石積み・御嶽・倉庫・琉大の石積み）となったものと今回の整理で新たに確認された２基（ＳＡ05－Ｂの内・外面）を加えると、切石積みでは東西方向に延びる石積みが15基（ＳＡ03、ＳＡ04、ＳＡ05－Ｂの内・外面、ＳＡ06、ＳＡ08、ＳＡ10、ＳＡ14、ＳＡ17、ＳＡ18－Ｂ、ＳＡ25－Ａ、ＳＡ27、ＳＡ31、ＳＡ33、ＳＡ35）で、南北方向に延びるものは12基（ＳＡ07、ＳＡ11～ＳＡ13、ＳＡ15、ＳＡ18－Ａ、ＳＡ19、ＳＡ20、ＳＡ25－Ｂ、ＳＡ30、ＳＡ32、ＳＡ34）が確認されている。これらの切石積みの対比・相関関係については、第５表で整理した。野面積みは１基（ＳＡ24）のみで南北方向に延びていたようである。その他に建物の基壇の縁石や建物の縁石が４基（ＳＡ01、ＳＡ01背面、ＳＡ02、ＳＡ09）、階段およびその脇石積み３基（ＳＡ16、ＳＡ19、ＳＡ28）、側溝の縁石２基（ＳＡ26、ＳＡ29）、石積みの裏込目石の集石が２基（ＳＡ21、ＳＡ23）があった。以上の38基が石積み（ＳＡ）として取り扱ったものである。

なお、今回の資料整理をとおして、平成９（1997）年２月20日～３月21日迄の期間で実施された下之御庭の首里森御嶽復元整備に係る遺構確認のための発掘調査で、下之御庭の首里森御嶽下部石積みが京の内の石積み（SD04－ＡとSA18－Ａ）と繋がっていく事を改めて確認〔調査期間中に下之御庭の首里森御嶽下部石積みが京

の内を南北に横断して最高位にある首里森御嶽へ繋がっていく事を現地で確認した。下之御庭の首里森御嶽は京の内にある首里森御嶽（本体）への遙拝所であることが石積み遺構からも推定できた。〕した。

石敷き・塼敷き（ＳＳ）

石敷きは細粒砂岩製（俗称・ニービヌフニ）と琉球石灰岩製の二種類が存在し、板状に薄く仕上げたものである。主に細粒砂岩製のものが主流であった。石敷きの方向は東西方向に途切れながら検出されている。これは後代の造成で破壊されたためである。塼敷きとしたものは塼瓦が敷かれた状態で検出されたのではなく、塼敷きが破壊されたままの状態で検出されたものである。

石敷きの細粒砂岩製のものは建物の縁石と礎石を伴うものであり、建物に付属する取り付けの回廊・踊り場などの施設であったものとして推察されるところである。石灰岩製の石敷きは側溝の底板であった。

石敷きの細粒砂岩製のものは４基（ＳＳ01、ＳＳ02、ＳＳ03－Ｂ、ＳＳ04－Ａ・Ｂ）が存在し、小規模な構築物を囲む回廊様な遺構とみられ、当該遺構は切り合っている事から新旧、二時期が存在するようである。石敷きの石灰岩製のものは１基（ＳＳ03－Ａ）のみであったが、後述する首里第一尋常高等小学校の排水溝と関係し、一連のものとみられる。塼敷きは１基（ＳＳ05）のみで、戦災やその後の造成で破壊された状態で検出されている。以上の６基を石敷き・塼敷き（ＳＳ）とした。

土壙（ＳＫ）

人為的な堀り込みや自然地形の部分的な落ち込みなどを総称して土壙とした。土壙は北西側に集中する傾向が窺え、検出直後に他の遺構と同レベルで確認されたもの、掘り下げの途中から確認されたもの、完掘後に確認されたものの３種類があった。これらの土壙は３基（ＳＫ01～ＳＫ03）が確認されている。ＳＡ19、ＳＡ20、ＳＡ28は完掘後に最終段階で倉庫内部であることが判明し、ＳＫ01と名称を付けたものもある。

ＳＫ02は岩盤の窪みなどを利用し、造成土（遺物包含層を二次的に使用）で埋めたものである。造成土（ＳＫ02）直上にＳＡ15、ＳＡ31の石積みがなされている。

ＳＫ03はＳＡ24の石積みと同レベルで検出されたものであるが、ＳＡ24の西側を一帯の窪地を埋めた造成土（遺物包含層を埋土に用いる）である。SK03を発掘した結果、ＳＡ24の外面の石積みが検出された。以上の３基を土壙（ＳＫ）として処理した。その他、SK03と同時期の土砂が北西側にもある程度の広がりを持って分布していたことなどから“SK03の延長（旧名称：SK04）”として取り扱った。

溝（ＳＤ）

建物や石積みに付属する溝と最終的に便所となったものなどをＳＤと記号で表記した。建物に付属する排水溝で東西方向に延びるものは３基（ＳＤ06－Ａ・Ｂ、ＳＤ07－Ａ）が存在する。南北方向に延びるものも３基（ＳＤ04－Ａ、ＳＤ05、ＳＤ07－Ｂ）が確認された。他に岩盤を溝状に掘り込んだ琉大の建物基礎（布堀り基礎跡）２基（ＳＤ01、ＳＤ02）や近代～現代の便所跡２基（ＳＤ03、ＳＤ04－Ｂ）が存在していた。以上の10基を溝とした。

建物（ＳＢ）

首里第一尋常高等小学校の頃の便所に伴う施設（覆い屋、基礎石、縁石、踊り場など）がセットで検出されたものを建物とした。１基（ＳＢ01）のみであった。ＳＢ01の建物の中にはＳＤ04－Ｂの便所跡が伴っている。

石列（ＳＲ）

擁壁跡の裏込目石や建物の縁石が列状に検出されたものを石列とした。擁壁の裏込目石は北東隅から南北方向に弧状に曲がりながら延びていたものであり、１基（ＳＲ01）のみ確認されている。建物の縁石は石敷き遺構（ＳＳ01、ＳＳ02、ＳＳ03－Ｂ、ＳＳ04－Ａ・Ｂ）の東南隅から検出された。京の内発掘調査報告書（Ｉ）で、東西方向に延びたものが１基（ＳＲ02）と報告したが検討の結果、前述した石敷き遺構（ＳＳ01ほか３基）と関連する一連のものと判断されたことから当該遺構は１基のみとなった。

以上の58基の遺構は一連のものもあるが個別の機能を尊重したため重複するものなども含まれている。大雑把に大別すると以下のａ～ｄまでの４種類に分類と整理ができるようである。

a.　石積み（31基）

イ．切り石積み（ＳＡ03、ＳＡ04、ＳＡ05－Ｂ内・外面、ＳＡ06～ＳＡ08、ＳＡ10～ＳＡ15、ＳＡ17、ＳＡ18－Ａ・Ｂ、ＳＡ19、ＳＡ20、ＳＡ25－Ａ・Ｂ、ＳＡ27、ＳＡ30～ＳＡ35）･･･ 27基。

ロ．野面石積み（ＳＡ24）･･･ １基。

ハ．排水施設を伴う切り石積みと関連する遺構（ＳＤ04－Ａ、ＳＤ06－Ａ）･･･ ２基。

ニ．拝所の一部となる切り石積みと関連する遺構（ＳＡ25－Ａ・Ｂ）･･･ ２基。

b.　建物および付属遺構（９棟）

イ．基壇を有する建物の面石（ＳＡ01・ＳＡ01背面）･･･ １棟。

ロ．排水溝や階段に取り付けられた建物２棟。１棟目（ＳＡ09、ＳＤ05）、２棟目(ＳＡ26、ＳＤ07－Ｂ、ＳＤ06－Ｂ、ＳＡ16、ＳＡ22、ＳＤ07－Ａ、ＳＳ03－Ａ）･･･ ２棟。

ハ．便所を伴う建物遺構は３棟が存在する。１棟目（ＳＡ02、ＳＤ03)、２棟目（ＳＤ03、ＳＤ03関連施設)、３棟目（ＳＢ01、ＳＤ04－Ｂ）･･･ ３棟。

ニ.石敷き・縁石・礎石を伴う遺構（ＳＳ01、ＳＳ02、ＳＳ03－Ｂ、ＳＳ04－Ａ・Ｂ）･･･ ２棟。

ホ．倉庫遺構（取り付け階段を含む）（ＳＡ19・ＳＡ20、ＳＡ28）･･･ １棟。

c.　土壙（３基）

イ．倉庫遺構と重複するＳＫ01（ＳＡ19、ＳＡ20、ＳＡ28）･･･ １基。

ロ．土壙直上に遺構が存在するＳＫ02（ＳＡ15、ＳＡ31）･･･ １基。

ハ．石積みを埋めたＳＫ03（ＳＡ24）･･･ １基。

d.　その他（６基）

イ．塼敷き遺構（ＳＳ05）･･･ １基。

ロ．石積みの裏込目石の集石遺構（ＳＡ21、ＳＡ23）･･･ ２基。

ハ．擁壁の裏込目石の集石遺構（ＳＲ01）･･･ １基。

ニ．建物の基礎（布堀り基礎）跡。溝（ＳＤ01、ＳＤ02）･･･ ２基。

以上のように大別すると49基が遺構として整理ができる。

次に石積みで切り石積みの外面と内面を対応関係について第５表で整理した場合、上記a.イの切り石積み27基の内、倉庫跡の石積みＳＡ19･20の２基、琉大の石積みＳＡ03の１基、の合計３基を除外して今回、新たに確認されたSA05－Ｂ（内・外面）の２基を追加すると26基となるが、切り石積みの対比・相関関係について検討したところ第５表のような結果が得られた。

第５表　切り石積み（区画石積み・御嶽）の外面と内面の関係

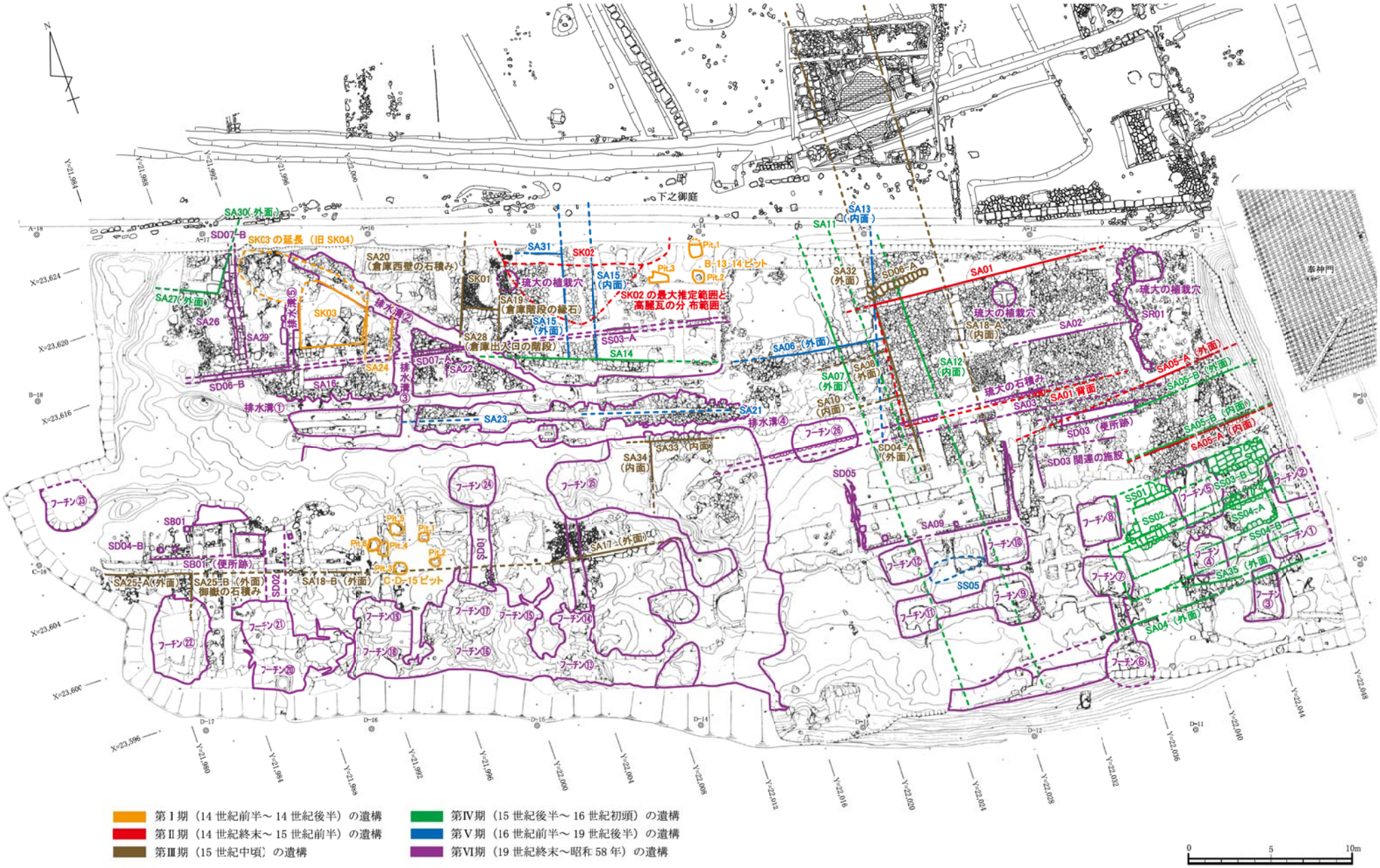
南北軸方向			東西軸方向		
No.	外　面（外側）	内　面（内側）	No.	外　面（外側）	内　面（内側）
①	SD04－ＡとSA32か	SA18－Ａ	①	SA04	未確認
②	SA07	SA12	②	SA05－Ａ（外面）	SA05－Ａ（内面）
③	既に破壊され消失	SA11	③	SA05－Ｂ（外面）	SA05－Ｂ（内面）
④	既に破壊され消失	SA13	④	SA06	SA10か
⑤	SA15（西側）	SA15（東側）	⑤	SA08	SA10か
⑥	消失	SA25－Ｂ（御嶽）	⑥	SA14	既に破壊か。SA21･23か
⑦	SA30	未確認	⑦	SA21（既に破壊か）	SA33
⑧	未検出	SA31	⑧	SA17･SA18－Ｂ･SA25－Ａ(御嶽)	既に破壊
⑨	既に破壊され消失	SA32	⑨	SA27	未確認
⑩	既に消失	SA34	⑩	SA31	未確認
			⑪	SA35	既に破壊
合　計　10基			合　計　11基		

B．各時期別の遺構

発掘調査時点で出土した陶磁器を基に各時期別に遺構を整理すると、第Ⅰ期～第Ⅵ期（第17図）までの6時期に大別されるようであるが各遺構のトレンチ内から出土した陶磁器類を主とする遺物の整理が終了しないと正式な時期を絞り込むことができないので暫定なものとして考慮されたい（第17図～第96図）。

イ．第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）……（第18図）
ロ．第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）……（第24図）
ハ．第Ⅲ期（15世紀中頃）……（第32図）
ニ．第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）……（第45図）
ホ．第Ⅴ期（16世紀前半～19世紀後半）……（第57図）
ヘ．第Ⅵ期（19世紀終末～昭和58年）……（第69図）
　a．同期前半（19世紀終末～昭和20年）……（第71図）
　b．同期後半（昭和24年～昭和58年）……（第86図）

以下、各時期別に遺構を整理するが、個々の遺構の特徴や規模などについては観察表に呈示することにする。


下之御庭
泰神門
SA30（外面）
SD07-B
SKC3 の延長（旧 SK04）
SA20
（倉庫西壁の石積み）
SA31
SK02
SK01
琉大の植栽穴
SA15
（内面）
SK02 の最大推定範囲と
高麗瓦の分 布範囲
Pit.1
Pit.3
Pit.2
B-13・14 ピット
SA13
（内面）
SA11
SA32
（外面）
SD06-A
SA01
琉大の植栽穴
SR01
SA27（外面）
SA26
SA29
排水溝⑤
SK03
排水溝②
SA19
（倉庫階段の縁石）
SA15
（外面）
SA28
（倉庫出入口の階段）
SS03-A
SA14
SA06（外面）
SA18-A
（内面）
SA02
SA24
SD07-A
SA22
SD06-B
SA16
排水溝③
排水溝①
SA23
SA21
排水溝④
SA07
（外面）
SA08
（外面）
SA12
（内面）
SA10
（内面）
琉大の石積み
SA03
SA01 背面
SA05-A（外面）
SA05-B（外面）
SA05-B（内面）
SA05-A（内面）
SD03（便所跡）
SD03 関連の施設
SD04-A
（外面）
SD05
SA34
（内面）
SA33（内面）
フーチン㉓
フーチン㉔
フーチン㉕
フーチン㉖
SB01
SD04-B
SB01（便所跡）
SA25-A（外面）
SA25-B（外面）
御厨の石積み
SD02
SA18-B（外面）
C・D-15 ピット
SD01
SA17（外面）
SA09-B
SS05
SS01
SS02
SS03-B
SS04-A
SS04-B
SA35（外面）
SA04（外面）
フーチン①
フーチン②
フーチン③
フーチン④
フーチン⑤
フーチン⑥
フーチン⑦
フーチン⑧
フーチン⑨
フーチン⑩
フーチン⑪
フーチン⑫
フーチン⑬
フーチン⑭
フーチン⑮
フーチン⑯
フーチン⑰
フーチン⑱
フーチン⑲
フーチン⑳
フーチン㉑
フーチン㉒
第Ⅰ期（14 世紀前半～ 14 世紀後半）の遺構
第Ⅱ期（14 世紀終末～ 15 世紀前半）の遺構
第Ⅲ期（15 世紀中頃）の遺構
第Ⅳ期（15 世紀後半～ 16 世紀初頭）の遺構
第Ⅴ期（16 世紀前半～ 19 世紀後半）の遺構
第Ⅵ期（19 世紀終末～昭和 58 年）の遺構
0
5
10m

第17図　遺構全体図

イ．第Ⅰ期（14 世紀前半～ 14 世紀後半）・（第 18 図）

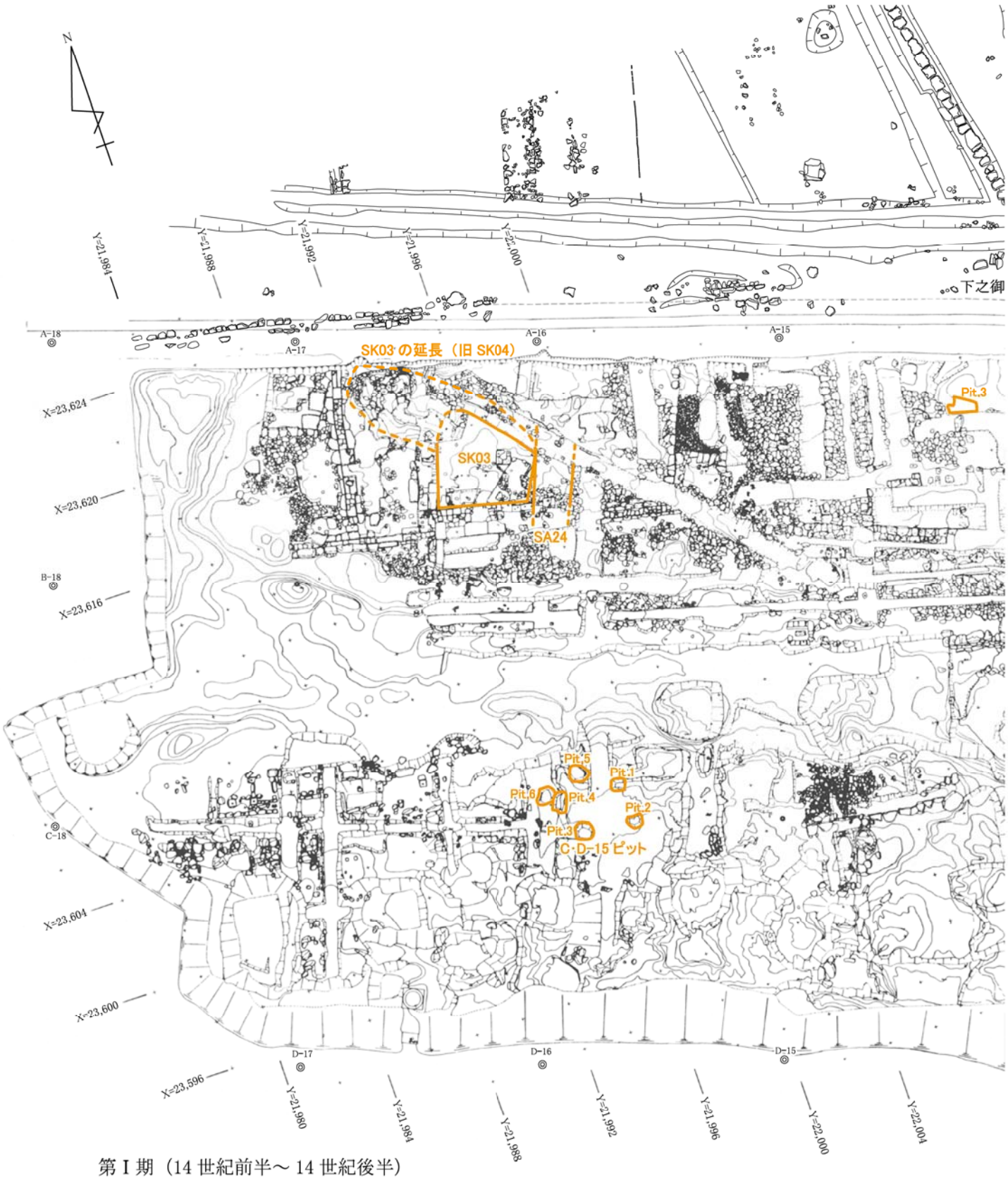
この時期の遺構としてはＳＡ 24 の野面石積み（第 19 図・第６表。図版１）と土壙ＳＫ 03（第 20 図・第７表。図版２～６）及び土壙ＳＫ 03 の延長（第 21 図・第８表。図版７～９）が存在する。他に石灰岩を人為的に掘り込んだ大型のピット様のものがＢ－ 13･14 のグリッドで３基（第 22 図・第９表。図版 10）、Ｃ・Ｄ－ 15 のグリッドで６基（第 23 図・第 10 表。図版 11・12）が確認されているがプランは把握ができなかった。ピット内からウシなどの骨（註１）が出土している状況が窺えた。ウシなどを用いた何等かの祭祀儀礼が当該期にあったのではないかと考えられる。ウシの下顎骨を意図的に配置した事例として南風原町仲間村跡Ａ地点（註２）だろうか。今後、大型（直径 30 ～ 50cm）ピット内から出土するウシの骨の出土例が増加すれば祭祀と関係する遺構として位置づけられるのではないだろうか。

註文献および参考資料

註１．C･D-15 のピット内からはウシの膝蓋骨・手根骨・中節骨・角突起などを含む 37 点が出土し、その他にブタ、ニワトリ、ウサギ、リクガメ、サメなどの骨が出土している。

※糸満市内にあるサンティン毛遺跡に点在した按司墓４基を 20 年程前に市文化課が墓内の調査を実施した際、按司墓３基の骨壷には人骨がなく代わりにブタの骨が納められていたとのことである。市内の事例では人骨が拾えない場合は動物の骨に故人の魂を籠めて骨壷に納めたとのことであった（湖城　清氏の教示による）。

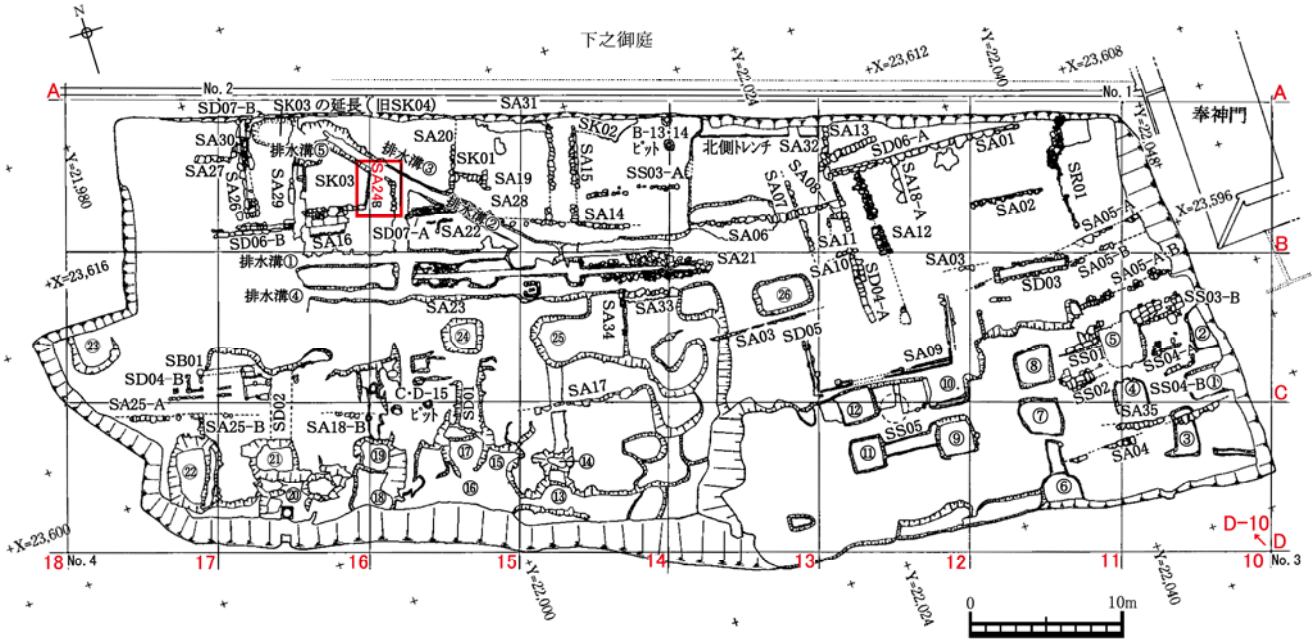
註２．上地克也ほか『津嘉山古島・仲間村跡Ａ地点・仲間村跡Ｂ地点・津嘉山クボー遺跡－那覇空港自動車道豊見城東道路・主要地方道那覇糸満線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』南風原町教育委員会 2005 年３月（当該、牛下顎配列遺構の時期は 12 世紀から 15 世紀代で全国的にも例のない“開田儀礼”と解されている。また、当該遺構の周辺には自生しないヤシ科樹木が 33 本が意図的に植栽された痕跡を確認している。）



第Ⅰ期（14 世紀前半～ 14 世紀後半）
石積みSA24（野面石積み）
土壙SK03、SK03 の延長（旧SK04）
ピット（B-13・14、C・D-15）

第18図　京の内北地区第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）遺構の推定復元

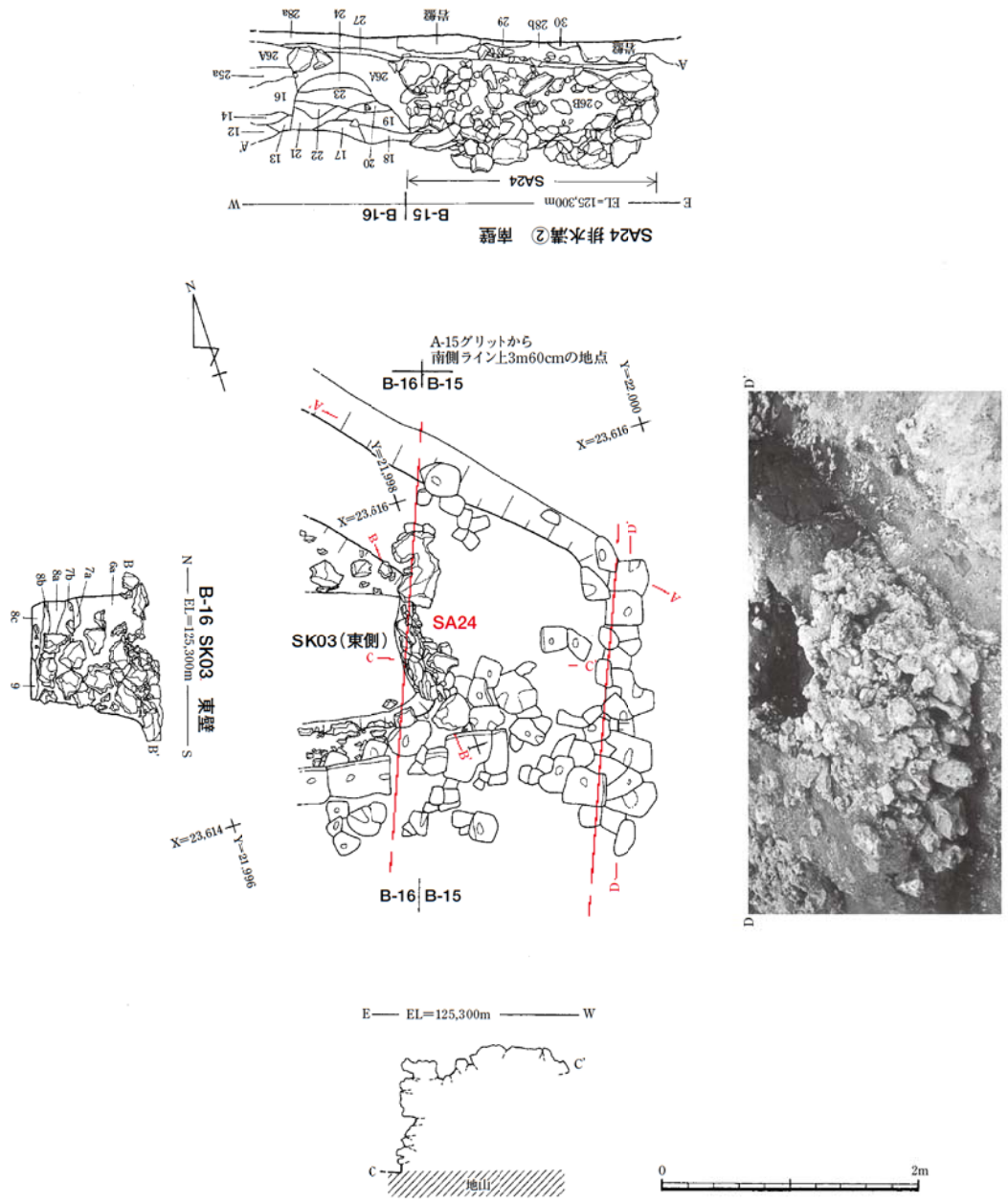
庭
A-14
A-13
A-12
A-11
Pit.1
B-13・14 ピット
Pit.2
奉神門
B-10
C-10
D-14
D-13
D-12
D-11
Y=22,008
Y=22,012
Y=22,016
Y=22,020
Y=22,024
Y=22,028
Y=22,032
Y=22,036
Y=22,040
Y=22,044
Y=22,048
0
5
10m



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第６表　第Ⅰ期　SA24　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B－15・16 SA24 第18・19図	1m83cm 2m00cm 76cm	琉球王国成立以前の野面の石積み。南北方向に短く残る。岩盤および造成土盤より石積みを積み上げているが、西壁はルーズで土砂が混入する。根石と栗石を敷いた後に両面を積み上げながら小礫混じりの土砂を30～40cmの厚さで投入し、その直上から土砂を隠すように15～40cmの厚さで栗石を詰めた特殊な工法とみられる。14C前半～後半頃。	N20°　05′　W	野面積み 85°	20～25cm 7～18cm 12～32cm	土壙SK03。根石から5番石までを含めた平均勾配は87°



第19図　B-15・16 石積み SA24　平面・断面及び層序

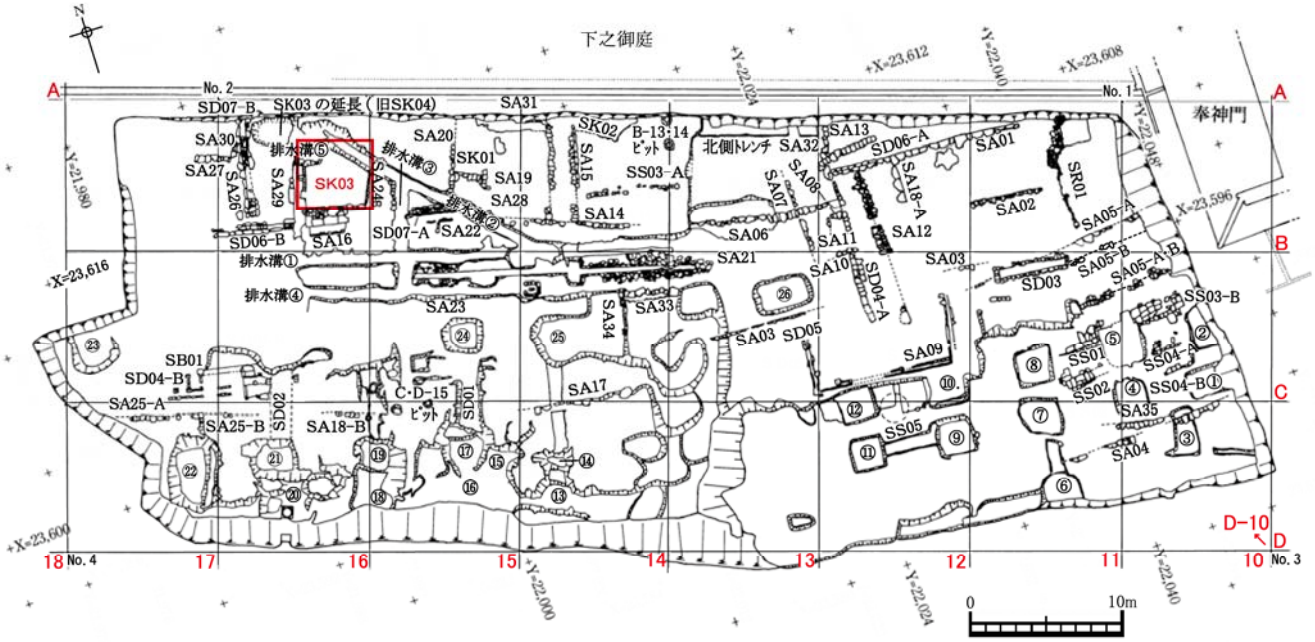
B-16 SK03（東側）の層序　東壁

第6層a…暗褐色土層。遺物包含層。
第6層b…淡褐色土層。　〃　。赤土の混入が少ない。
第6層c…黒褐色土層。　〃　。
第6層d…暗褐色土層。　〃　。
第7層a…黄灰色土層。クチャが混入する。
第7層b…灰褐色土層。遺物包含層。第7層aより土色の色合いが薄くなる。
第8層a…黄褐色混礫土層。15～20cm前後の石灰岩礫が混入する。
第8層b…灰褐色土層。第7層bよりもさらに色合いが薄くなる。
第8層c…黄褐色混礫土層。地山の黄褐色土が混入する。遺物が若干混入する。
第9層…　黄褐色土層。地山。

B-15・16 SA24 排水溝②の層序　南壁

第12層…　淡黄色土層。灰褐色土の塊は5mm～1cmが多く混入。礫・炭が僅かに混入。
第13層…　〃　。土の粒子が細かくなる。灰褐色土の塊も4～5mmと細かくなる。第12層より土色はやや濃くなる。炭が僅かに混入。
第14層…　〃　。第13層よりさらに粒子が2～3mmと細かくなる。灰褐色土も細かくなる。第13層より土色が濃くなる。炭が僅かに混入。
第16層…　淡黄色土層。第13・14層よりやや色が明るくなる。灰褐色の土の塊は5mm～1cmと、第15層と同じ程度のサイズである。炭が僅かに混入。
第17層…　明茶色土層。炭が僅かに混入。
第18層…　〃　。淡茶色の土砂が混入する。
第19層…　淡灰色土層。礫が多く、炭が僅かに混入する。
第20層…　明茶色土層。第17層より土色は薄くなる。シルト質の粘土と黒色土層が混じり、塊となって混入する。
第21層…　明黄色土層。第13・14層と第19層が混ざる。
第22層…　黒褐色土層。炭混じり。
第23層…　明茶色土層。第17層よりも土色は濃くなる。
第24層…　明黄色土層。黄褐色の土の塊や灰褐色の土の塊が混入する。
第25層a…明黄色土層。褐色の土が混入する。第16層よりやや明るい土層。礫が僅かに混入する。炭が多く混入。
第25層b…石灰岩礫層。石と石の間に第9層の土砂が入り込んでいる。
第26層A…明黄色土層。褐色や灰褐色の土砂が混入する。焼けた小石が混入する。
第26層B…赤褐色混土礫層
第27層…　灰褐色混礫土層。炭が僅かに混入。
第28層a…明茶色混土礫層。遺物を包含する層である。
第28層b…淡褐色混礫土層
第29層…　黄褐色混土礫層
第30層…　黄褐色土層。地山。

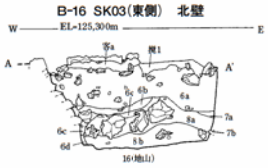
図版１　上：B－15･16 SA24（写真手前）検出前の状況　西側を望む（東より）
　　下：　同上　　SA24（写真手前）検出直後の状況　西側を望む（東より）

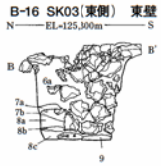


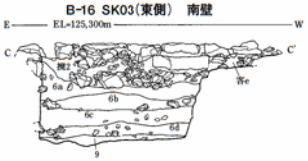
「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

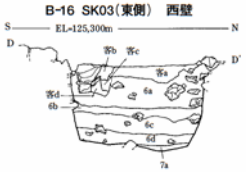
第７表　第Ⅰ期　SK03　遺構観察表

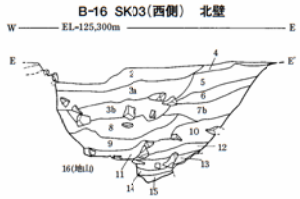
地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B－16 SK03 第18・20図	5m32cm 4m45cm 深さ 1m16cm	琉球王国成立以前の土壙でSA24の機能停止直後に造成で埋められた窪地。平面観が歪な台形状となる。土壙内の包含層は上・下層とも時間差が無いため短期間でSA24を埋めたものとみられる。14C前半～後半頃。	南北軸は SA24の N20°05′W 東西軸は SD07の N77°00′W	― ―	規模 幅277～445cm。 深さ76～116cm。 長さ40～532cm。	石積みSA24の西側前面部の窪地（当時は平地か）を埋めた二次堆積土（造成土）。土壙SK03内から鎬蓮弁文碗・白磁ビロースクタイプ碗Ⅱ・天目茶碗などが出土。

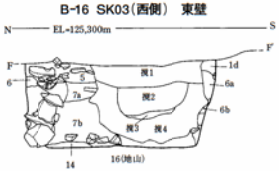


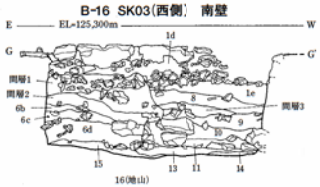


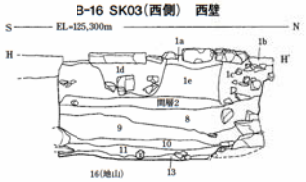


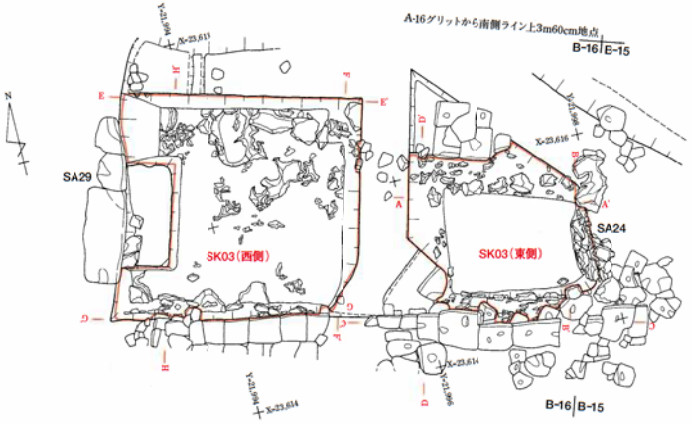












第20図 B-16 土壙SK03 平面と層序

B-16 SK03(東側)の層序

客土層a… 淡灰色土層。昭和6年頃の首里第一小学校校舎の基礎、若しくは琉球大学の外壇の基礎土盤。「客a」で表記。シルト質泥岩の風化土壌。(俗称:クチャ。以下「クチャ」も併記)。
客土層b… 黄褐色土層(地山)。「客b」で表記。
客土層c… 灰褐色土層。シルト質泥岩の風化土に若干、地山の黄褐色土が混入。「客c」で表記。
客土層d… 淡灰色砂層。シルト質泥岩の風化土に砂が混入。「客d」で表記。
客土層e… 暗茶色混土礫層。(昭和6年頃の首里第一小学校校舎造成土)。「客e」で表記。
撹乱層1… 淡灰色土層。シルト質泥岩の風化土に赤土が混入。「撹1」で表記。
撹乱層2… 黒褐色混土礫層。「撹2」で表記。
第6層a… 暗褐色土層。遺物包含層。
第6層b… 淡褐色土層。 〃 。赤土の混入が少ない。
第6層c… 黒褐色土層。 〃 。
第6層d… 暗褐色土層。 〃 。
第7層a… 黄灰色土層。クチャが混入する。
第7層b… 灰褐色土層。第7層aより土色の色合いが薄くなる。遺物包含層。
第8層a… 黄褐色混礫土層。15～20cm前後の石灰岩が混入する。
第8層b… 灰褐色土層。第7層bよりもさらに色合いが薄くなる。
第8層c… 黄褐色混礫土層。地山の黄褐色土が混入する。遺物が若干混入する。
第9層… 黄褐色土層。地山。

B-16 SK03(西側) 東壁

撹乱1… 客土。淡灰色土層(シルト質泥岩の風化土。俗称クチャ)。「撹1」で表記。
撹乱2… 客土。黄灰色土層(〃 。 〃)。「撹2」で表記。
撹乱3… 客土。灰褐色土層(炭が混入。シルト質泥岩の風化土。俗称クチャ)。「撹3」で表記。
撹乱4… 客土。濃灰色土層(シルト質泥岩の風化土。俗称クチャ)。「撹4」で表記。

琉球大学時代の撹乱(1950～1982年)

B-16 SK03(西側) 南壁・東壁・西壁

第1層a… 灰黄色土層(昭和6年頃の首里第一小学校校舎造成土。以下「造成土」)。
第1層b… 淡黄色土層(第3層a・第3層b)が混ざった撹乱層。造成土。
第1層c… 暗褐色混礫土層(第4層)がブロック状に混ざった撹乱層。造成土。
第1層d… 暗茶色混土礫層(造成土)。
第1層e… 暗褐色土層
開層1… 灰黒色土層(細かい赤土ブロックが微量混入)。
開層2… 黒褐色土層。SK03(西側)の西壁と類似の層。
開層3… 黄灰色土層(赤土の粗いブロックが多量に混入。暗褐色土が混入)。

B-16 SK03(西側) 北壁・東壁・南壁・西壁

第1層… 南壁と西壁を参照。
第2層… 灰黒色土層。3～5mm程度の赤土の塊と炭が僅かに混入。3cm前後の琉球石灰岩。小礫が少量混入。
第3層a… 黄黒色土層。5cm前後の赤土とシルト質泥岩の風化土(俗称:クチャ)の塊が少量混入。
第3層b… 黒褐色土層。第3層aよりも土色に黒味を増す。5mm前後の赤土の塊が僅かに混入するが、8～13cm程度の琉球石灰岩礫が混入する。石灰岩以外に細片化した細粒砂岩や炭が混入する。
第4層… 黄褐色土層。表層近くにある為、表層の灰褐色土層と混ざる。0.2～10cm大の赤土のブロックが混入。他に炭が少量混入する。
第5層… 灰褐色土層。炭が多量に混入する。他に5mm～10mm大の赤土が少量混入する。
第6層… 黒褐色土層。第3層bと土色が近似する。第5層よりも土色が濃い色合となる。5～10mm大の赤土が僅かに混入。
第7層a… 暗褐色混礫土層。東壁にのみ部分的に堆積した開層。
第7層b… 暗褐色土層。5～10mm大の赤土が多くなり、炭も多く含まれる。
第8層… 淡灰黒色土層。3cm前後の石灰岩の小礫や二枚貝(マルスダレガイ科アラスジケマンガイ)、炭などが混入する。部分的に北壁では10～50mm大の赤土の塊が入っている。
第9層… 灰黒色土層。第2層と同系色の色合で、5mm前後の赤土の塊とクチャの塊が僅かに混入。
第10層… 灰褐色土層。人頭大の石灰岩礫が部分的に混入する。
第11層… 淡灰色土層。3～10mm程度の赤土の塊が多量に混入し、炭が多く含まれている。その他に10cm前後の石灰岩礫が混入する。
第12層… 暗褐色土層。地山(第15層)が混ざっている。
第13層… 黄褐色土層。粘性の強い土質。2mm前後の赤土の塊が混入し、炭も含まれる。
第14層… 灰褐色土層。5～8cm大の赤土の塊が混入する。土質は第13層よりもさらに粒質が高まる。
第15層… 灰黄色土層。(地山の赤褐色土と俗称クチャが混入)。
第16層… 赤褐色土層。地山。

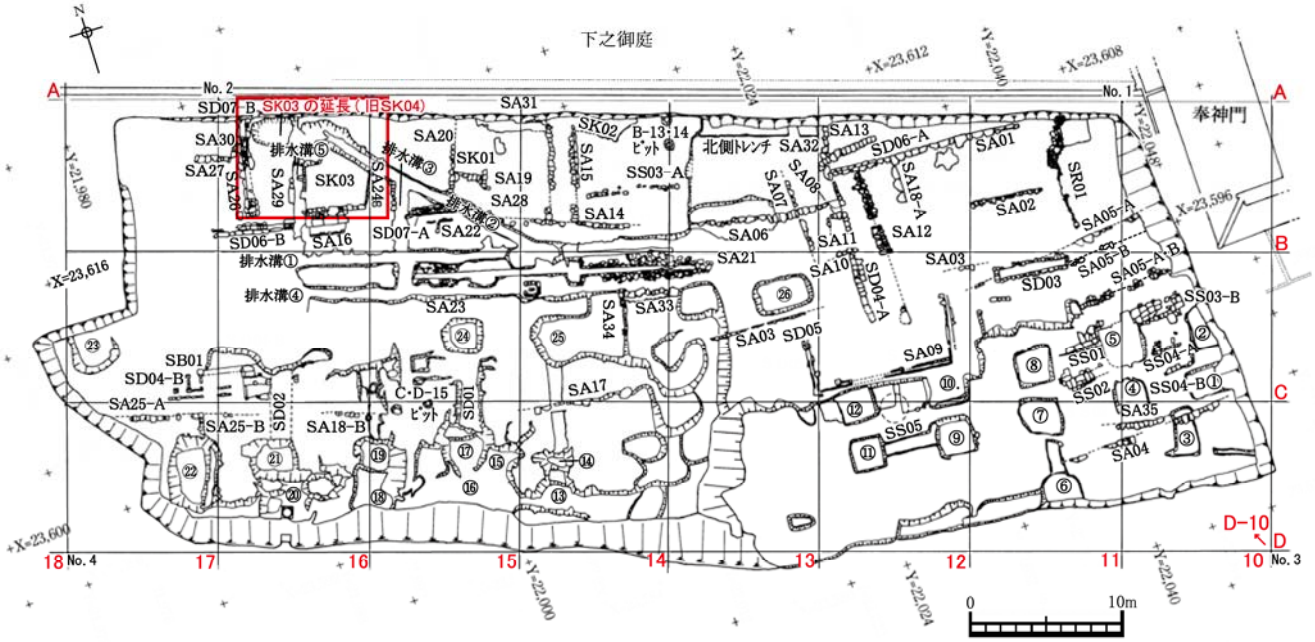
図版 2　上：B－16 SK03　西より東側を望む
　　下：同上　SK03　北より南側を望む

図版 3　上：B－16 SK03　東より西側を望む
　　下：同上　SK03　南より北側を望む

図版 4　上：B－16 SK03（東側）試掘壙　南壁（北より）
　　下：同上　SK03（東側）試掘壙　西壁（東より）

図版５　上：B－16 SK03（東側）試掘壙　北壁（南より）
　　下：同上　SK03（西側）試掘壙　南壁（北より）

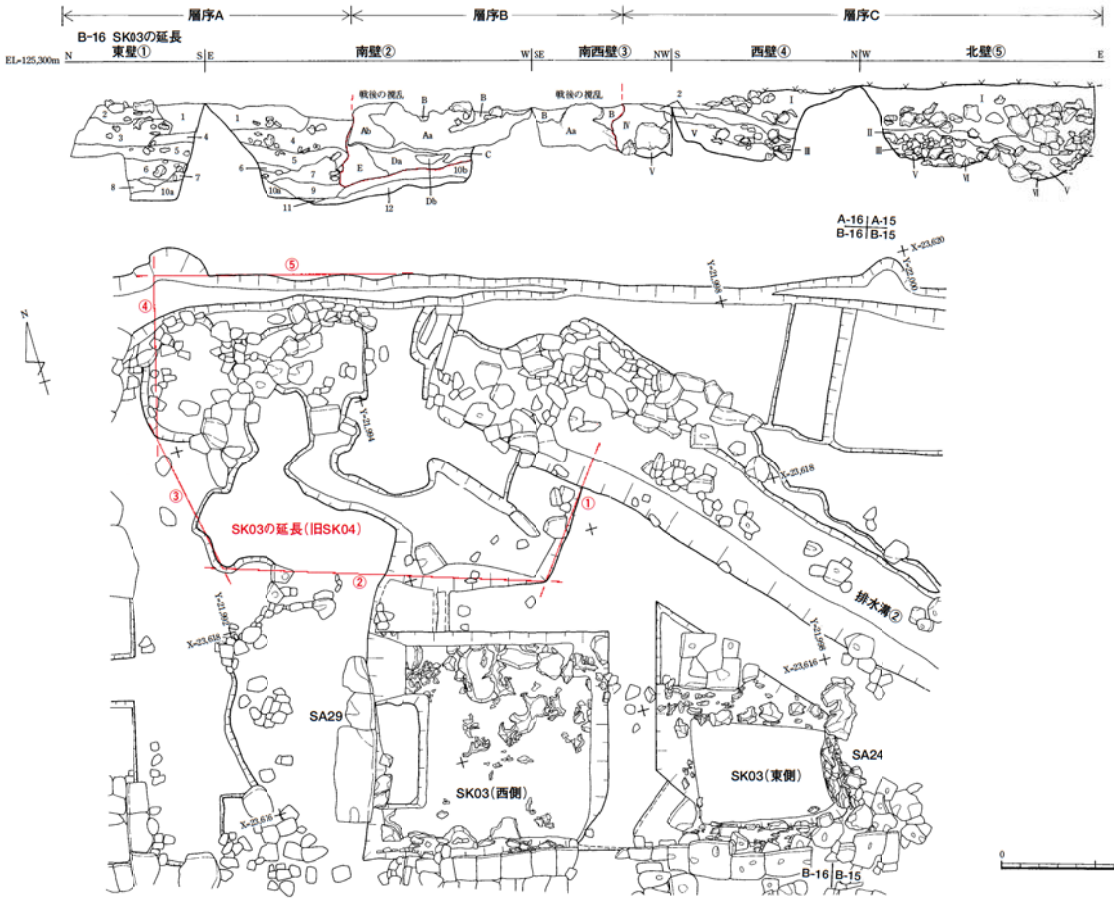
図版 6　上：B－16 SK03（西側）試掘壙　西壁（東より）
　　下：同上　SK03（西側）試掘壙　北壁（南より）



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第８表　第Ⅰ期　SK03の延長（旧SK04）　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B―16 SK03の延長 （旧SK04） 第18・21図	南北軸 3m20cm 東西軸 約5m	琉球王国成立以前の土壙SK03の一部とみられる。堆積層の大部分が戦後の造成で撹乱を受けている。14C前半～後半頃。	土壙SK03から北側に広がっている。	― ―	― ― ―	土壙SK03、石積みSA24・29、排水溝③。石弾、角釘、ガラス小玉、土器などが出土。



第21図　B-16 土壙SK03の延長　平面と層序

B-16 SK03の延長(旧SK04)の層序(関連層序:SK03西側　北壁・西壁、排水溝②南壁)
SK03の延長(旧SK04)東壁・西壁・南西壁　東側下層の層序A

第1層…　黒褐色土層a(5m前後の赤土の塊が混入。獣骨片が混入する。SK03西側北壁の第2層と同一層とみられる。)
第2層…　暗褐色土層a(赤土の塊が混入。獣骨片が混入する。排水溝②南壁の第4層相当層。)
第3層…　暗褐色土層b(戦後の攪乱を受けて、セメント片や赤土の塊、礫が混入する。他に炭や板骨片なども含まれている。排水溝②南壁の第3層aと同一層とみられる。)
第4層…　黒褐色土層b[第1層よりも黒味が強く濃い色合いとなる。10cm前後の礫が少量ながら含まれている。赤土の塊(1cm弱)が少量混じっている。SK03西側北壁第百層と同一層とみられる。]
第5層…　黒褐色土層c(第4層よりもさらに黒味が強くなる。戦後の攪乱を若干受け、セメント片が混入する。他に赤土やシルト質泥岩の風化土である俗称クチャの塊が混じっている。獣骨片や礫が減少する。炭の混入もみられる。SK03西側北壁の第3層b及び排水溝②南壁の第9層と同一の層とみられる。)
第6層…　灰黒色土層a(灰混じりの粘質土層)
第7層…　黄褐色土層(本層に淡灰色の土が混じっている。土色は異なるがSK03西側北壁の第8層と同一層とみられる。)
第8層…　黄灰色土層(土色は若干異なるがSK03西側北壁の第11層と同一層とみられる。)
第9層…　灰黒色土層b[粘土質で硬く締っている。炭や赤土(細粒化した塊)を少量ながら混入する。]
第10層a…灰黄色土層(1~2cmと粗目の赤土が多量に混ざった土層。SK03西側北壁の第11層と同一層とみられる。)
第10層b…灰褐色土層(1cm弱の赤土の塊が混じっている。他に炭が含まれている。)
第11層…　灰褐色土層(粘土質で硬く締っている。1cm弱の赤土の塊が少量含まれている。)
第12層…　暗褐色土層c(当該層には赤土が同量混じっている。)

SK03の延長(旧SK04)南西壁上層から南西壁中央付近までの攪乱部分　層序B

第A層a…セメント(戦後の瑞大時代に使用されたセメント。)
第A層b…黄白色礫層(セメント直下に敷きならされた造成用のコーラル。)
第B層…　黒褐色土層(戦後の造成により若干攪乱を受ける。東壁及び南壁の第1層と同一層とみられる。)
第C層…　灰黄色土層(セメントや石灰岩の小礫が混入。)
第D層a…灰黒色土層(炭が混入する。)
第D層b…黄褐色土層[石灰岩の礫や赤土の塊(1cm弱)が混じっている。]
第E層…　灰層[戦災により消失した首里第一小学校校舎(木造建築物)のものとみられる灰の堆積で、炭が混入する。土色は灰褐色を呈する。]

SK03の延長(旧SK04)南西壁北側から北壁までの層序C

第Ⅰ層…　淡黄色混礫土層(戦後の攪乱。本層下位の拳大から人頭大の石灰岩礫が集中し、この部分のみ淡茶色を呈する。)
第Ⅱ層…　淡茶色土層(第1層下部の礫集中部と土色が類似する。部分的に赤土が混入する。)
第Ⅲ層…　暗褐色混礫土層
第Ⅳ層…　黒褐色土層(南壁の第4層と同一層とみられる。)
第Ⅴ層…　淡褐色土層
第Ⅵ層…　灰褐色土層(北壁のみ途切れながら、薄く堆積する。)

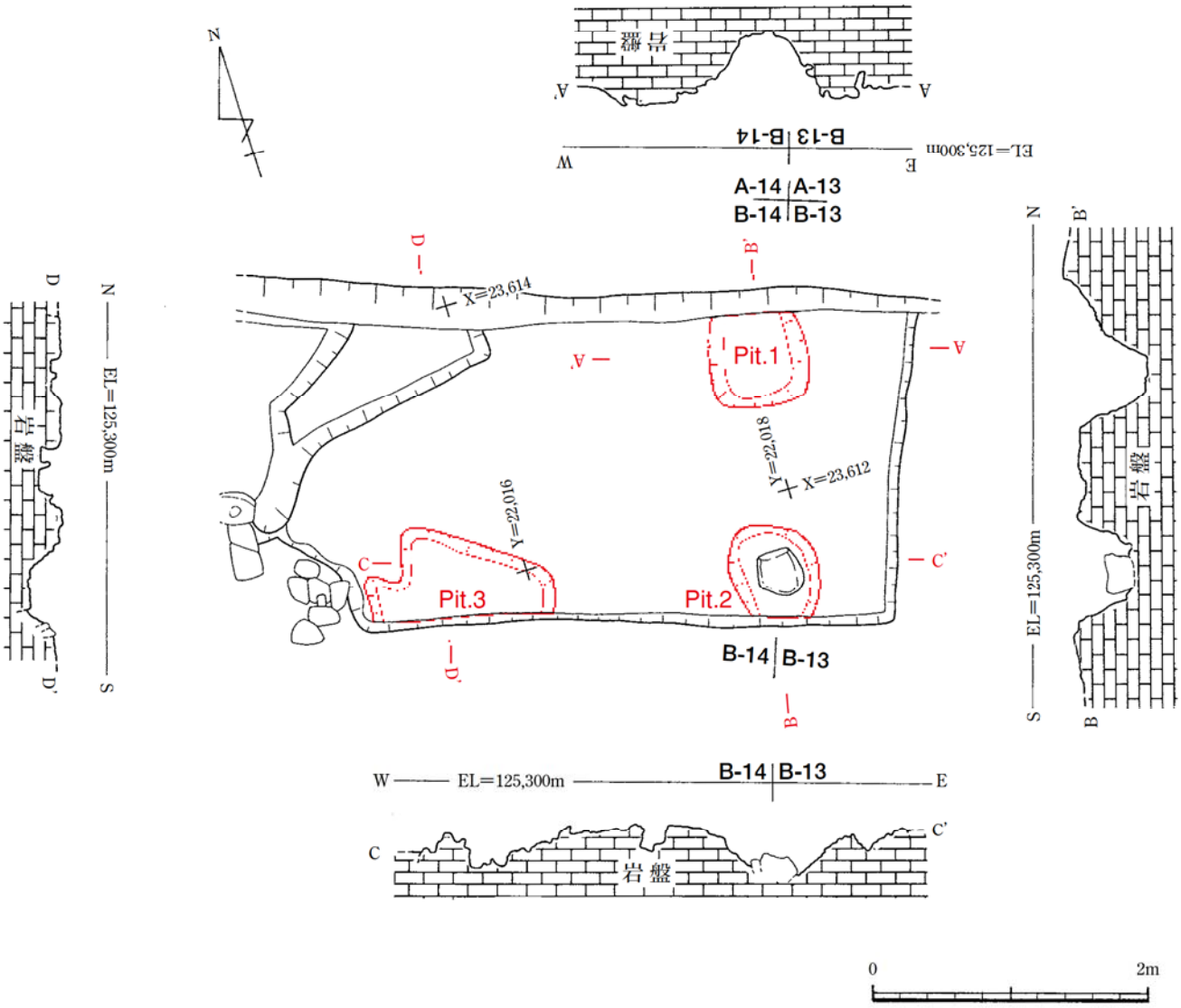
図版７　上：B－16　SK03 延長部分　南より北側を望む
　　下：同上　SK03 延長部分　東より西側を望む

図版 8　上：B－16 SK03 延長部分　東壁（西より）
　　下：同上　SK03 延長部分　南壁（北より）

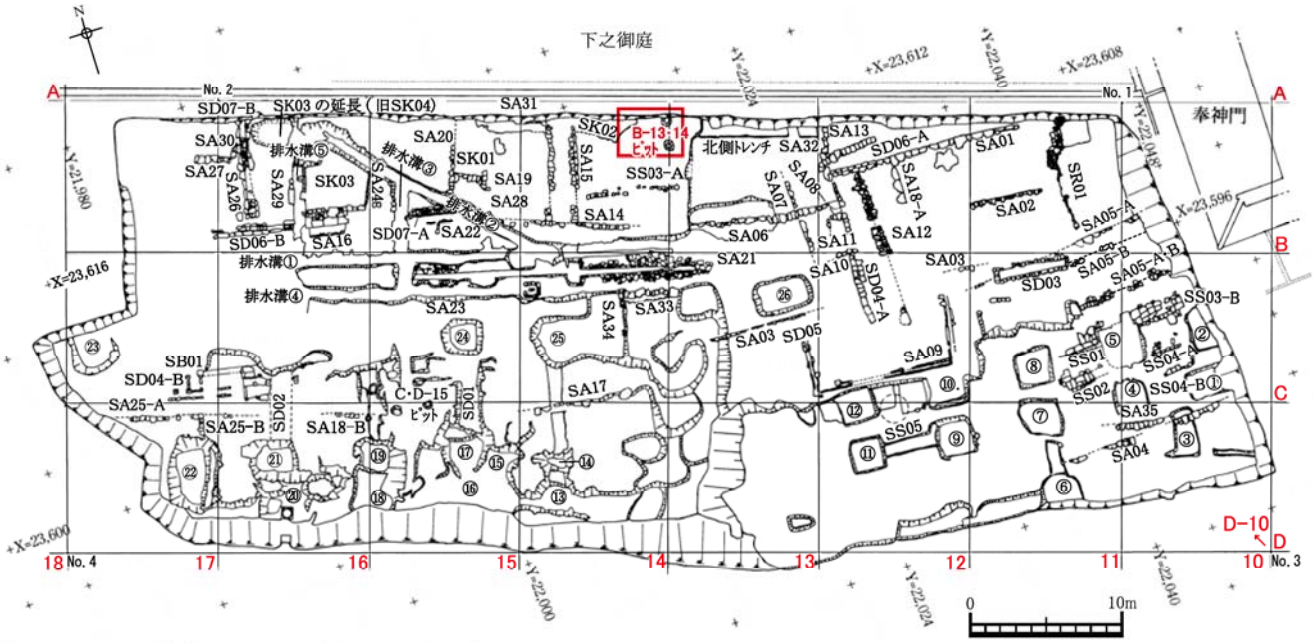
図版 9　上：B－16 SK03 延長部分　南壁(北より)
　　下：同上　SK03 延長部分　西壁(東より)

第９表　第Ⅰ期　B-13・14 ピット　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B-13・14 ピット 第18・22図	Pit.1 長軸(78cm) 短軸76cm 深さ48cm Pit.2 長軸(100cm) 短軸74cm 深さ(礎石上面20cm) Pit.3 長軸140cm 短軸(66cm) 深さ27cm	岩盤の窪みを利用した掘建柱の住居跡などの柱穴。Pit.2で礎石が検出される。グスク土器が出土している状況から当該期に比定。	建物などの南西隅であることから南北軸はN 11°00′E	― ― ―	― ― ―	土壙SK02、SS03-A。Pit 周辺は王国時代や戦後の造成や岩盤の削平などで撹乱を受けている。

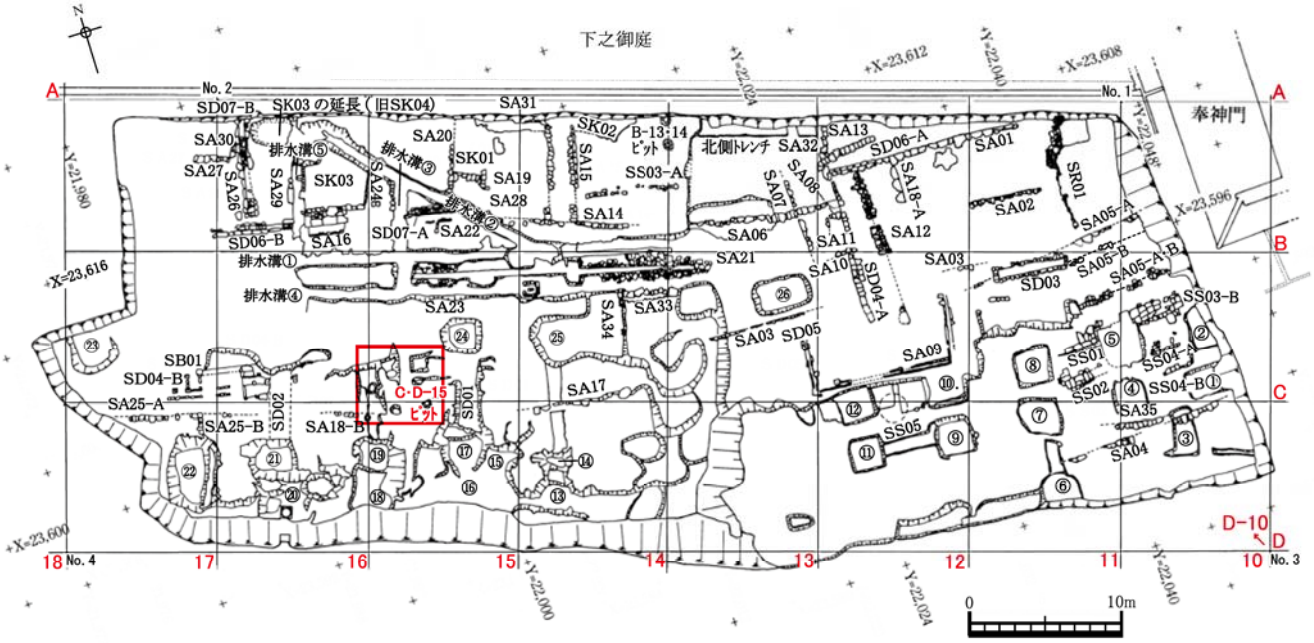


第22図　B-13・14グリッド内のピット　平面と断面



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

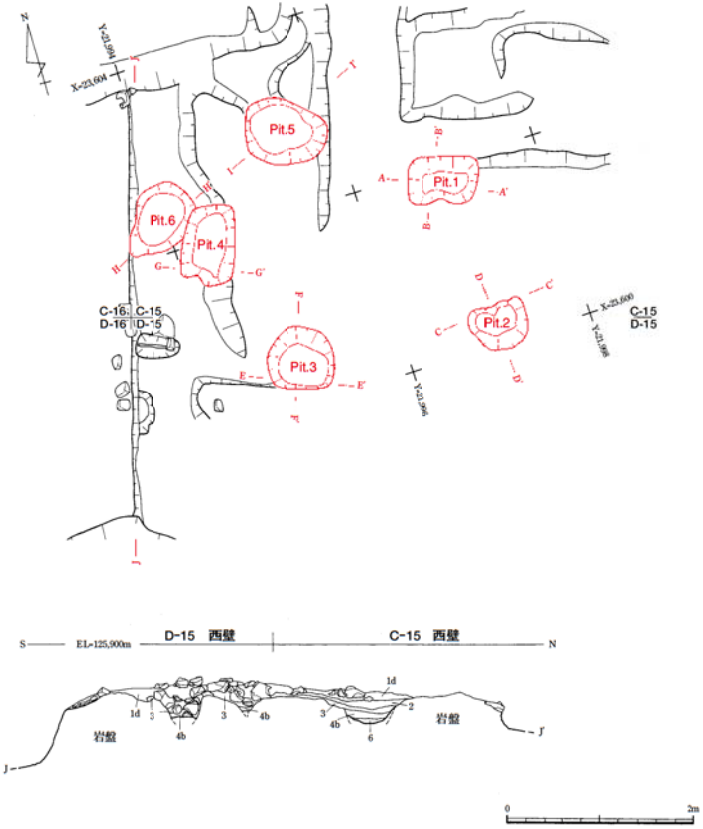
図版 10　B-13・14 ピットを南側上空より望む



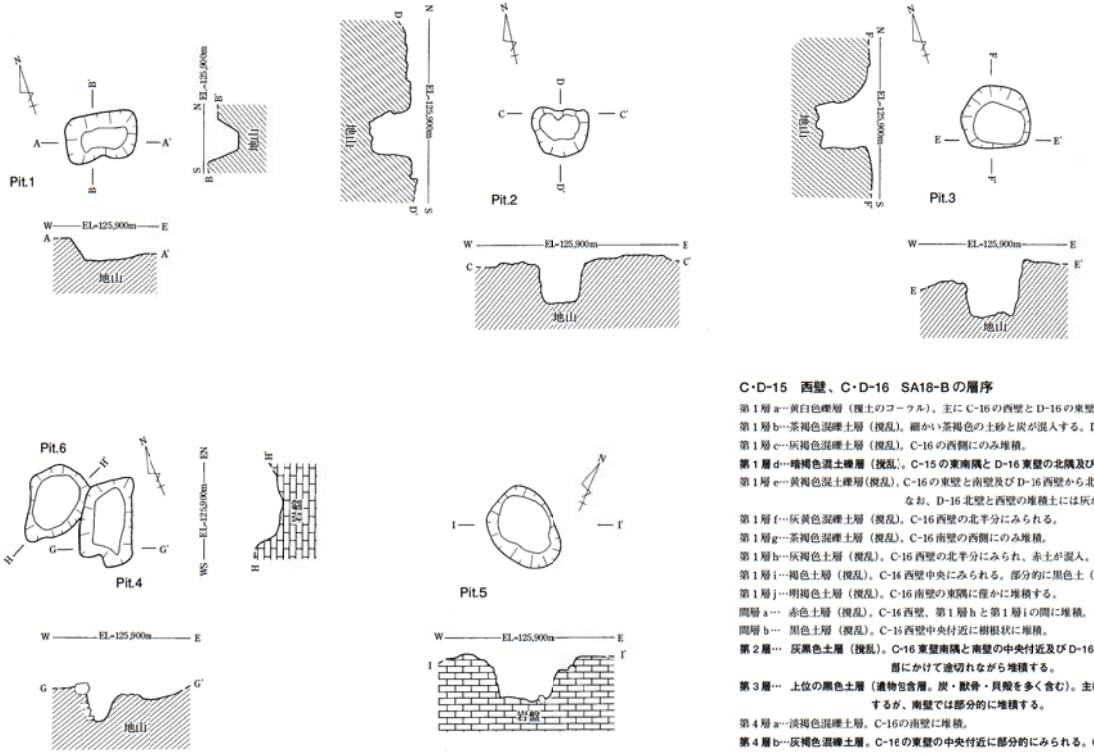
「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第10表　第Ⅰ期　C・D-15ピット　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
C・D-15ピット 第18・23図	Pit.1長軸76cm 短軸46cm 深さ31cm Pit.2長軸64cm 短軸48cm 深さ44cm Pit.3長軸70cm 短軸64cm 深さ59cm Pit.4長軸96cm 短軸54cm 深さ41cm Pit.5長軸88cm 短軸50cm 深さ72cm Pit.6長軸88cm 短軸64cm 深さ30cm	岩盤の窪みを利用したPit。Pit.2やPit.5は、Pit内の石灰岩の使用によって摩耗する事から柱穴としての利用も考えられる。Pitからプランは把握できないがPit.1の周辺から青磁香炉の出土やPit内からウシ、ブタ、ニワトリ、ウサギなどの骨が出土している事などから祭祀と関連するPitかと思慮される。14C後半～15C中頃か。	歪な五角形で主軸は不明。	― ―	― ― ―	区画石積みSA18-B。石囲いのない御嶽（古い形態の祭祀場跡）か。



第23図　C・D-15 グリッド内のピット　平面と断面



C・D-15　西壁、C・D-16　SA18-Bの層序

第１層 a…黄白色礫層（覆土のコーラル）。主に C-16 の西壁と D-16 の東壁に集中。

第１層 b…茶褐色混礫土層（撹乱）。細かい茶褐色の土砂と炭が混入する。D-16 西側にのみ堆積。

第１層 c…灰褐色混礫土層（撹乱）。C-16 の西側にのみ堆積。

第１層 d…暗褐色混土礫層（撹乱）。C-15 の東南隅と D-16 東壁の北隅及び C・D-15 に堆積。

第１層 e…黄褐色混土礫層（撹乱）。C-16 の東壁と南壁及び D-16 西壁から北壁の西隅にみられる。なお、D-16 北壁と西壁の堆積土には灰が混入している。

第１層 f…灰黄色混礫土層（撹乱）。C-16 西壁の北半分にみられる。

第１層 g…茶褐色混礫土層（撹乱）。C-16 南壁の西側にのみ堆積。

第１層 h…灰褐色土層（撹乱）。C-16 西壁の北半分にみられ、赤土が混入。

第１層 i…褐色土層（撹乱）。C-16 西壁中央にみられる。部分的に黒色土（間層 b）が混ざる。

第１層 j…明褐色土層（撹乱）。C-16 南壁の東隅に僅かに堆積する。

間層 a…　赤色土層（撹乱）。C-16 西壁、第１層 h と第１層 i の間に堆積。

間層 b…　黒色土層（撹乱）。C-16 西壁中央付近に樹根状に堆積。

第２層…　灰黒色土層（撹乱）。C-16 東壁南隅と南壁の中央付近及び D-16 北壁の東側から中央部にかけて途切れながら堆積する。

第３層…　上位の黒色土層（遺物包含層。炭・獣骨・貝殻を多く含む）。主に C-16 の東壁に堆積するが、南壁では部分的に堆積する。

第４層 a…淡褐色混礫土層。C-16 の南壁に堆積。

第４層 b…灰褐色混礫土層。C-16 の東壁の中央付近に部分的にみられる。C・D-15 では途切れながら堆積する。

第５層…　下位の黒色土層。地山の赤色土が混入する。主に C-16 の南壁から西壁の一部（南隅）に堆積。

第６層…　黄褐色混礫土層。地山の赤土に石灰岩の小礫が混入する。C-15 西壁でのみ確認される。

図版 11　上：C･D-15 ピットを西側上空より望む
　　下：　同上　ピット　東より西側を望む

図版 12　上：C･D-15 ピット　西より東側を望む
　　下：　同上　ピット　北より南側を望む

ロ．第Ⅱ期（14 世紀終末～ 15 世紀前半）・（第 24 図）

当該期の遺構としてＳＡ01・ＳＡ01 背面（第 25 図～第 29 図・第 11 表。図版 13 ～ 15）、ＳＡ05 －Ａ（外面）・ＳＡ05 －Ａ（内面）（第 30 図・第 12 表。図版 16 ～ 20）、ＳＫ02（第 31 図・第 13 表。図版 21・22）の３基が想定される。ＳＡ01 は基壇を有する建物の面石とみられるものである。今回の整理でＳＡ01 背面の背面にあたる野面石積み（第 28 図・図版 13 下）を確認することができた。これにより基壇を有するＳＡ01 の梁行が４間強（748cm）が想定された。ＳＡ01 の外面石積みには鑿で印（記号）を刻み込んだ刻印石（註３）が 19 点確認されている。

次にＳＡ05 －Ａ（外面）の石積みは外面が切石積み（第 30 図・図版 16 下・図版 18 上・図版 19 上）で、内面が野面積みのＳＡ05 －Ａ（内面）である。ＳＡ05 －Ａ（内面）は野面石を丁寧に野面積み（第 30 図・図版 16 上・図版 17・19 下・図版 20）で積み上げられている。ＳＡ05 －Ａ（内面）の位置はＳＳ03 －Ｂの北側寄りで検出されている。なお、ＳＡ05 －Ａ（内面）は第Ⅳ期（15 世紀後半～ 16 世紀初頭）の時期でも再度使用している事が今回の整理で確認された。

ＳＡ05 －Ａ（外面）の北側に設定した東西トレンチ内から二次的に火熱を受けた鎧（小札や金物）や釘が下層近くから出土している。この時期の状況を文献にあたると 1453 年に起きた志魯・布里の乱（註４）が予想されたが、最近の研究（註５）では当該時期（1453 年）には王位継承の内乱による正殿の炎上消失はなかったことが文献資料などから裏付けられているようである。ＳＡ05 －Ａ（外面）の切り石は岩盤直上から石積みがなされている点や洪武通寶（初鋳造 1368 年）の出土などから志魯・布里の乱（1459 年）以前から 1368 年以降の時期に普請がなされたものと予想さるところである。ＳＡ01 とＳＡ05 －Ａ（外面）の前後関係は、ＳＡ01 が若干古く、ＳＡ05 －Ａ（外面）が新しい時期のものではないかと考えられる。

土壙ＳＫ02（第 31 図・図版 22 下で高麗系灰色瓦が北壁の下部にみえる）は下部の第９層から高麗系の灰色瓦の破片が多量に出土した状況から判断して当該期に設定した。土壙ＳＫ02 は土壙ＳＫ01（ＳＡ19・20、ＳＡ28）の下位に位置する。

参考までに土壙ＳＫ01 は、1459 年の失火で消失した倉庫跡であり、多量の貿易陶磁器（推定個体数 1,162 個体）などが出土し、その内の 518 点と金属製品及びガラス玉一括が平成 12（2000）年６月 27 日付で国の重要文化財として指定されている（註６）。

註文献

註 3.　上地克也・上原 静《首里城城郭検出の「刻印石」》『文化課紀要』第９号 沖縄県教育庁文化課 1993 年３月。

註 4.　沖縄県教育委員会『蔡温本　中山世譜　正巻』 1986 年。

註 5.　高瀬恭子ほか『アジアの海の古琉球－東南アジア・朝鮮・中国－』琉球弧叢書⑳ 有限会社 榕樹書林 2009 年７月 30 日。

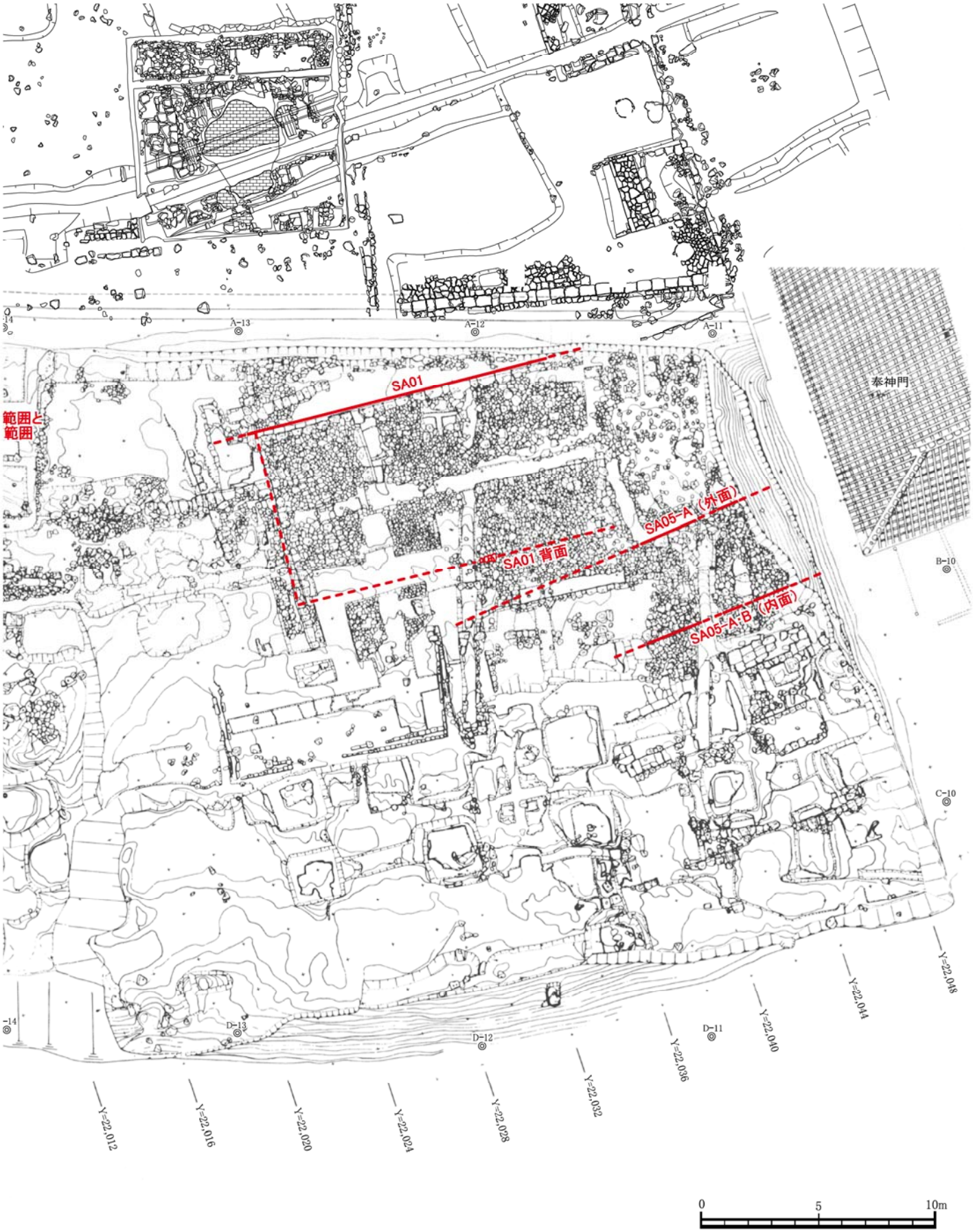
註 6 a.　沖縄県立埋蔵文化財センター『重要文化財指定記念　特別企画展　首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－ 』2001 年３月。

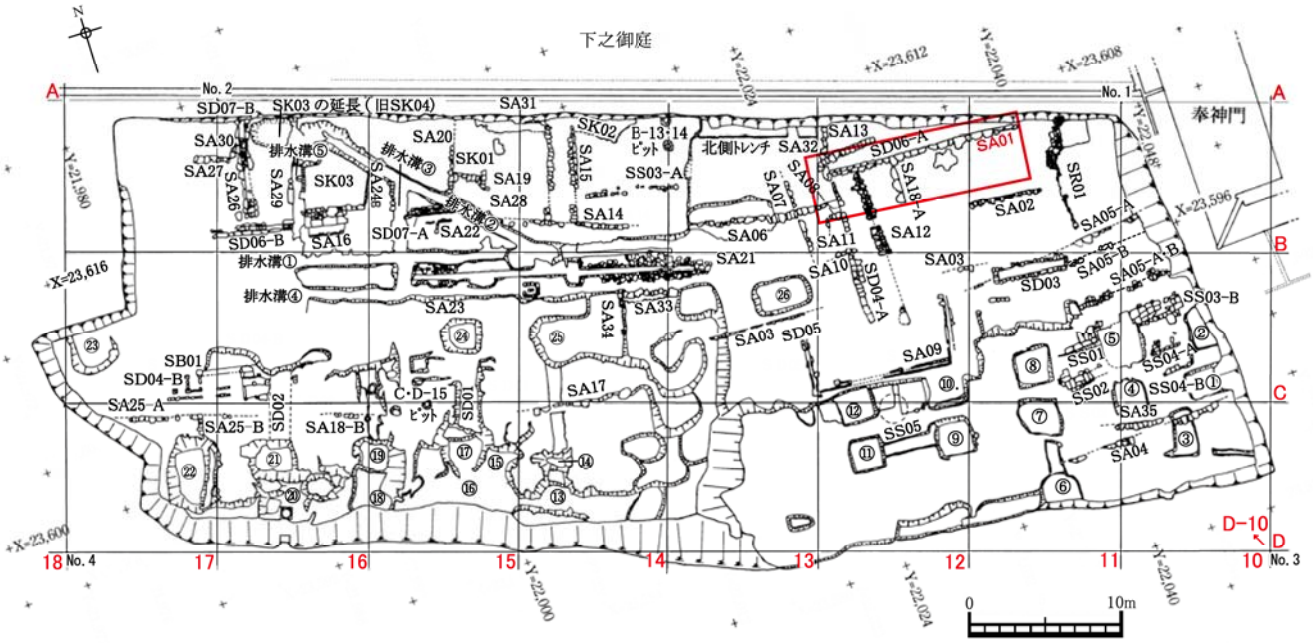
b.　沖縄県文化財調査報告書第 132 集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会 1998 年３月。

c.　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 49 集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2009 年３月。

第Ⅱ期（14 世紀終末～ 15 世紀前半）
石積みSA01・SA05-A
土壙SK02

第24図　京の内北地区第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）遺構の推定復元


SA01
範囲と
範囲
SA05-A（外面）
SA01 背面
SA05-A・B（内面）
奉神門
A-13
A-12
A-11
B-10
C-10
D-13
D-12
D-11
Y=22,012
Y=22,016
Y=22,020
Y=22,024
Y=22,028
Y=22,032
Y=22,036
Y=22,040
Y=22,044
Y=22,048
0
5
10m

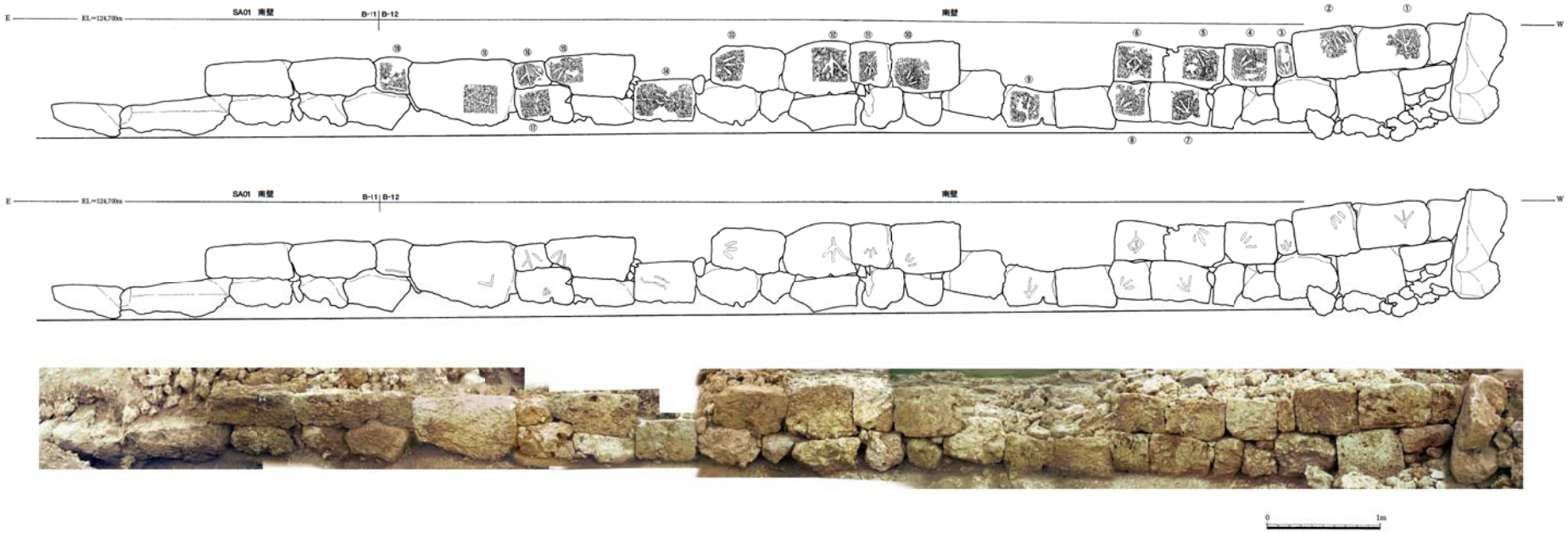


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

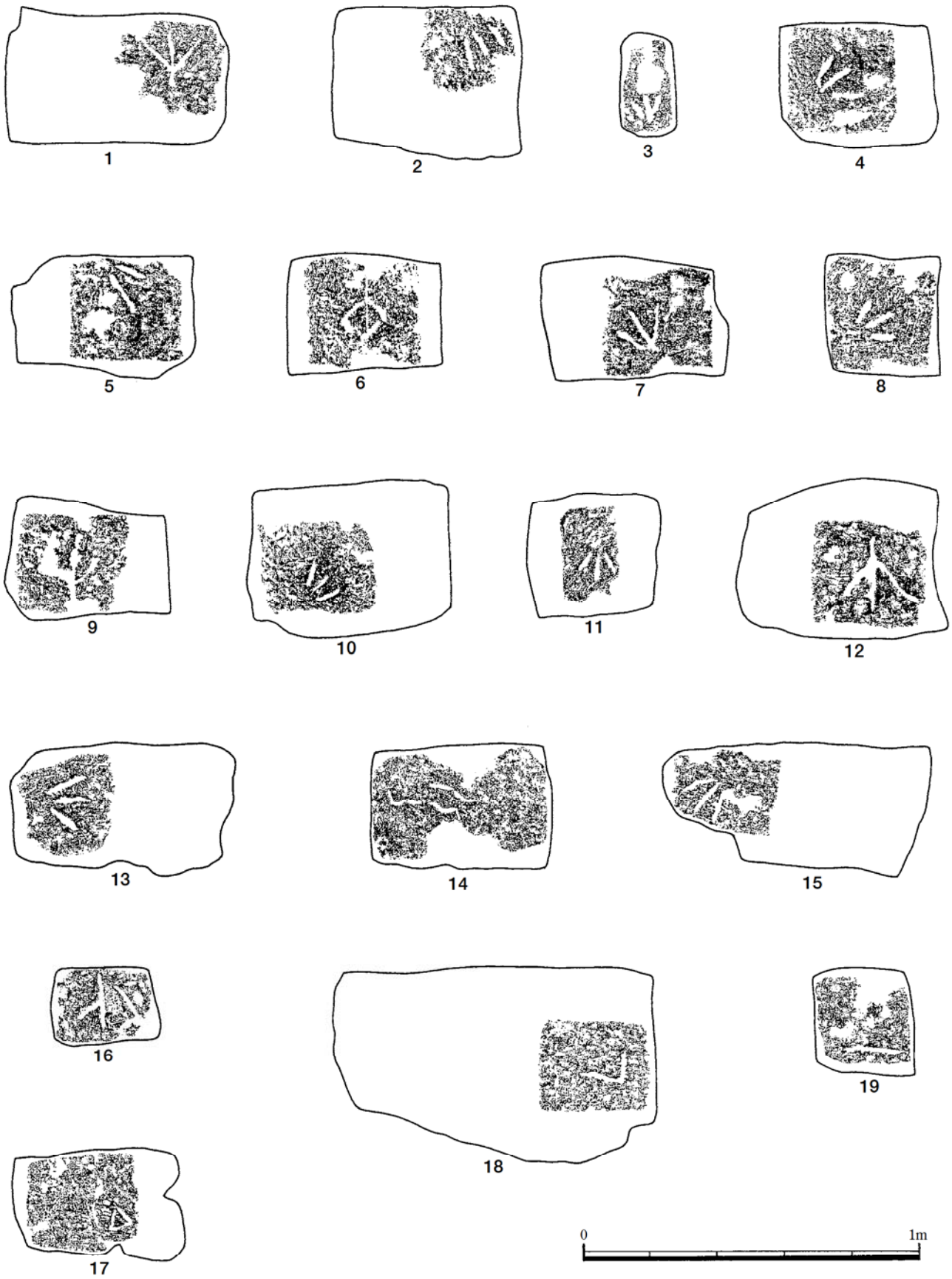
第 11 表　第Ⅱ期　SA01　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B－11・12 SA01 第24～29図	12m95cm 6m50cm 64cm	琉球王国初期頃の建物基壇。東西に延びる。岩盤を削平した面に土盤となる土砂を6～7cm敷いた上から粗加工の大型切り石を設置。SA01の遺構を検討する中で二列配置の背面石積み（野面石積み）が確認された事は大きな成果であった。二列配置の野面石積みについて、建物の規模を把握する目的で、第29図を作成して検討をおこなった結果、南北軸が4間1尺（757cm）で、東西軸の残存する間数が7間半弱（1340cm＋X）の建物であったことが推定できた。14C終末～15C前半。	N86°　45′　W	切り石積み 全体勾配 65°・80° 一番石の 勾配 80°・83°	40～90cm 23～37cm 35～70cm	SA01の西端がSA13やSD04-Aで切られていて、SA01の西端を積み直している。その他、SA01の中央付近と西寄りの箇所で裏込め石の中からSA18-AとSA12の石積みが検出されている。また、第29図のようにSA01の背面石積み｛二列配置の野面石積み｝が確認された。外面石積みの根石及び一・二番石に鉄鑿による刻印がみられる。刻印の種類や組み合わせ、方向などから15種類19例（第26・27図）が確認。

第25図　B-11・12 石積みSA01　平面と立面及び断面



第26図　B-11・12 石積みSA01　立面と刻印石



第 27 図　B-11・12 石積みSA01　外面石積みの刻印石

第28図　B-11・12、C-12 石積みSA01 背面石積みの根石設置状況模式図

B-11・12、C-12 石積み SA01 背面石積みについて

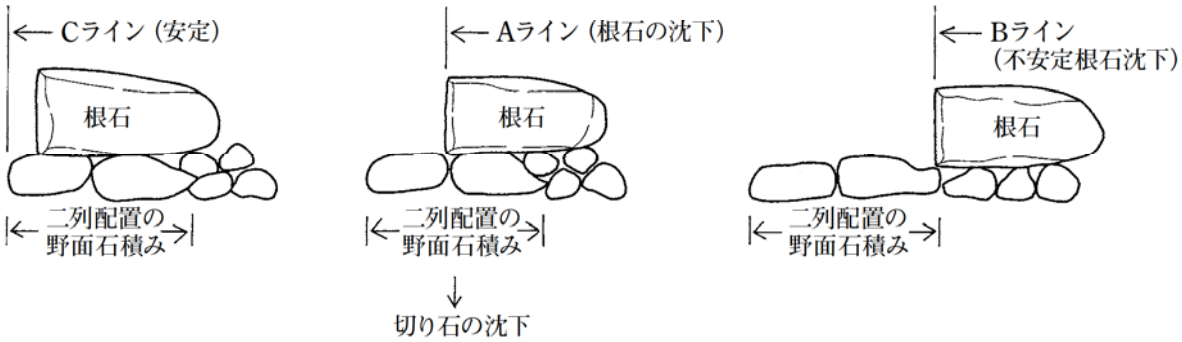
北側正面の切り石ラインから南側に広範囲に敷き詰められた栗石の中から東西方向に延びる野面の石を2列に配置された根石とみられる部分が確認された。この2列配置の石積みは、SA01とほぼ同一方向に延びていることからSA01の背面に石積みが設置された可能性が高いものと推察される。

参考までにSA01外面から背面石列(根石設置相当部分)までの直線距離(Aライン)は、748cmで4間強となる。実際に背面根石相当部分切り石を設置するとなると、下記B・Cラインの位置が想定される。

Bライン　4間(727cm)の位置

Cライン　4間1尺(757.5cm)の位置

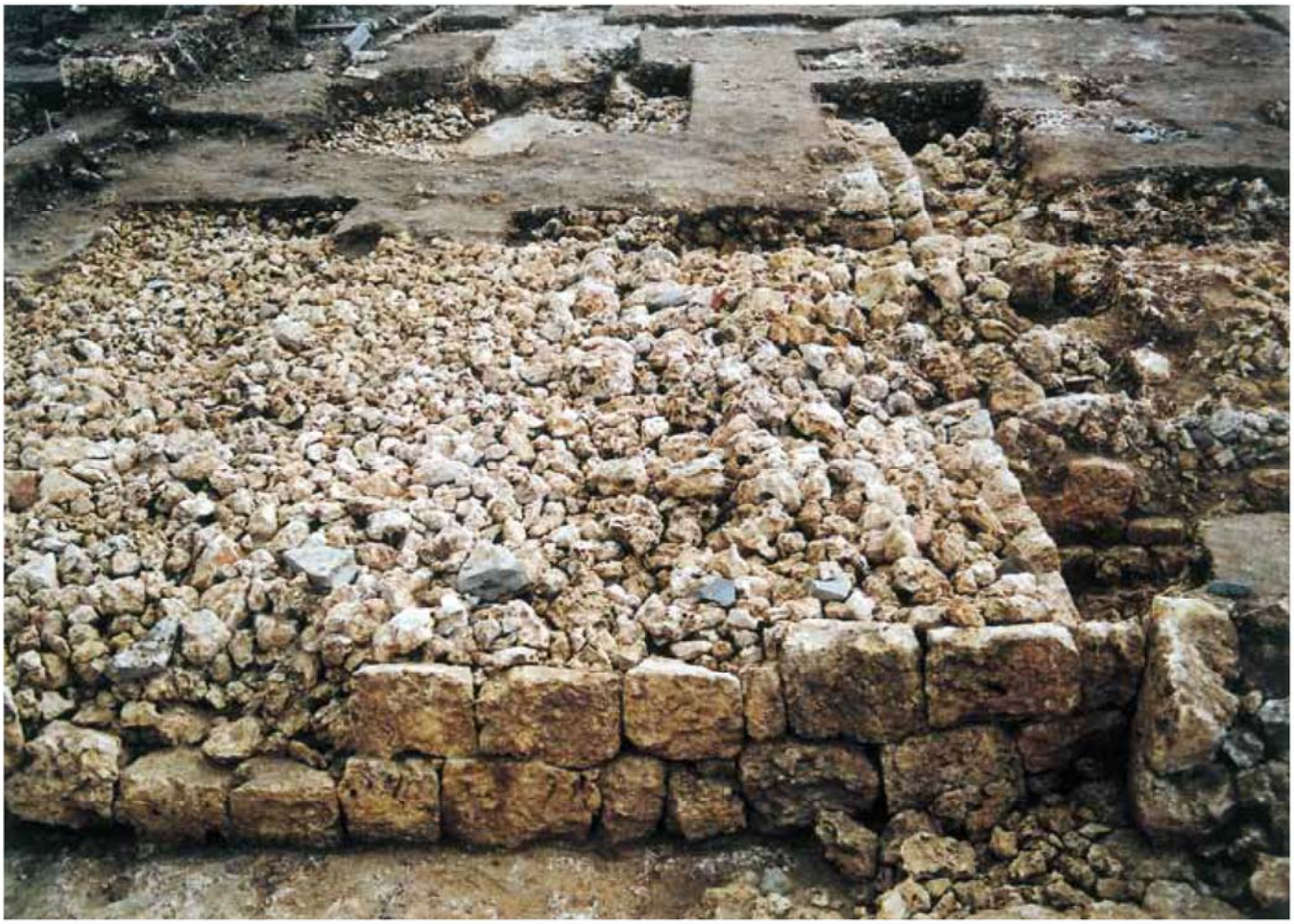
各A～Cラインまでの三つのラインで、Cライン上に仮りに控え長40cm程の切り石を設置すると最も根石が安定する。A・Bラインは根石が沈下するなど不安定である。Bラインは建物の礎盤や礎石(柱)が設置された位置かもしれない。



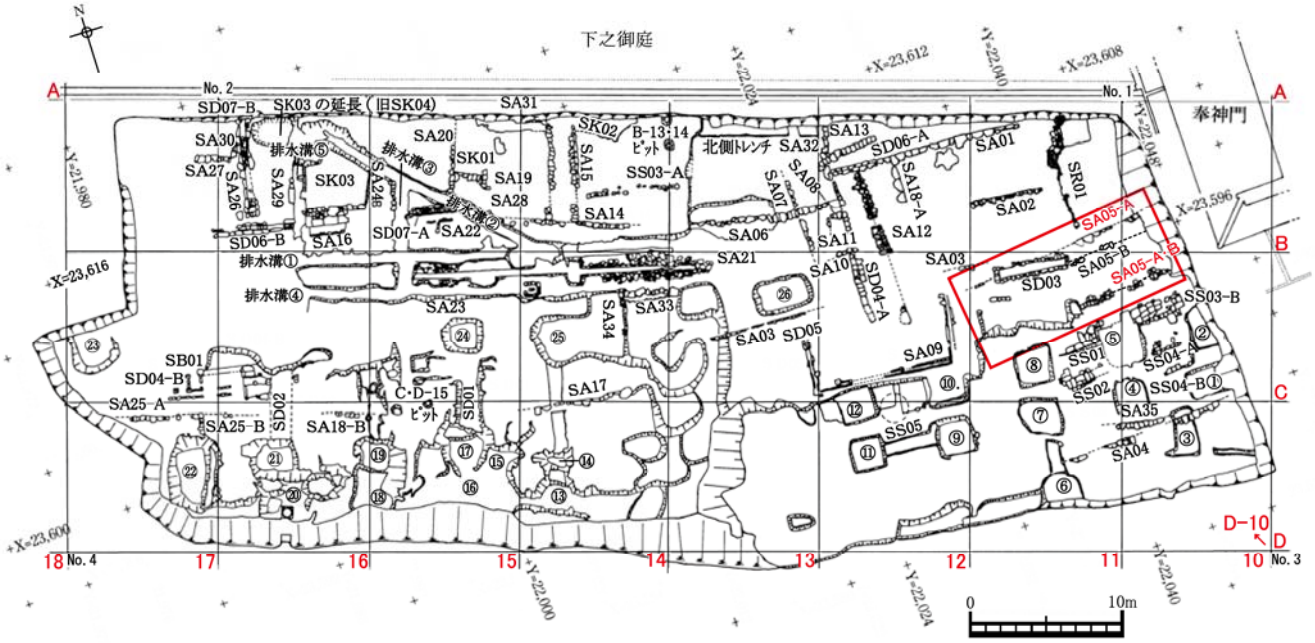
第29図　B-11・12、C-12 SA01(建物) 推定プランと根石設置ヶ所

図版13　上：B-11・12 SA01（写真左側）ほかを西側上空より望む
　　下：　同上　SA01　南側上空より望む

図版 14　上：B－11・12 SA01（写真右側）東より西側を望む
　　下：　同上　SA01　西より東側を望む



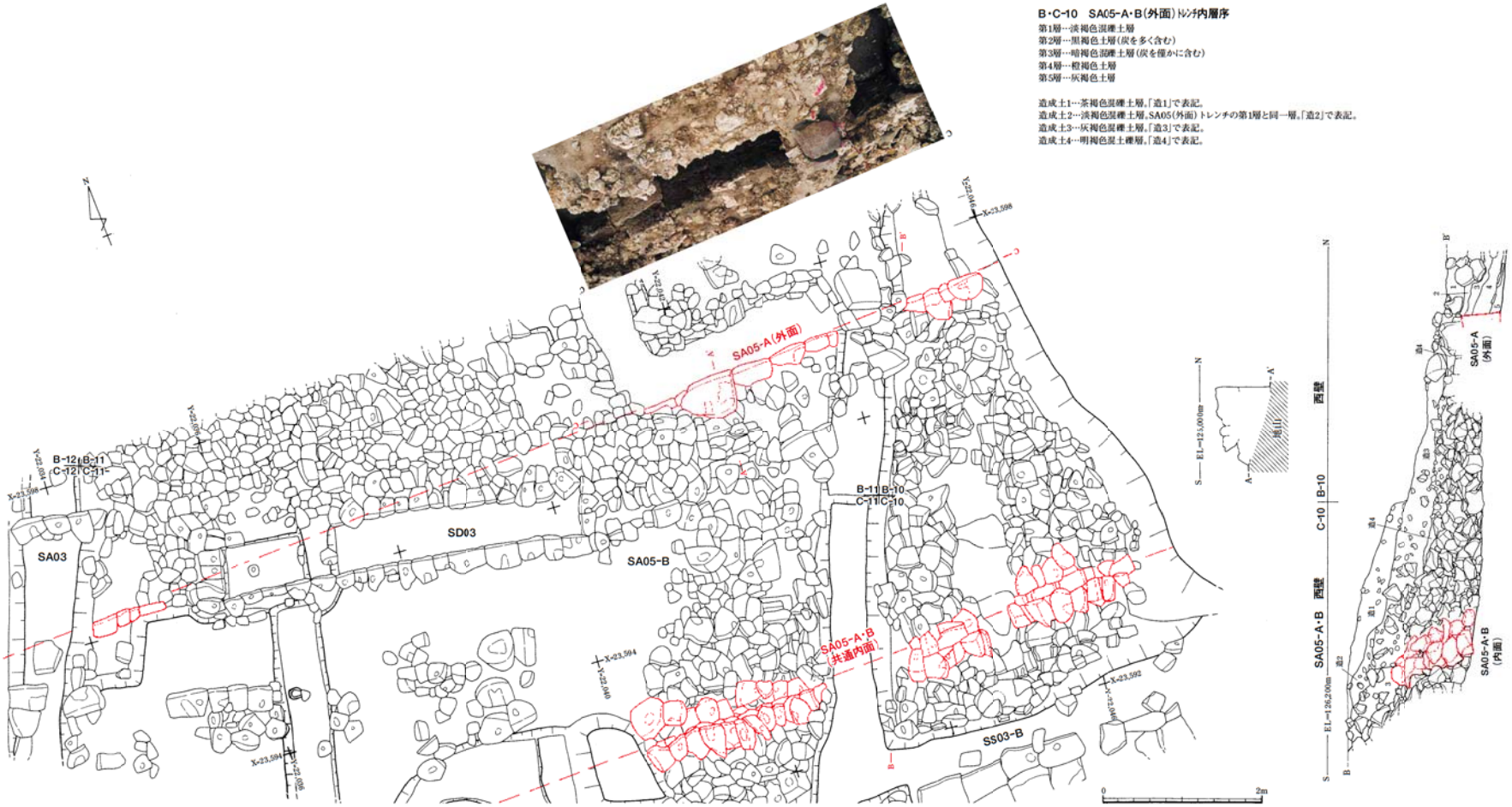
図版 15　上：B－11・12 SA01　北より南側を望む
　　下：　同上　SA01　北より南側を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第12表　第Ⅱ期　SA05-A　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B・C－ 10・11 SA05-A 第24・30図	11m90cm 6m00cm 67cm	琉球王国時代の区画石積み。東西に直線的に延びるが大半がSA02やSD03の下位に埋もれている。東端は未検出で奉神門南辺に延びる。SA01と同様に削平された岩盤の上に厚さ6cm程度の土砂を土盤に敷いてから丁寧に加工された切り石を設置。14C終末～15C初頭。SA05は第Ⅴ期まで機能していたことが予想される。寿命の長い区画石積みとみられる。	N 95° 30′ W	切り石積み 89°	32～65cm 28～39cm 15～52cm	SA05－A（外面）の上位はSA02の栗石SD03が重なっている。石敷きSS01～SS03－B、SS04－A・Bの主軸方向が近似。一番石の勾配は89°と根石と同じ勾配。SA05の前面トレンチ内から二次的に火熱を受けた鎧の金物・小札や鉄釘が多量に出土。SA05－A（内面）の基礎は配石された野面石積みがC－11グリットのSS01及びSS03－Bの北隣りから検出されている。SA05－A（内面）の野面石積みは岩盤から積み上げていることがトレンチの発掘で判明している。今回の遺構検討の中で第Ⅳ期のSA05－B（外面）が新たに確認（第47図）された。SA05－B（外面）の内面は、SA05－A（内面）の野面石積みを再利用しているものと思慮されたことからSA05－B（内面）として取り扱った。その為、全体の遺構図（第17図）では、「SA05－A（内面）・SA05－B（内面）」。或いは第30図では「SA05－A・B（共通内面）」などと表記した。



第30図　B・C-10・11 石積みSA05-A（外面）・SA05-A・B（内面）　平面及び層序

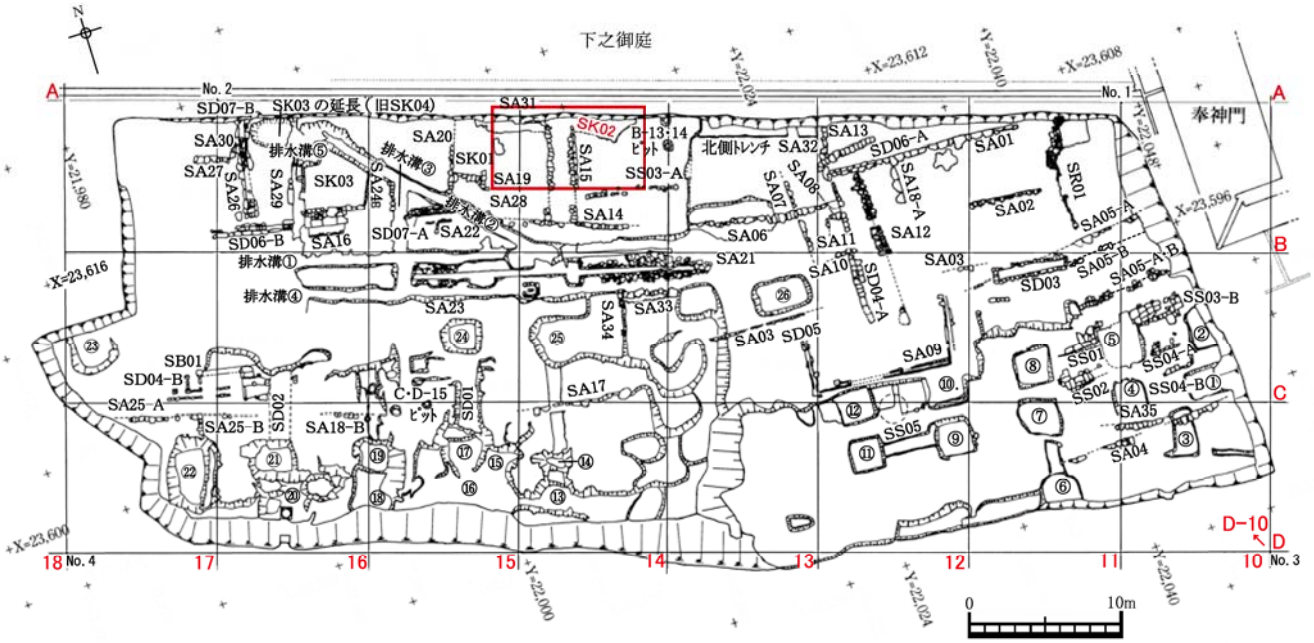
図版 16　上：B・C−10・11　SA05−A ほかを南側上空より望む
　　下：　　同上　　SA05−A（手前が外面、奥が内側石積み）北より南側を望む

図版 17　上：B･C－10･11　SA05－A（右側が外面、左側が内側石積み）　東より西側を望む
　　下：　　同上　　SA05－A（手前が内側石積み、奥は外面）　南より北側を望む

図版 18　上：B･C－10･11　SA05－A　外面の切り石を北より望む
　　下：　同上　　SA05－A（手前）　外面の切り石を南より望む

図版 19　上：B－10 SA05－Aﾄﾚﾝﾁ　東壁（西より）
下：B･C－10･11 SA05－A　内側野面石積みと外面の切り石

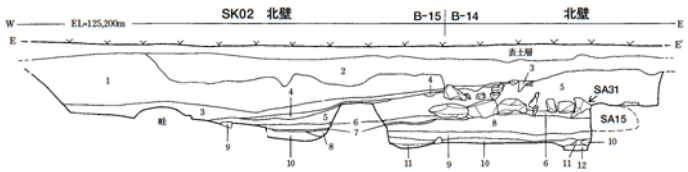
図版 20　左：B－10･11　SA05－A　内側の野面石積みを西より望む　　右：　同左　SA05－A　内側の野面石積み（黒枠内）



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

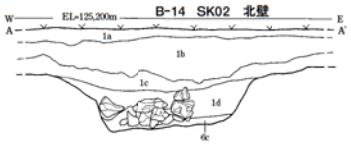
第13表　第Ⅱ期　SK02　遺構観察表

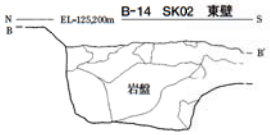
地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－14・15 SK02 第24・31図	11m77cm 1m65cm	当該遺構の上位に第Ⅲ期の土壙SK01（第44図）と第Ⅴ期の石積みSA15（第57・61図）が存在する。土壙SK02の東西の端は岩盤で窪みに堆積した包含層や遺物の造成土（石灰岩の礫を含む）である。石灰岩の窪みは堆積した包含層の上から造成土で整地（雑な地均し）後に第Ⅴ期のSA15の石積みを配置する。土壙内の下層より高麗瓦を主体とする遺物包含層が確認される。14世紀終末～15C初頭に埋められた土壙。	N72° 10′ W が考えられる。	― ―	― ― ―	上位に第Ⅴ期のSA15（第57・61図）と第Ⅲ期のSK01（第44図）の遺構が重複して存在する。

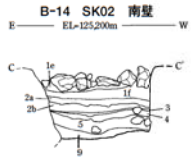


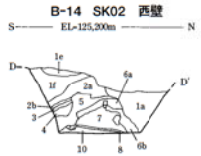
B-14・15 SK02 西側の層序　北壁

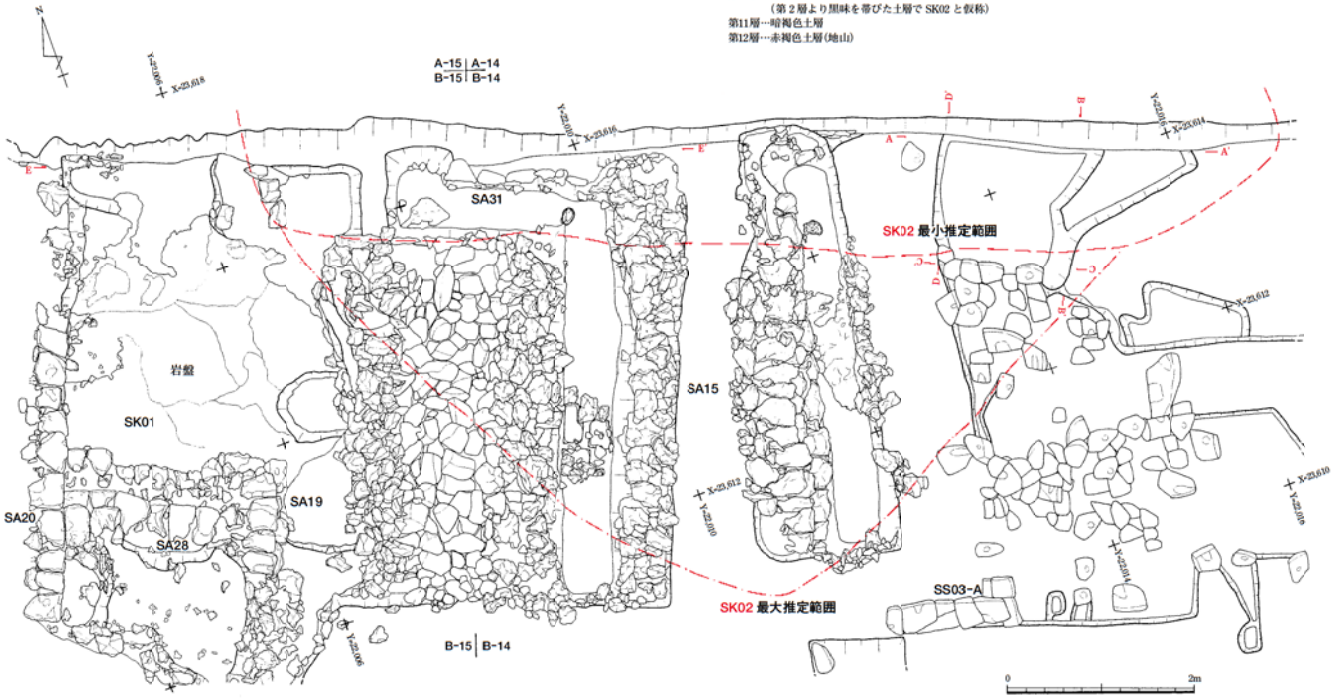
表土層…芝及び腐葉土
第１層…淡褐色混礫土層(客土)
第２層…暗褐色混礫土層(客土)
第３層…白色砂層(平成２年の客砂)
第４層…暗褐色土層
第５層…茶褐色混礫土層
第６層…暗褐色混礫土層(SA31 の基礎土盤)
第７層…赤色土層(造成土)
第８層…黄褐色礫層
　　(SA15 の根石を安定させた土盤材および基礎土盤)
第９層…黒褐色土層
　　(高麗瓦の破片を多く含む包含層)
第10層…暗褐色混礫土層
　　(第２層より黒味を帯びた土層で SK02 と仮称)
第11層…暗褐色土層
第12層…赤褐色土層(地山)











第 31 図　B-14・15 土壙 SK02　平面及び層序

B-14 SK02 東側の層序

第１層 a…黄褐色土層(赤土：国頭マージ)。客土。
第１層 b…灰褐色混礫土層(コーラル)。客土。
第１層 c…黄白色砂層(平成２年の調査終了時に埋め戻した入砂)。
第１層 d…茶褐色混礫土層(赤瓦が多く混入し、他にグスク系土器、青磁、鉄製品などが出土)。
第１層 e…淡灰色混礫土層(攪乱)。南壁から西壁にかけて途切れながら堆積。
第１層 f…灰褐色混礫土層(攪乱)。南壁では薄く、西壁で厚く堆積する。
第２層 a…灰褐色土層(攪乱)。南壁と西壁で堆積。
第２層 b…灰褐色混礫土層(攪乱)。南壁と西壁に堆積。
第３層…　灰黒色土層(攪乱)。南壁から西壁にかけて薄く堆積（層厚２～4cm)。
第４層…　淡灰色混礫土層(攪乱)。南壁と西壁の一部に堆積。
第５層…　黒褐色土層(攪乱)。南壁と西壁でのみ検出され、炭が多く混入する。
　　中国産青磁、褐釉陶器、タカラガイ、イモガイが出土。
第６層 a…茶褐色土層(攪乱)。西壁にのみ堆積。
第６層 b…淡茶色土層(攪乱)。西壁にのみ堆積し、地山の黄褐色土が再堆積。
第６層 c…暗褐色土層。北壁にのみ堆積。
第７層…　淡灰色混礫土礫層(攪乱)。西壁にのみ堆積。
第８層…　黒色土層。西壁にのみ確認され層厚が 2cm 前後と薄い。
第９層…　淡灰色礫土層。南壁にのみ検出。
第 10 層…黄褐色土層(地山)。西壁にのみ検出。

図版21　上：B-14・15 SK02（写真右側）ほかを東側上空より望む
下：B-14 SK02 東側　西壁（東より）

図版 22　上：B-14・15 SK02 西側　西壁（東より）
　　下：同上　SK02 西側　北壁（南より）

ハ．第Ⅲ期（15 世紀中頃）（第 32 図）

この時期の遺構として第 32 図に呈示したように石積み、排水溝、土壙の三種類が存在する。以下、石積み、排水溝、土壙の順に遺構番号順、或いは関連遺構毎に記す。

1．ＳＡ 08（外面）とＳＡ 10（内面）が対応（第 33 図・第 14 表。図版 23・24）する。

2．ＳＡ 17・ＳＡ 18 － Ｂ・ＳＡ 25 － Ａ・Ｂ（第 34 図・図版 25 ～ 27）は、区画石積み（ＳＡ 17・ＳＡ 18 － Ｂ）及び御嶽（ＳＡ 25 － Ａ・Ｂ）の石積みとみられるものである。これらの石積みの内面は戦後の琉球大学校舎建築時の造成に伴う岩盤を削平した際に破壊され石積みの外面のみが途切れながら残存する程度であった。

a.）ＳＡ 17（第 35・36 図・第 15 表。図版 28・29）の石積みの根石に外面に「Ｈ」・「Ｎ」字様の刻印のある石積みが２点（第 36 図）確認されている。

b.）ＳＡ 18 － Ｂ（第 37 図・第 16 表。図版 30）の石積みの北側・南側は、戦時中に砲弾が着弾・爆発した際に生じた砲弾炸裂痕が二カ所で確認され、攪乱を受けている。

c.）ＳＡ 25 － Ａ・Ｂ（第 38 図・第 17 表。図版 31 ～ 33）は、戦後の造成（琉大の建物の基礎工事）で大半が破壊されている。御嶽の本体部分とみられる。

3．ＳＡ 33・34（第 39・40 図・第 18 表。図版 34・35）の詳細については、平成 21（2009）年に報告（註７）したとおり、1459 年（註８）に起きた火災で焼失した倉庫の火事場掃除で、当該遺構の内側に火熱を受けた多量の陶磁器類の一部を廃棄した場所となっている。両遺構とも石積みの片面しか残っていない為、機能や遺構の展開はわからない。

4．ＳＡ 18 － Ａ（第 41 図・第 19 表。図版 39・44・45）とＳＡ 32・ＳＤ 04 － Ａ（第 41・42 図・第 19 表。図版 39 ～ 43）の石積みは、対応するとみられる石積みであり、平成９（1997）年２月 20 日～３月 21 日迄の期間で実施された下之御庭の首里森御嶽復元整備に係る遺構確認のための発掘調査（図版 36）で検出された首里森御嶽の石積み（第 42 図・図版 37･38）に繋がっていくことを現地で確認した。下之御庭の首里森御嶽で検出された遺構などの詳細については報告書（註９）を参照されたい。

5．ＳＤ 06 － Ａ（第 43 図・第 20 表。図版 46 ～ 48）は、上記のＳＤ 04 － Ａ・ＳＡ 32 と関連する遺構とみられる。当該遺構は、削平された岩盤の上に底板の切石が 10 枚程度敷かれている。底板となる敷石は東側へ緩やかな傾斜となるように配置され、その勾配は 7° を測った。

6．ＳＡ 19・20、ＳＡ 28（第 44 図・第 21 表。図版 49 ～ 51）の石積みは単独の三基として考えて発掘調査を実施したが調査の進展によりこれらの石積みは倉庫施設に関係する壁や階段と判明したことら土壙ＳＫ 01 として捉えて整理・報告（註 10）した。倉庫跡は、1459 年（註８）に起きた火災で焼失した倉庫跡と判断した。

以上、土壙ＳＡ 01 の倉庫跡は 1459 年の倉庫など失火の時期が想定された。倉庫内から出土した一括遺物は古くは 14 世紀中頃～ 15 世紀中頃までの陶磁器が保管されていたものと推定され、主体となる時期を検討した場合、15 世紀初頭～ 15 世紀中頃が予想されるところである。倉庫の使用時期を考えるとすれば第Ⅲ期の 1453 年以降頃から始まり、倉庫機能の停止時期が第Ⅲ期の 1459 年頃として考えられるが一応、当該期に設定した。土壙ＳＫ 02 は石灰岩の窪みに二次的に包含層を持ち込んだ造成土を主体とするが、下層においては高麗系灰色瓦の破片が多量に包含する層が確認されている。土壙ＳＫ 02 直上にＳＡ 15・ＳＡ 31 の石積みや土壙ＳＡ 01 が存在することなどから第Ⅱ期～第Ⅲ期にかけて存在した遺構として解釈した。

註および引用文献

註７．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2009年３月。

註８．1459 年の倉庫などの失火については、明實録之部　英宗実録、巻 301 に「天順三年三月癸未朔〔甲申〕禮部奏、琉球國中山王尚泰久奏稱　本国土府失火、延焼倉庫銅銭貨物 ･･･ 云々」の記録がある。日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における　日本史料集成明實録之部 1』　国書刊行会　1979 年。

註９．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 47 集『首里城跡－下之御庭首里森御嶽地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2009 年３月。

註10．沖縄県文化財調査報告書第 132 集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会 1998 年３月。

第Ⅲ期（15 世紀中頃）

石積みSA08（外面）・SA10（内面）、SD04-A（外面）・SA18-A（内面）、SA17（外面）・SA18-B（外面）・SA25-A（外面）、SA32

御嶽石積みSA25-B

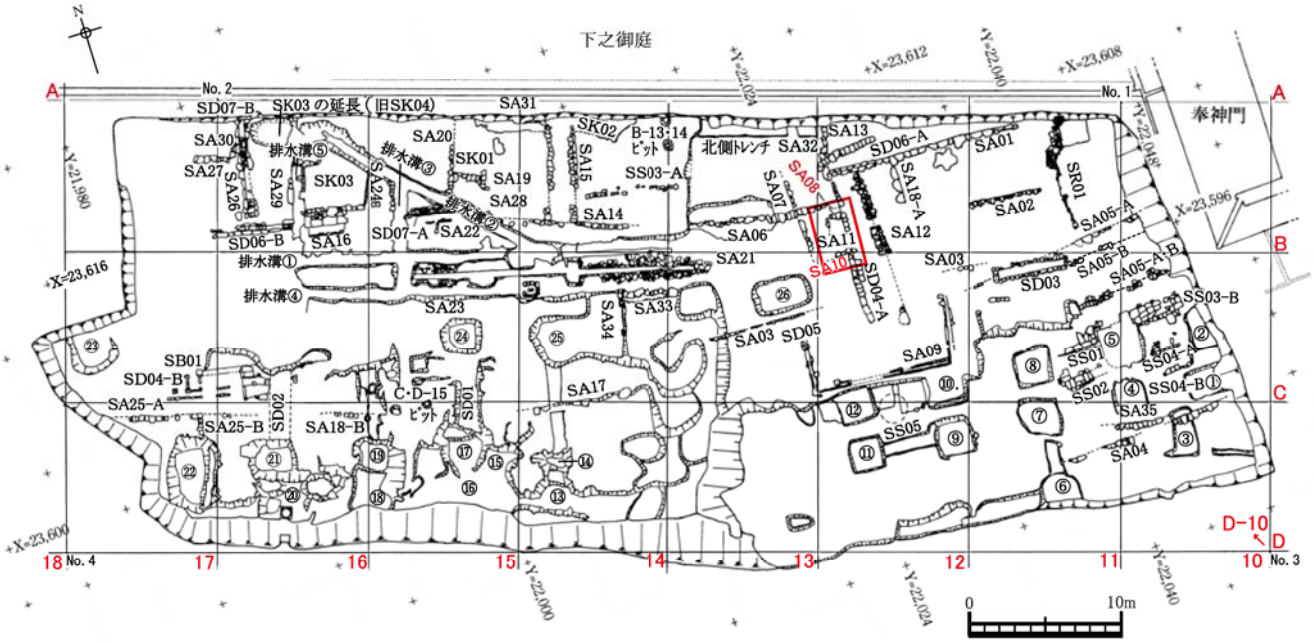
倉庫石積み 及び階段SA19・20、SA28

土壙SK01（倉庫内部）

※土壙SK01、石積みSA19・20、SA28 は 1459 年に失火した倉庫のひとつとみられる。

第32図　京の内北地区第Ⅲ期（15世紀中頃）遺構の推定復元

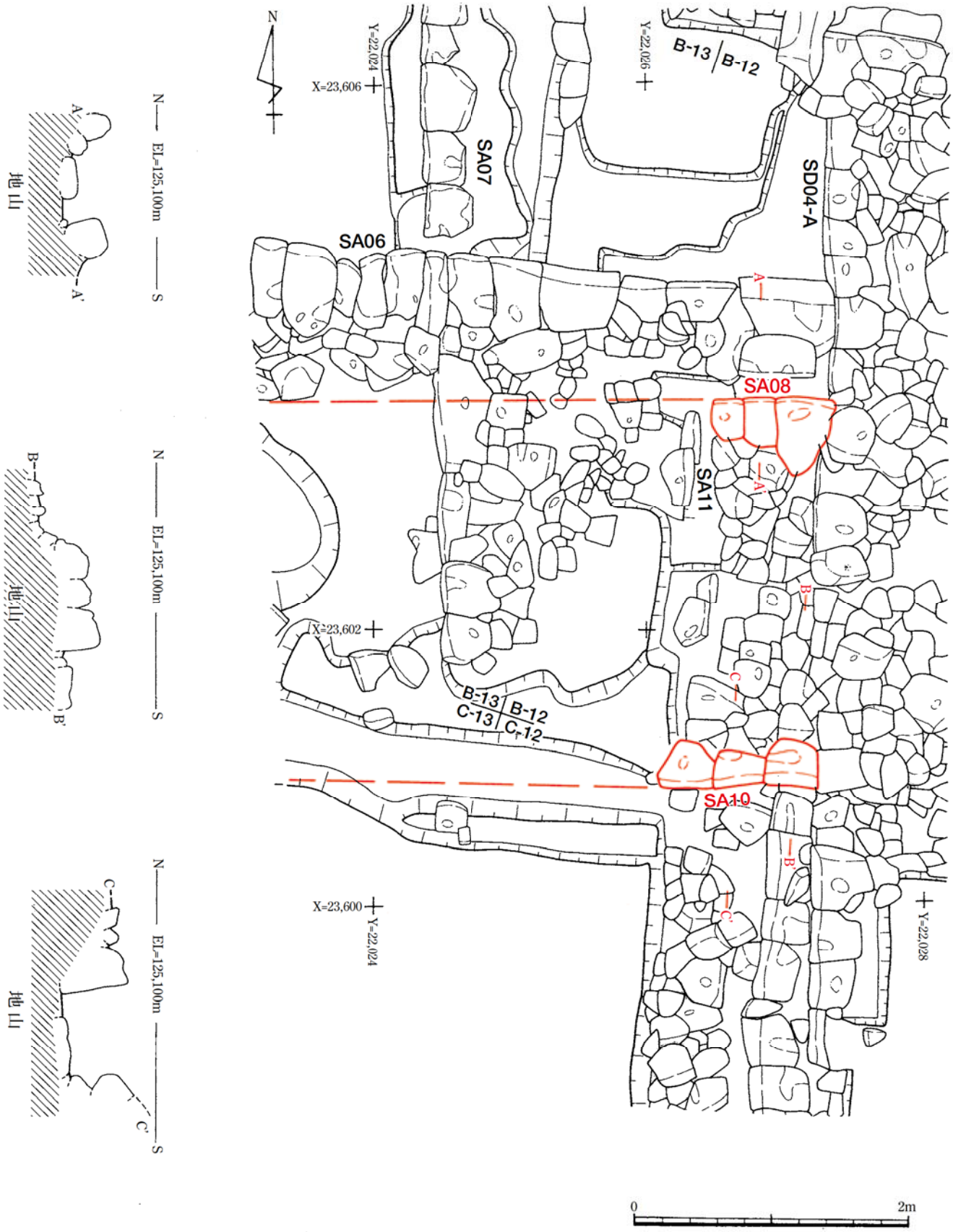
(外面)、SA33・SA34(内面)



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 14 表　第Ⅲ期　SA08、SA10　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－12 SA08 第32・33図	83cm 2m80cm 22cm	琉球王国時代の東西に延びる区画石積みの東端部分で、同時期のSD04－A（第41図）の上に被さるようにすり付けられている。なお、SD04－Aの石積みの一部を取り外してから当該遺構をすり付けている。造成土盤の上から切り石を設置して石積みをおこなう。15C中頃？（外側のトレンチ内より白磁八角杯・塼瓦などが出土）。	N89° 15′ W	切り石積み 105°	23～37cm 22cm 28～55cm	SA08が外面でSA10が内面とみられる。第Ⅳ期のSA11（第48図）と第Ⅴ期のSA13（第60図）の中間に位置し、SA11・SA13よりも古い時期の石積み。全体的に根石のずれにより外方向に傾く。
B・C－12 SA10 第32・33図	1m53cm 2m80cm 26cm	上記の石積みSA08と対応する琉球王国時代の区画石積みの東端部分で東西方向に短く残る。岩盤や礫を敷いた土盤の上に根石を設置。根石はやや雑に加工される。15C中頃。	N90° 20′ W	切り石積み 78°	30～40cm 26cm 20～29cm	同時期のSD04－A（第41図）より当該遺構は上位に位置することから時期的には新しい時期となる。SD04－Aの石積みの一部を取り除いてすり付ける。

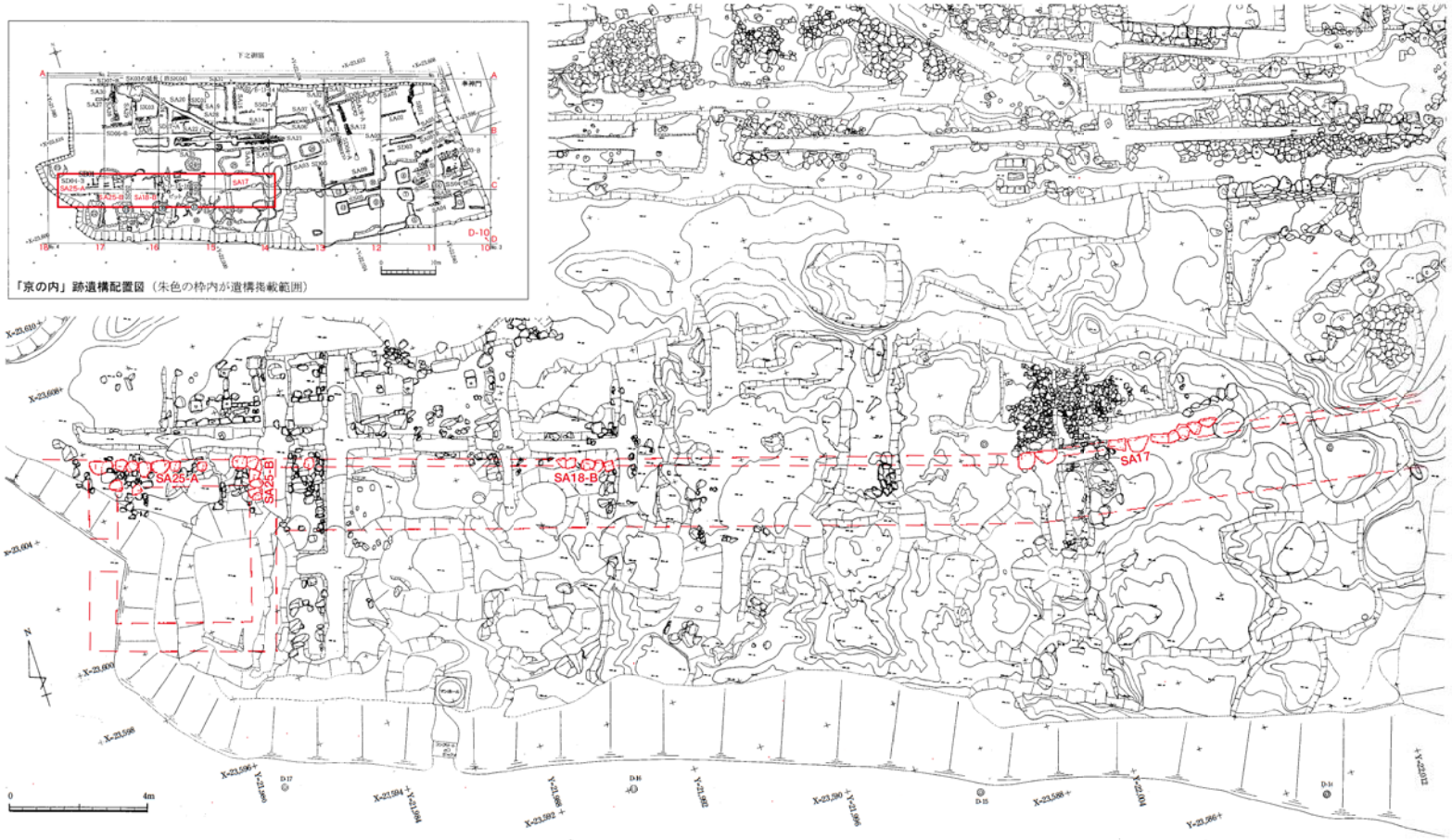


第 33 図　B･C-12 石積みSA08･SA10　平面及び断面

図版 23　上：B･C－12　SA08、SA10 ほかを南側上空より望む
　　下：　同上　　SA08（左側）、SA10（右側）　西より東側を望む

図版 24　上：B･C－12　SA08（奥）、SA10（手前）　南より北側を望む
　　下：　同上　　SA08（右側）、SA10（左側）　東より西側を望む

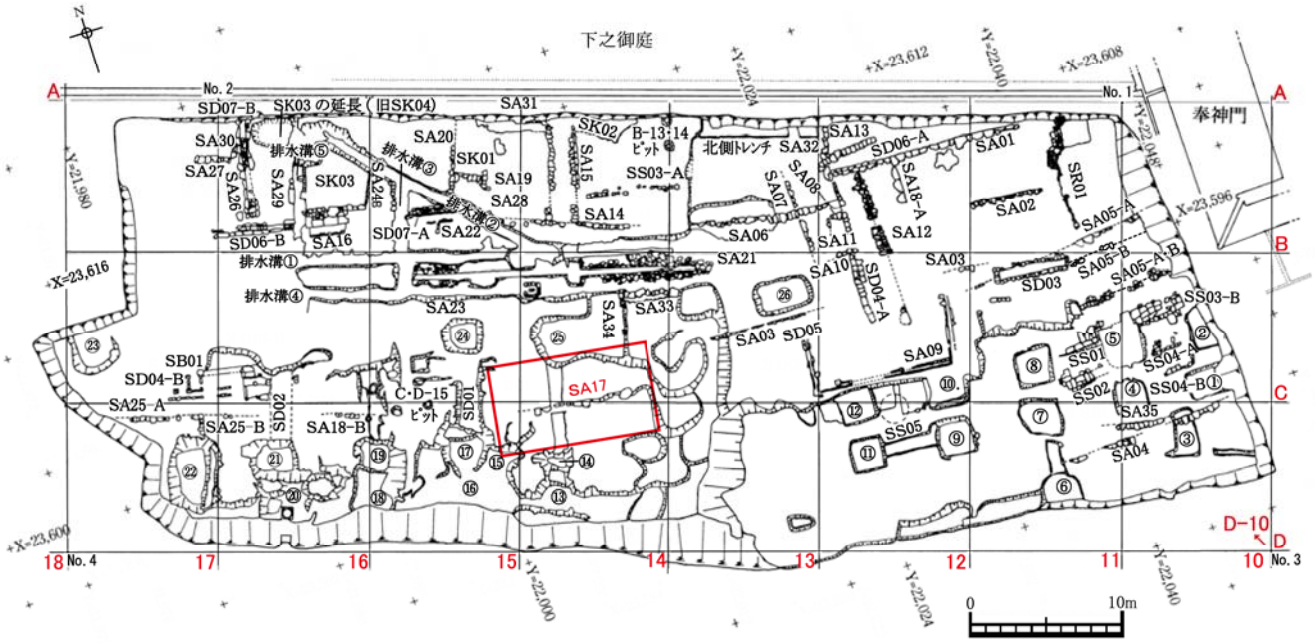
図版 25　C・D－14 SA17、D－16 SA18－B、D－17 SA25－A・B を東側上空より望む



第34図　C・D-14～17 石積みSA17、SA18-B、SA25-A・B　平面配置図

図版26　C･D-14 SA17、D-16 SA18-B、D-17 SA25-A･Bを北側上空より望む

図版 27　上：C･D-14 SA17、D-16 SA18-B の一部を西側上空より望む
下：D-16 SA18-B、D-17 SA25-A･B を北側上空より望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第15表　第Ⅲ期　SA17　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
C・D－14 SA17 第32・35・36図	6m75cm 70cm 49cm	琉球王国時代の東西方向に延びる区画石積み。造成土と岩盤の上から石積みをおこなう。根石は切り石であるが、加工は粗雑である。15C中頃。当該遺構（SA17）の一部は琉大法文校舎の基礎工事の際に破壊。第Ⅴ期まで存続。	N80°45′W	切り石積み 90°	25～69cm 20～49cm 20～70cm	SA18－B（第37図）、SA25－A（第38図）とは一連の区画石積みとみられ、調査区内で東西方向に延びる区画石積みでは最長のものとみられる。根石の中には刻印のある石が2点（第36図）確認されている。

第35図　C･D-14 石積みSA17　平面及び層序

C･D-14 SA17トレンチ内の層序

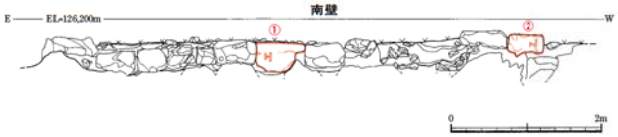
第1層a…赤褐色混礫土層(攪乱層。北壁の中央より東側と排水溝の南側に堆積。)
第1層b…黄白色礫層(攪乱層。コーラル。北壁の中央から東側に堆積。)
第1層c…赤褐色土層(攪乱層。北壁の東側で部分的に残存。灰黒土層が混入。)
第2層…　赤褐色混礫土層(南壁の西端で石積みの根石直下から検出された造成土。)
第3層…　茶褐色混礫土層(灰黒色土層が混入。南壁の西端の根石直下に堆積した造成土。)
第4層a…灰黒色土層(地山の赤褐色土と炭が混入し、南壁の西端及び北壁の西側で検出。)
第4層b…褐色混礫土層(炭混じりの層。遺物包含層とみられる。北壁の西側のみ堆積。)
第4層c…灰褐色土層(地山の赤褐色土が混ざる。南壁の西端にのみ堆積。)
第4層d…灰黒色土層(北壁の西側にのみ堆積。)
第5層a…茶褐色混礫土層(主に排水溝内の北側に堆積する。部分的に北壁の東端と東壁でみられる。)
第5層b…赤褐色混礫土層(主に石積みの根石直下から検出。排水溝内の北端で僅かに堆積する。)
第6層…　赤褐色土層(地山。石積みの根石直下から検出。北壁と南壁に途切れながら堆積する。東壁では僅かにみられる程度である。)

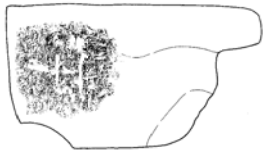
C･D-14 排水溝内及びSA17トレンチの層序

攪乱層a…暗褐色混礫土層
攪乱層b…黒褐色混土礫層(瓦、コンクリート混じり)
攪乱層c…灰褐色混礫土層
攪乱層d…明褐色混礫土層(排水溝北側では砂が多く混じり、明褐色混砂土層となる。)
攪乱層e…淡灰色混礫土層
攪乱層f…淡褐色混礫土層(SA17トレンチ東壁で確認され、地山の赤褐色土が混入する。ガラス・灰瓦・埠瓦が出土)
攪乱層g…淡茶色混礫土層
攪乱層h…淡茶色混礫土層(地山の赤褐色土が混入。ガラス片が出土)

※①布掘り【三省堂大辞林】
基礎工事で、建物の壁などに合わせて細長く溝状に土を掘ること。

②布掘り【土木用語辞典】
一般に布型に長く掘削することで、延長の長い土止め壁の基礎や、家屋の土台基礎などの根掘りで、基礎幅に従って長く続けて掘削すること。

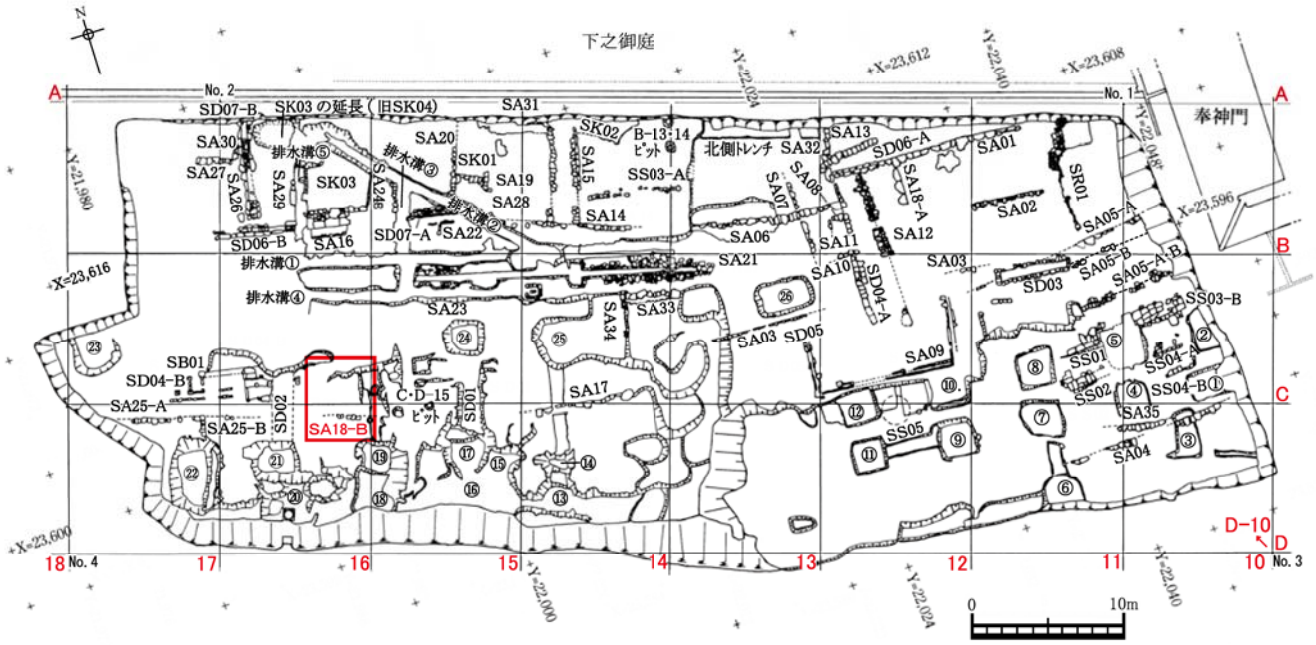




第36図　C・D−14 石積みSA17　外面の刻印石

図版28　上左：C・D−14 SA17　南壁（北より）、上右：C・D−14 SA17　南壁（北より）
下　：同 上 SA17　南より北側を望む

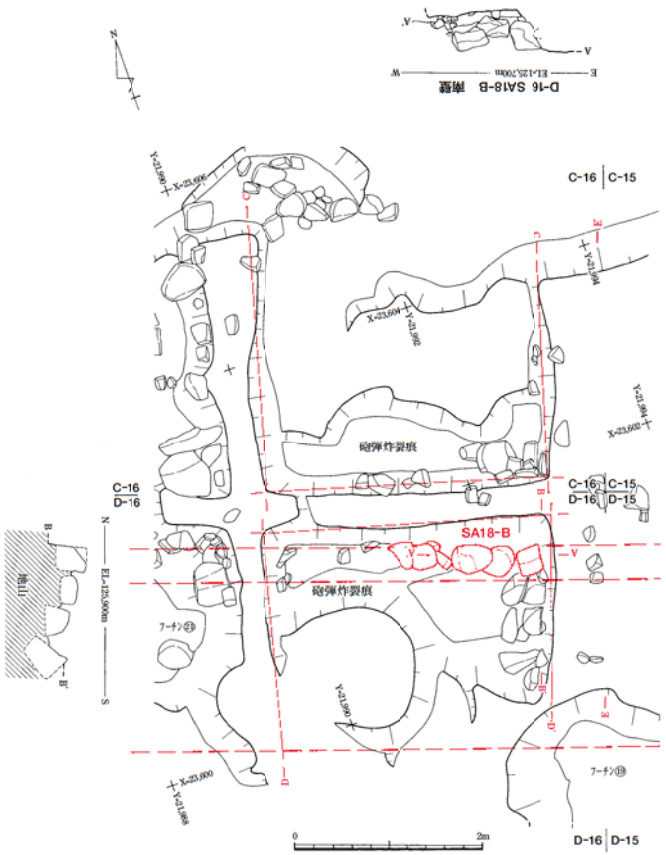
図版 29　上：C･D-14 SA17　東より西側を望む
　　下：　同上　　SA17　西より東側を望む

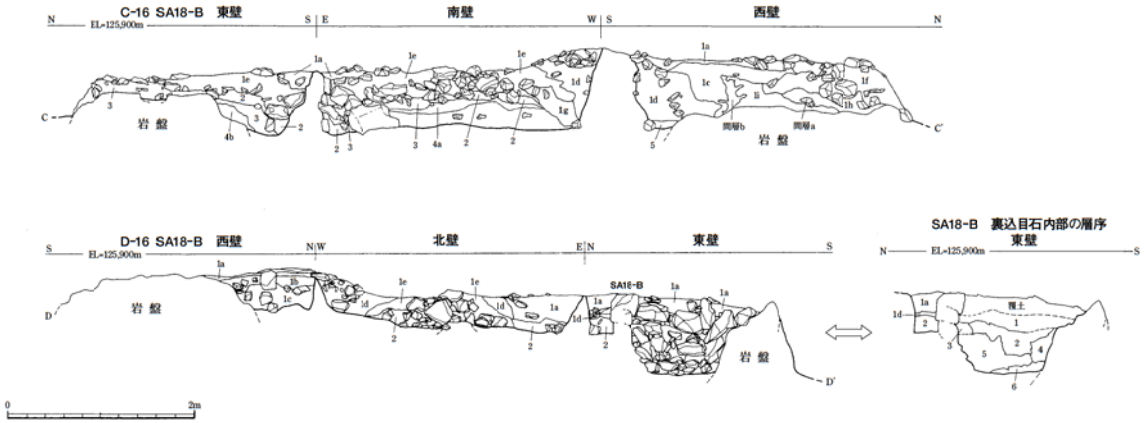


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第16表　第Ⅲ期　SA18－B　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
D－16 SA18－B 第32・37図	1m63cm 30cm 26cm	琉球王国時代の区画石積みで東西方向に残る。平面観がやや直線的で東西方向に短くのこる。造成土や野面の石を基礎として、その上から粗加工の切り石を根石として設置している。15C中頃～19C後半（第Ⅴ期）。	N70°　15′　W	切り石積み 83°	27～38cm 26cm 27～30cm	SA17（第35図）、SA25－A（第38図）と一連の区画石積みであったものとみられ、東西方向に延びる区画石積みで最長のものとみられる。





C-15・16、D-15 の層序と D-16 SA18-B 関連の層序

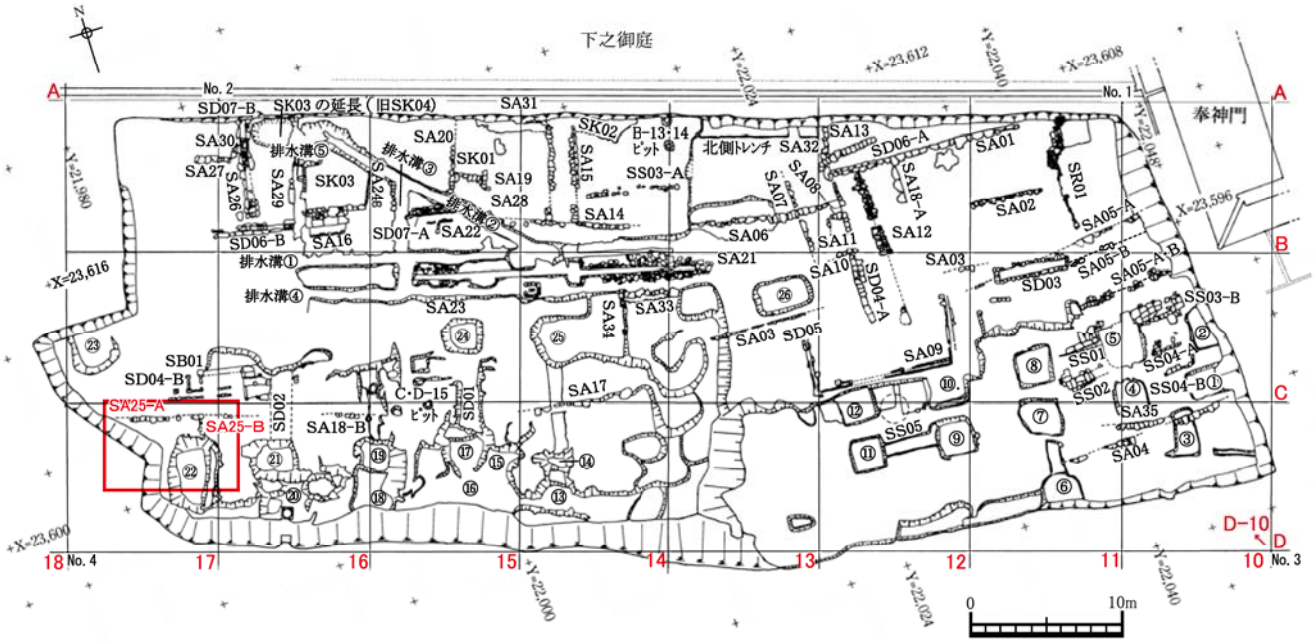
第１層 a… 黄白色礫層（覆土のコーラル）。主にC-16の西壁とD-16の東壁に集中。
第１層 b… 茶褐色混礫土層（攪乱）細かい茶褐色の土砂と炭が混入する。D-16西側にのみ堆積。
第１層 c… 灰褐色混礫土層（攪乱）C-16の西側にのみ堆積。
第１層 d… 暗褐色混土礫層（攪乱）C-15の東南隅とD-16東壁の北隅及びC·D-15に堆積。
第１層 e… 黄褐色混土礫層（攪乱）C-16の東壁と南壁及びD-16西壁から北壁の西隅にみられる。
なお、D-16北壁と西壁の堆積土には炭が混入している。
第１層 f… 灰黄色混礫土層（攪乱）C-16西壁の北半分にみられる。
第１層 g… 茶褐色混礫土層（攪乱）C-16南壁の西側にのみ堆積。
第１層 h… 灰褐色土層（攪乱）C-16西壁の北半分にみられ、赤土が混入。
第１層 i… 褐色土層（攪乱）C-16西壁中央にみられる。部分的に黒色土（間層b）が混ざる。
第１層 j… 明褐色土層（攪乱）C-16南壁の東隅に僅かに堆積する。
間層 a… 赤色土層（攪乱）C-16西壁、第1層hと第1層iの間に堆積。
間層 b… 黒色土層（攪乱）C-16西壁中央付近に斑根状に堆積。
第２層… 灰黒色土層（攪乱）C-16東壁南隅と南壁の中央付近及びD-16北壁の東側から中央部にかけて途切れながら堆積する。
第３層… 上位の黒色土層（遺物包含層。炭・獣骨・貝殻を多く含む）。主にC-16の東壁に堆積するが、南壁では部分的に堆積する。
第４層 a… 淡褐色混礫土層。C-16南壁に堆積。
第４層 b… 灰褐色混礫土層。C-16東壁の中央付近に部分的にみられる。
C·D-15では途切れながら堆積する。
第５層… 下位の黒色土層。地山の赤色土が混入する。主にC-16の南壁から西壁の一部（南隅）に堆積。
第６層… 黄褐色混礫土層。地山の赤土に石灰岩の小礫が混入する。C-15西壁でのみ確認される。

SA18-B　裏込目石内部の層序

覆土…　黄白色礫層（C·D-16第1層と同一のコーラル層）
第１層…淡灰色混土礫層
第２層…暗褐色混土礫層
第３層…淡黄色混土礫層
第４層…灰褐色混土礫層
第５層…淡黄色混土礫層
第６層…黒褐色土層

第37図　D-16 石積みSA18-B　平面及び層序

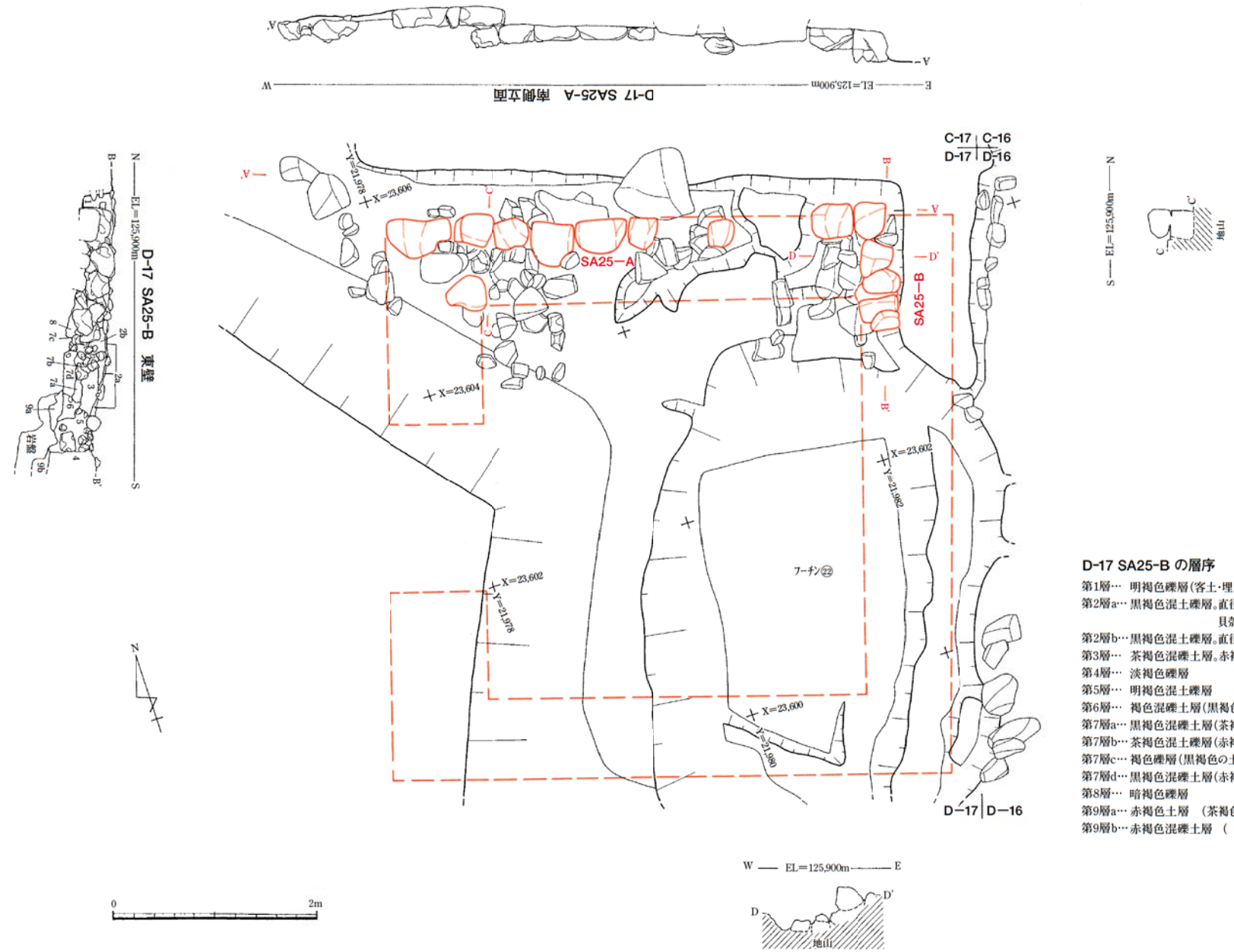
図版30　上段　：D-16 SA18-Bを西側上空より望む
中段左：同上 SA18-B　西より東側を望む、中段右：D-16 SA18-B　東より西側を望む
下段左：同上 SA18-B　南より北側を望む、下段右：同上 SA18-B　北より南側を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第17表　第Ⅲ期　SA25-A、SA25-B　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
D－17 SA25－A 第32・38図	4m86cm 1m37cm 40cm	琉球王国時代の区画石積みで東西方向に残るが、区画石積みを拝所（御嶽）の石積みとして利用。残存石積みの平面観は逆「コ」の字状で東西方向に長く、両端に短く残っている。造成土や岩盤の上に粗加工の根石を設置。15C中頃～19C後半（第Ⅴ期）。	N73°　23′　E	切り石積み 86°	26～52cm 14～32cm 26～41cm	SA17（第35図）、SA18－B（第37図）と一連の区画石積みであるが、拝所（御嶽）としての利用が考えられる。当該遺構（SA25－A）の東側でSA25－Bが上位にすり付けられている。
D－17 SA25－B 第32・38図	1m22cm 2m16cm 22cm	琉球王国時代の区画石積みにすり付けられた拝所（御嶽）東側の外面石積み。SA25－Aの上位にすり付けられている。そのため、平面観が「L」字状となる。SA25－Aの栗石や造成土盤の上に粗加工の切り石を根石として設置。	N16°　15′　E	切り石積み 91°	19～38cm 18cm 28～38cm	SA25－Aの石積みの角度を0°と設定した場合、SA25－Bは90°（直角）となる。切り石の根石は東側に傾いている。15C中頃～後半。



D-17 SA25-B の層序

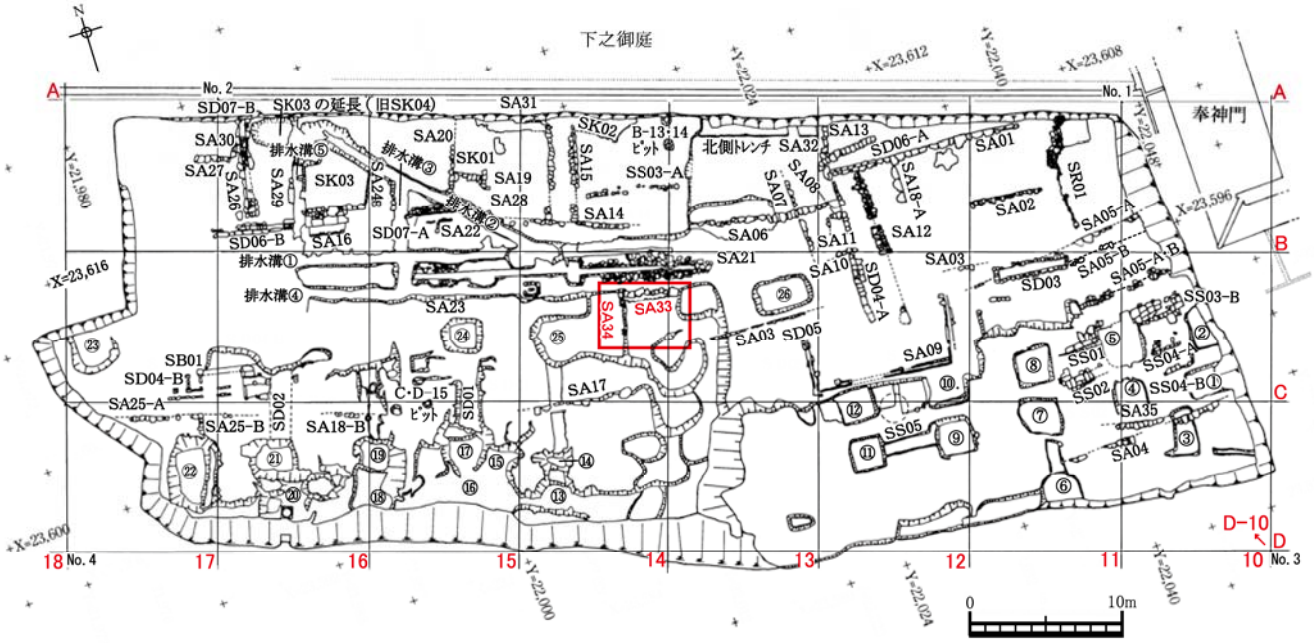
第1層… 明褐色礫層(客土・埋土)
第2層a… 黒褐色混土礫層。直径3cm程度の琉球石灰岩の小礫を多く含み、若干、赤褐色の土が混入。貝殻片、魚骨、獣骨片を含む遺物包含層。
第2層b… 黒褐色混土礫層。直径5cm程度の琉球石灰岩の礫を含む。赤褐色の土が僅かに混ざる。
第3層… 茶褐色混礫土層。赤褐色の土が多く混ざり、僅かに黒褐色土もみられる。
第4層… 淡褐色礫層
第5層… 明褐色混土礫層
第6層… 褐色混礫土層(黒褐色の土混じり)
第7層a… 黒褐色混礫土層(茶褐色の土混じり)
第7層b… 茶褐色混土礫層(赤褐色の土混じりで、直径10cm程度の石灰岩礫が混入)
第7層c… 褐色礫層(黒褐色の土混じり)
第7層d… 黒褐色混礫土層(赤褐色の土の塊が少量混入)
第8層… 暗褐色礫層
第9層a… 赤褐色土層 (茶褐色の土混じり) 地山
第9層b… 赤褐色混礫土層 (〃) 地山

第38図 D-17 石積みSA25-A・B 平面及び層序

図版 31　上：D－17　SA25－A・B（写真右側）ほかを北側上空より望む（遠景）
　　下：同上　SA25－A・B（写真右側）ほかを北側上空より望む（近景）

図版 32　上：D-17 SA25-A・B を南側上空より望む
　　下：同上　SA25-A・B を南より北側を望む

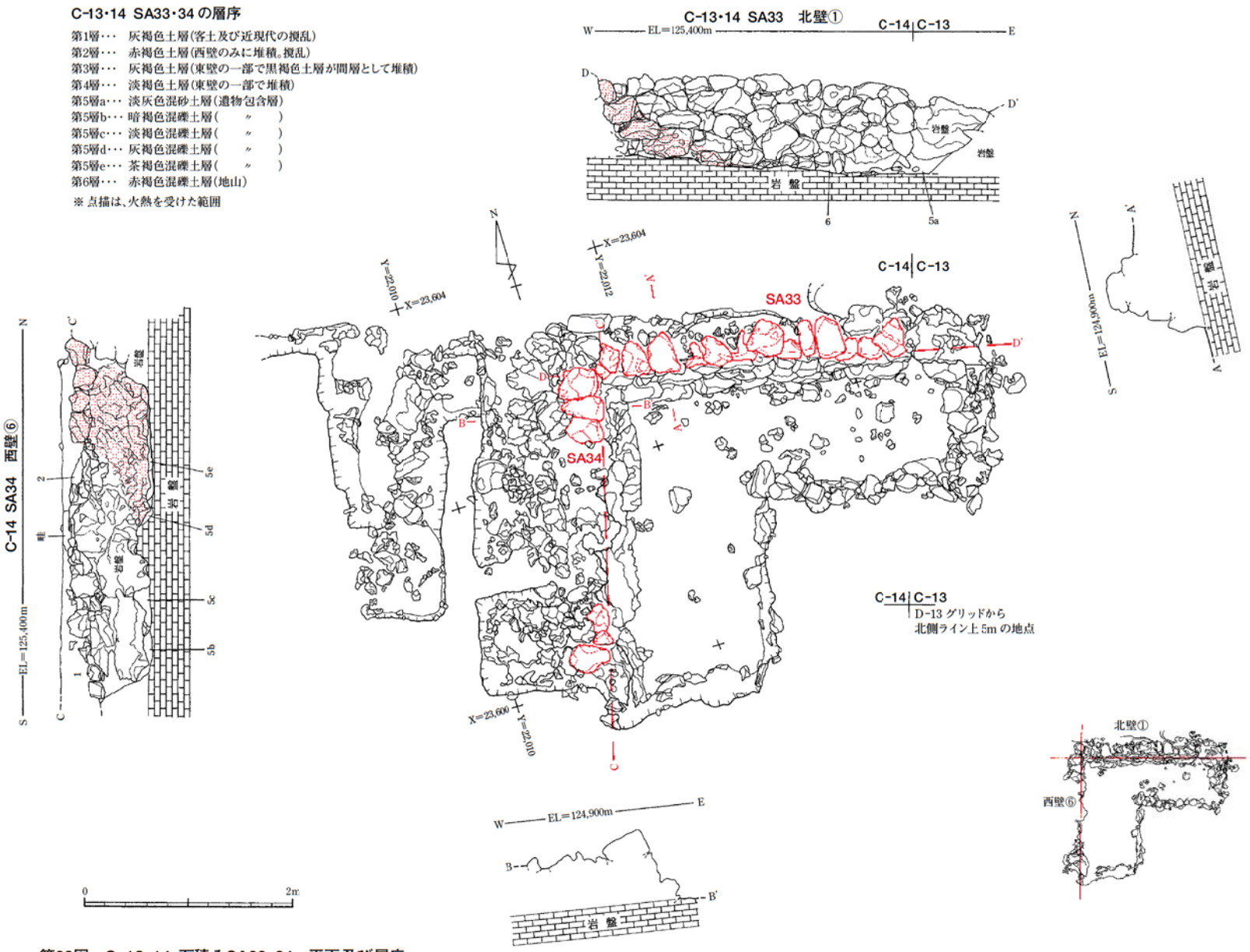
図版 33　上：D-17 SA25-A・B ほかを西側上空より望む
　　下：同上　SA25-A・B　西より東側を望む



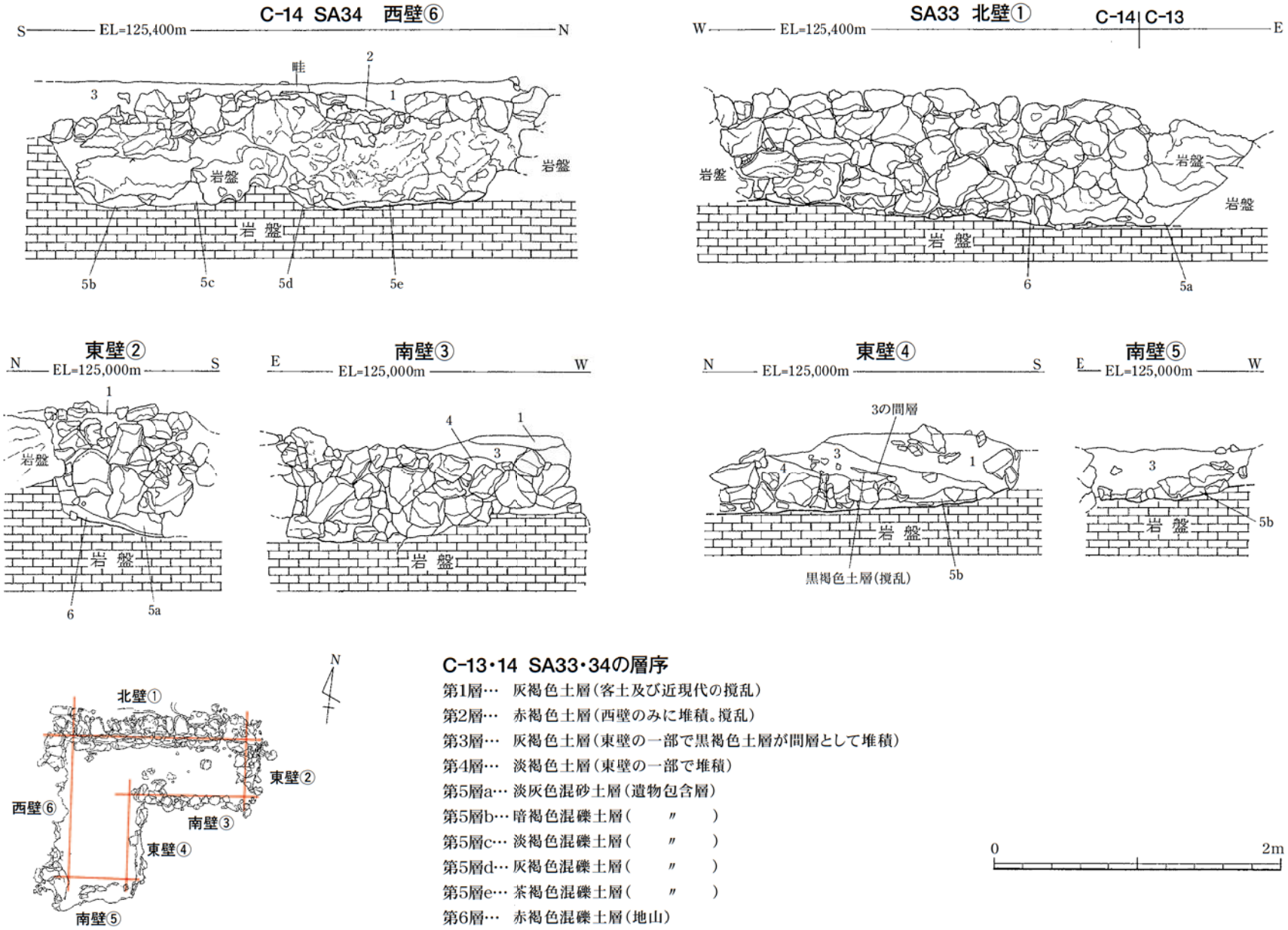
「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第18表　第Ⅲ期　SA33、SA34　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
C－13・14 SA33 第32・39・40図	3m00cm 73cm 85cm	琉球王国時代の区画石積みで、SA34と直交する。その為、SA33とSA34の残存する平面観は逆「L」字状となる。東西軸（SA33）と南北軸（SA34）の方向に短く残る。東西方向の石積みの両端が欠落。造成土や岩盤の上から粗加工の野面様の石積みを施す。15C中頃で、同期のSA10（第33図）が機能しなくなった直後の時期まで存続か。	N78°　10′　W	粗加工の野面石積み。 70°	13～48cm 12～30cm 29～39cm	勾配は根石から二番石までの勾配が65°　である。SA34が西端ですり付いている。同時期のSA08・SA10（第33図）、第Ⅳ期のSA14（第49図）、第Ⅴ期のSA21・SA23（第64図）が間接的に関係する遺構とみられる。SA33・34の内側に土壙SK01（1459年の火災で焼失した倉庫内にあった陶磁器片などを火事場清掃の際に廃棄場として使用）出土の陶磁器と当該遺構出土の陶磁器が接合できた。
C－14 SA34 第32・39・40図	2m92cm 94cm 75cm	琉球王国時代の区画石積み。南北方向に途切れながらSA33と直交する。粗加工の根石下端は岩盤であり、岩盤を深さ50～60cm程度掘削した後に、岩盤の縁沿いに根石を直接配置している。15C中頃。	N18°　55′　E	粗加工の根石。 84°	12～24cm 12～24cm 20～40cm	根石のみ残存。SA33に北端がすり付く。関連する遺構として上記表中のSA08・SA10、SA14、SA21以外に南側に位置するSA17（第35図）が間接的に関係（SA17にすり付けられていく可能性がある）する遺構とみられる。



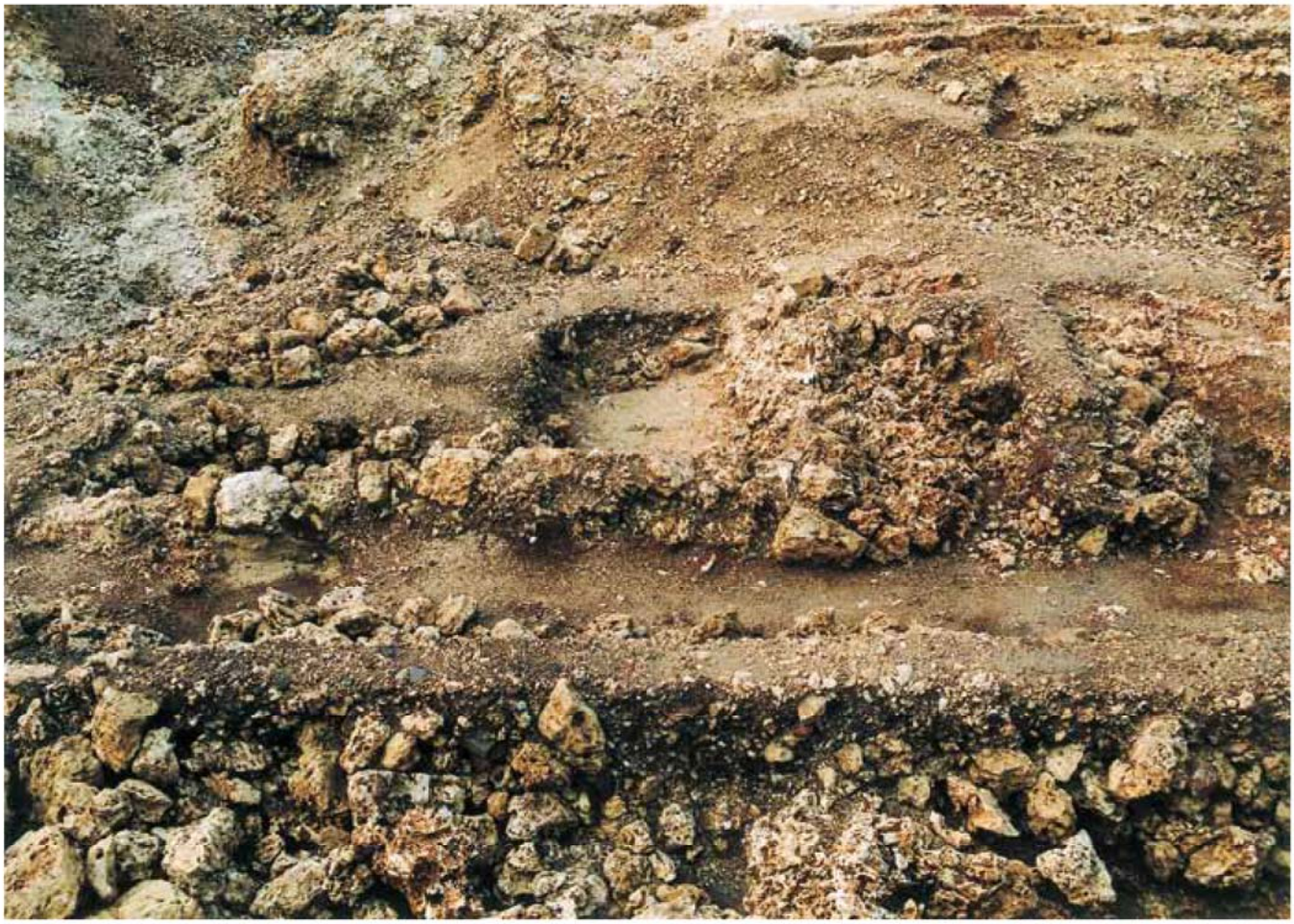
第39図　C-13・14 石積みSA33・34　平面及び層序



C-13・14 SA33・34の層序

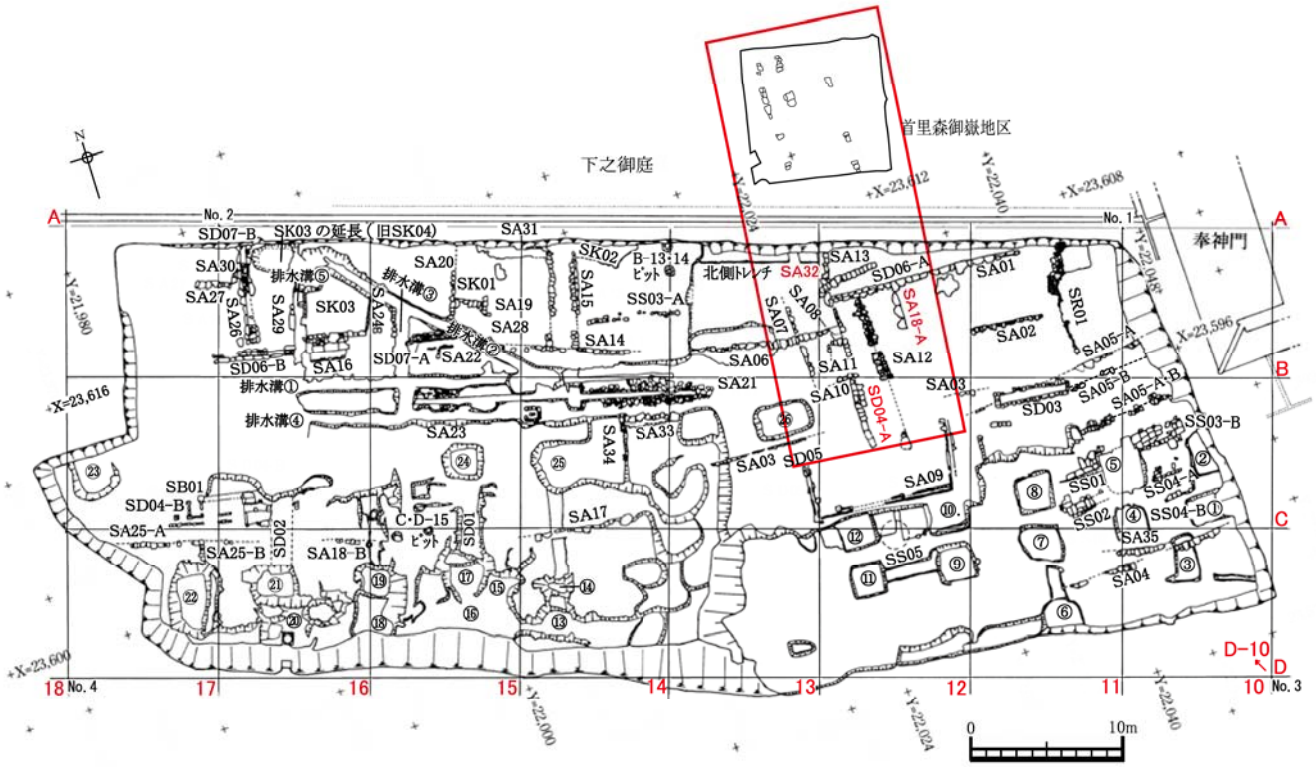
第1層… 灰褐色土層(客土及び近現代の撹乱)
第2層… 赤褐色土層(西壁のみに堆積。撹乱)
第3層… 灰褐色土層(東壁の一部で黒褐色土層が間層として堆積)
第4層… 淡褐色土層(東壁の一部で堆積)
第5層a… 淡灰色混砂土層(遺物包含層)
第5層b… 暗褐色混礫土層(〃)
第5層c… 淡褐色混礫土層(〃)
第5層d… 灰褐色混礫土層(〃)
第5層e… 茶褐色混礫土層(〃)
第6層… 赤褐色混礫土層(地山)

第40図 C-13・14 石積みSA33・34 立面及び層序



図版 34　上：C－13・14　SA33・34　西より東側を望む
　　下：　同上　　SA33・34　北より南側を望む

図版 35　上：C－13・14　SA33・34　東より西側を望む
　　下：　同上　　SA33・34　南より北側を望む

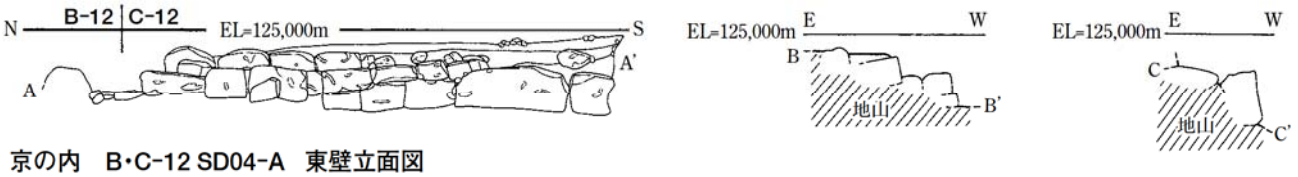


「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

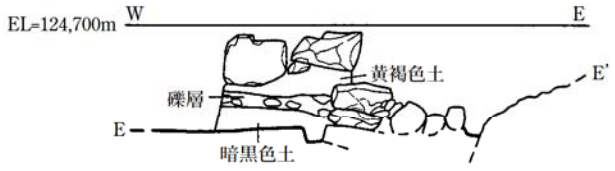
第19表　第Ⅲ期　SA18－A、SA32、SD04－A　遺構観察表

地　区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定時期など	主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚　み 控え長	備　考 （関連遺構・遺構の重複）
B－12 SA18－A 第32・41図	2m56cm 56cm	南北に延びていた琉球王国時代の区画石積みでSA32・SD04－Aとセット関係にある。内面がSD04－Aとみられる。SA01（第25図）の栗石を除去後に削平された岩盤や土砂の上から大型の粗加工の切り石を根石として配置し使用する。15C中頃。	磁北と重なり0°である。	切り石積み	60～88cm — 40～56cm	SD04－Aとほぼ平行に存在し、SD04－Aが外面でSA18－Aが内面とみられる。両者の幅は側溝を含めて464cmで、側溝を除外した幅は432cmであった。当該遺構は下之御庭首里森御嶽下部検出の基壇状遺構（第42図）とした石積みに接続する。
B－12 SA32 第32・41図	1m27cm 37cm —	南北方向に延びていた琉球王国時代の区画石積みで、SD04－Aと一連の石積みである。当該石積みの外面が上記したSA18－Aでセット関係にある。造成土盤の上から丁寧に加工された切り石を設置。16C～18C。	N1°15′W	切り石。 —	35～40cm 未検出 31～37cm	第Ⅴ期のSA13（第60図）と背中合わせで隣接する（SA13石の面は西側を向く）。SD04－Aとは一連のものとみられる。当該遺構も下之御庭首里森御嶽下部古石積み（第42図）に接続する。
B・C－12 SD04－A 第32・41・42図	4m82cm 49cm 25cm	南北に延びる区画石積みにすり付けられた排水溝で縦断面が「L」字状となる。上記したSA32と繋がる一連の石積みである。SA18－Aとセット関係にある。石積みは造成土の上から切り石を設置し区画石積みと排水溝を含めたものを一連の遺構とみなして「SD04－A」とした。15C中頃。	N1°15′E	粗加工の根石。 85°・89° 一番石 83°	14～64cm 14～51cm 15～30cm	区画石積みの根石は勾配79°であった。区画石積み下場からSD04－Aの縁までの溝幅は49cmであった。当該期のSA32、SD06－A、第Ⅴ期のSA06（第59図）とも関連する。SA06東端の石積みはSD04－Aにすり付ける際に石の隅を「L」字状に抉って排水を確保。SD04－Aの存続時期は長期間使用か。

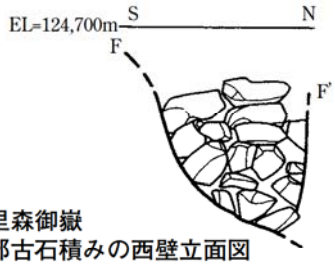
第41図　下之御庭首里森御嶽地区 B･C-12 石積みSA18-A･SA32、排水溝SD04-A　平面図



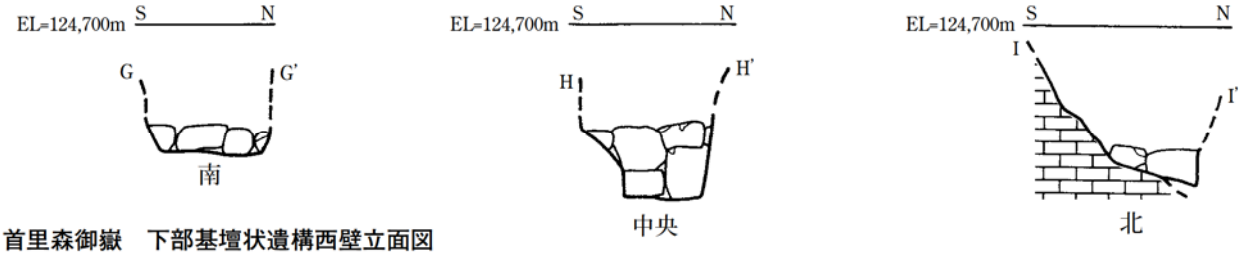
京の内　B･C-12 SD04-A　東壁立面図



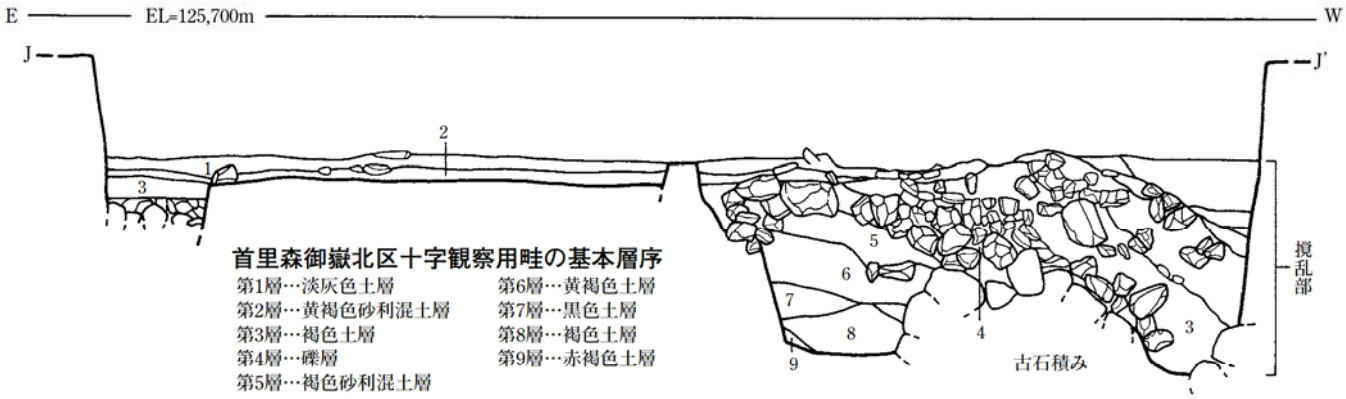
首里森御嶽　上部石積みと下部古石積みの北壁立面図



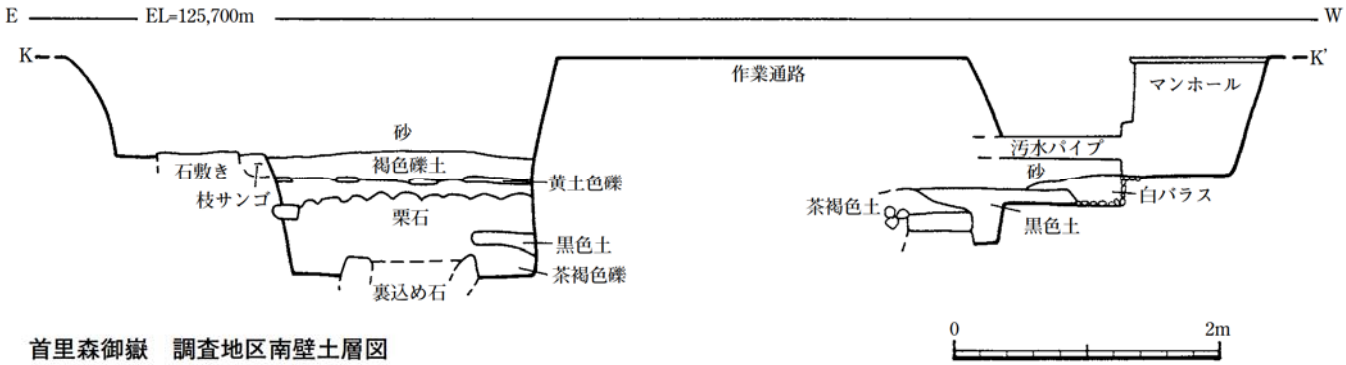
首里森御嶽
下部古石積みの西壁立面図



首里森御嶽　下部基壇状遺構西壁立面図



首里森御嶽　北グリッド中央畦南壁土層図



首里森御嶽　調査地区南壁土層図

第42図　下之御庭首里森御嶽地区及び京の内地区 B･C-12 SD04-A　立面及び層序

図版 36　上：平成 9(1997)年の下之御庭首里森御嶽地区　調査前の状況(南から)
　　下：　　同上　　発掘調査状況

図版 37　下之御庭首里森御嶽地区　遺構検出状況（①上部：石積み、②下部：古石積み）

図版 38　上：下之御庭首里森御嶽地区　遺構検出状況（①上部：石積み、②下部：古石積み、③塼敷き縁石）
下：　　同　上　　遺構検出状況（下部：基壇状遺構）

図版 39　B･C－12 SA18－A、SA32、SD04－A ほかを南側上空より望む

図版 40　B･C－12 SD04－A　南より北側を望む

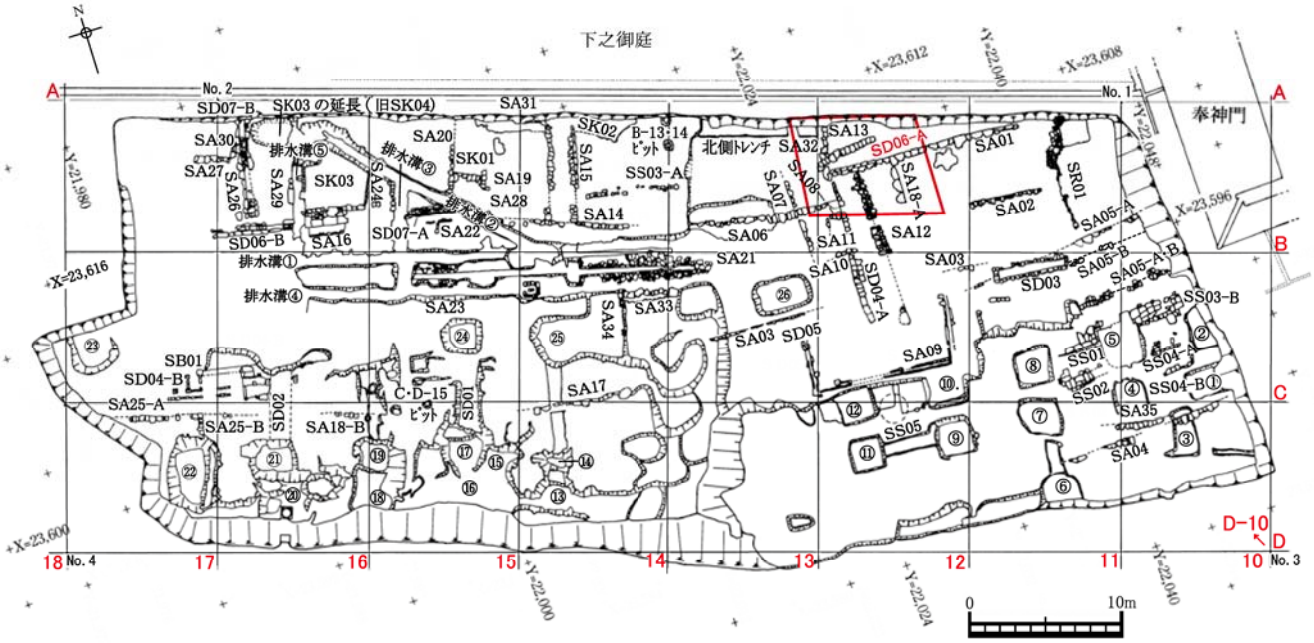
図版 41　上：B･C－12 SD04－A、SA32　北より南側を望む
　　下：　同 上　SD04－A　南壁（北より）

図版 42　上：B･C－12 SD04－A　南壁と西壁（東より）
　　下：　同 上　SD04－A　東壁（西より）

図版 43　上：B･C－12 SD04－A　東より西側を望む
　　下：　同 上 SD04－A　南より北側を望む

図版 44　上：B-12 SA18-A　西より東側を望む
　　下：同上 SA18-A　東より西側を望む

図版 45　上：B-12 SA18-A　北より南側を望む
　　下：同 上 SA18-A　南より北側を望む



「京の内」跡遺構配置図（朱色の枠内が遺構掲載範囲）

第 20 表　第Ⅲ期　SD06-A　遺構観察表

地区 遺構番号 挿図番号	残存長 残存幅 残存高	性格・形状・工法・機能の推定 時期など	主軸方位	石積み 種類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長	備考 （関連遺構・遺構の重複）
B－12 SD06－A 第32・43図	3m87cm 47cm 15cm	琉球王国時代の区画石積みに付属する排水溝の底板。底板は西側から東側へ傾斜する。底板の傾斜は勾配7°で東側の岩盤に向かって下っている。削平された岩盤や栗石の上に底板を設置。底板は板状に加工した扁平な切り石を使用。16C後半～。	N91°45′W	板状の切り石。	22～53cm 7～15cm 34～57cm	第Ⅴ期のSA13がSD06－Aの上位にある。当該期のSD04－Aからの雨水はSA32の石積みコーナー（後続期にあたる第Ⅴ期のSA06の時期にはSA06の東端の切り石下端の角を抉った部分を流れる。SA13の石積みのコーナー）に雨水がぶつかって当該遺構の上を流れて、周辺の栗石や岩盤の上に排水される。流れ出た排水は石灰岩に自然浸透させる工法を採用する目的でSD06－Aを設置したものとみられる。当該遺構には調査の結果、縁石が検出されていないことを記す。

第43図　B-12 排水溝SD06-A　平面及び断面

図版 46　B-12 SA18-A、SD06-A ほかを南側上空より望む

図版 47　上：B-12 SD06-A　南より北側を望む
　　下：同上　SD06-A　東より西側を望む

図版 48　上：B-12 SD06-A　北より南側を望む
　　下：同上　SD06-A　西より東側を望む